

成果報告

ルネ・ギル 『最良の生成』
(René Ghil, *Le Meilleur devenir*, 1889)

—— 翻訳と註解の試み ——

森本 淳生* / 鳥山 定嗣** 監修

京都大学人文科学研究所

「ポスト=ヒューマン時代の起点としてのフランス象徴主義」班訳

1. 序 言

詩人ルネ・ギル (René Ghil, 1862-1925) は今日ではマラルメが緒言を寄せた『言語考』(*Traité du verbe* [『語論』]¹⁾) の著者としてかろうじて知られているだけであろう。だが、『言語考』の中で「言語的器楽編成 instrumentation verbale」という独自の詩学を主張したギルの名は、いわゆる象徴主義が隆盛した1880年代から90年代にかけては、毀誉褒貶激しくはあれ、広く人口に膾炙したものだ。理論的著作に比べるとギルの実際の詩作品の方は当時もほとんど評価されず、今日ではほぼ完全に忘れられてしまったと言えようが、それでもギルは自分の理論を具現化するために文字通り一生をかけて唯一の『作品』(*Œuvre*) の制作に励んだのであり、その姿勢には、「『作品』を構成するはずの五つの書のために20年がほくには必要だろう²⁾」と言った若き日のマラルメや『失われた時を求めて』の完成に心血を注いだプルーストをいくらか連想させるものがある。本稿はこの『作品』を構成する最初の詩篇『最良の生成』(*Le Meilleur devenir*, 1889) の日本語訳と註解の試みである。ギルの詩作品がまとまって翻訳されるのはおそらく世界で初めてのことだろう³⁾。

しかし、マイナー詩人のマイナー作品の翻訳など、専門家の蛸壺化した問題関心による自己満足的な企てにすぎないのではないか——。もしかしたらこんな疑念が寄せられるかもしれない

* もりもと あつお 京都大学人文科学研究所 教授

** とりやま ていじ 京都大学大学院文学研究科 准教授

い。それには次のように答えておこう。まず、今日では忘れられているにせよ、ギルは決してマイナーな存在ではない。象徴主義の内実や師マラルメとの関係をめぐって、ジャン・モレアス、ギュスターヴ・カーン、ヴィエレ=グリファン、アルベール・モッケルを初めとする代表的な詩人たちと濃密な論争や集合離散運動をくり広げた当事者のひとりとして、ギルの存在は当時の文学思潮を理解する上で欠かすことができない。たしかに、ヘルムホルツの音響生理学を参照しつつ、語音と色彩と楽器の間には体系的な対応関係があり、来るべき詩作品はそうした理論に基づいて制作されるべきだと主張する「言語的器楽編成」の詩学は実現不可能な理想にすぎないであろうし、後にギルが旗印とした表現を用いるなら、そうした「科学詩⁴⁾」の試みも結局は危うい疑似科学に基づくものと言わざるをえないだろう。それでも、イデアリズムと主観性を軸とした象徴主義や自由詩の主流の傾向に抗して、疑似科学的にはあれ、詩を語音・色彩・楽器といった要素に分解した上で再構成するといった客観的かつ分析的な方法を提示するとともに、ダーウィンの進化論を参照しつつ明確に唯物論的な立場をとった⁵⁾ギルの存在は、異彩を放っているばかりでなく、当時の思潮の全体像を理解する上でも避けて通ることができない。実際、象徴主義がゾラ流の自然主義に対する一種の反動として起こったイデアリズムの運動であったと考えることは、当時行われた言説に即しても、また今日からの通史的な理解としても、一定の妥当性をもってはいるが、たとえば若き日のマラルメが「神」や「魂」、「夢」を喚起しつつも、人間とは「物質の空しい形態にすぎない」と断じたように⁶⁾、広義の象徴主義思潮においてイデアリズムと唯物論の関係は単純な対立関係に還元できない複雑さを内包している。マラルメを信奉し『言語考』で「象徴」を語りながらも、唯物論と進化論の枠組みの中で「生」を歌うことを望んだギル⁷⁾をさらなる補助線として考えるなら、象徴主義は、それをどのように理解するにせよ、より立体的な視野の中で見えてくるはずである。

ここでもうひとつつけ加えておきたいのは、広義の象徴主義研究のある種の偏りの問題である。ボードレール、マラルメ、ランボー、ヴァレリーといった「大物」の作家に比して、1880年代から90年代にかけて象徴主義運動の中核を担った詩人や作家たちの作品研究は大きく遅れている。たしかに、マラルメのテキストはきわめて難解だが、多くの注釈書が存在するから、それらを参照するだけで一定水準以上の理解をえることは決して難しくはない。これに対して、当時の代表的な詩作品——たとえば、モレアスの『情熱の巡礼者』、カーンの『流浪の宮殿』、アンリ・ド・レニエの『古^{いにしえ}のロマネスク詩』——には残念ながらまとまった註解がほとんどなく、正確に読み解くためにはそれなりの労力と時間が必要である⁸⁾。事情はギルについても同様、というよりも、さらに深刻である。何故なら、以下の本文をご覧いただければお分かりいただけるように、ギルの詩の難解さはマラルメ以上であり、フランス人であっても「しばしば長くてつらい分析作業⁹⁾」が必要だからである。個人的な回想をお許しいただくなら、若かりし頃、『言語考』からの関心で1938年刊の三巻本の『全集¹⁰⁾』を入手し読もうとしたときの

挫折は忘れがたい。文字通り歯が立たなかったのである。その意味でも、人文科学研究所象徴主義研究班での輪読の成果をここに示すことができるのは嬉しいのだが、こうした個人的感慨を別にしても、今回のギルの翻訳と註解が学術的な意味で象徴主義の全体像を理解する一助になれば幸いである。

すでに述べたように、本稿は1889年に刊行された第一書『最良の生成』の翻訳と註解の試みであるが、その理解のためにも、あらかじめ『作品』全体の内容についてごく簡単に確認しておくのが有益だろう。幸い、1938年版の『全集』には各書について要約が掲載されているので、ここではそれを訳出して紹介に代えることにしたい¹¹⁾(ただし、ギルは亡くなるまで作品の改訂を行っていたので¹²⁾、以下の要約は『全集』に収められたバージョンに基づいている)。

第一部——『最良の言葉 [Dire du Mieux]』(四書)

最初の三書(『最良の生成』, 『純朴な行い [Le Geste ingénu]』, 『生の願望 [Le Vœu de Vivre]』)は——〈愛〉すなわち原子と原子の親和力という大いなる原動力である原理によって支配された——〈物質〉の進化の様々な側面を展開するが、進化の向かう先は〈最良のもの〉, すなわち〈物質〉の意識的統一性である。

第四書(『利他的な秩序 [L'Ordre altruiste]』)はこの進化をその原理それ自体において取り上げなおす。

1. 『最良の生成』は、進化論の学説に基づいた、〈地球〉と〈諸存在〉の起源から〈人間〉の出現に到る詩篇である。
2. 『純朴な行い』は〈遺伝〉と〈未来〉の重圧を免れた人間のカップル〔の行い〕を、伝説的な〈樂園〉において進展させる。
3. 『生の願望』は〈人類〉の現代——〈社会的人間〉, 〈労働の世界〉, 〈大都市〉とその影響力, 〈港湾〉, 〈銀行〉など——を歌う。
4. 『利他的な秩序』はまず、〈世界〉の物理化学的な〈創造〉についての詩篇であるが、やがて〈人間〉, その胎児としての生, 誕生, 成長, 世界への適応〔を描く〕に到る。〈象徴〉と〈儀礼〉を通過した〈子供〉は、〈科学〉の支配を受け、〈宇宙〉の概念を生み出したが、その同類たちの方は、〈生の願望〉を逸脱させ、〈戦争〉と〈反乱〉, 〈死〉の願望を準備するまでになっていた。

第二部——『血の言葉 [Dire des Sangs]』(四書)

この四書(『人間の足跡 [Le Pas humain]』, 『人間たちの屋根 [Le Toit des Hommes]』, 『世界のイメージ [Les Images du Monde]』, 『人間のイメージ [Les Images de l'Homme]』)は、人間を社会的存在として研究し、神話と宗教を通じて人間の〈意識〉の進化を展開させてみせる。

1. 『人間の足跡』が示唆するのは、原始の人間の生活、人間意識と自然崇拜の生成である。
2. 『人間の屋根』はこの意識の進化を、最初の〈階級〉や〈文化的象徴〉を通してさらに描く。
3. 『世界のイメージ』は壮大な伝説によって始原の神統記を喚起する。
4. 『人間のイメージ』は雄大なフレスコ画で、〈トーテミズム〉から仏陀、イエスなどの偉大な神話を経て近代の学者——これは古代の〈魔術師〉の最後の化身であり、ヒンドゥーのシヴァと同一視される——に到る、〈人類〉の精神的進化が語られる。

第三部 —— 『法の言葉 [Dire de la loi]』

第三部には抒情的結論である二巻、すなわち『破壊する神 [Le Dieu qui détruit]』と『法と儀礼 [Les Lois et les Rites]』が含まれる予定だった。

1. 『破壊する神』では一連の予言的ヴィジョンによって、現在の文明の崩壊が喚起される予定だった。
2. 『作品』の結論である『法と儀礼』は、「個人と集団の主要な諸行為」をめぐる一連の抒情的省察と歌で構成される予定だった。

この第三部に関してルネ・ギルが書いたのは、第二書に収められる予定の三つの歌だけである。

ひとことで言うなら『作品』は、大地の生成から生物の登場を経て人間の誕生とその文明の成立と破壊に到る壮大な時間的スケールの物語を、そこに牧歌的な抒情詩やヴェルハーレンの『触手ある都市』の先駆とも言われる¹³⁾疎外的な都市文明を描く詩篇などを織り交ぜつつ歌い上げる「最も広大にして最も長い期間にわたり熟考された宇宙規模の叙事詩 [l'épopée cosmique]¹⁴⁾」であった。このうち本稿で取り上げる第一書『最良の生成』は、噴火に充ち満ちた世界の中で生命が生まれ徐々に植物や動物へと進化を遂げ、ついに人間が誕生するまでを歌うものである。全体はIからVIIまでのセクションに分かれ、冒頭と末尾にプロローグとエピローグがおかれている。その内容を強引となることを承知の上でまとめれば次のようになるだろう。

プロローグ：生命誕生以前の物質の世界。地球の生成。雷鳴が煌めき、また曙光が差しこむ。しかし、物質にはすでに「意欲」が内在しており、円環ではなく「楕円」の動きによる進化が胎動している。進化の原理である「愛」が喚起され、統一性のある法則の生成が予言される。

I：噴火と地殻変動の絶えない山々と溪谷に雨が降る。稲妻とマグマの奔流。その轟音。

しかし太陽はそんな世界を日々照らし出す。

II：曙光は海の島々を煌めかせる。島々とは海中から噴出するマグマが生み出すもの。そうした動と静の世界を太陽はやはり日々照らし出す。

III：雨、稲妻、太陽——そのような世界の中であって生命が鉱物から分かれ始める。「生命の〈震え〉の連続」が世界に広がり、植物の種子が「旅する胚」として飛び立つ。

IV：進化の動きは止まらない。海中であっては外殻をもつ緩慢な動きの動物が生まれている。そこにはすでに陸に上がる欲求も現れている。

V：しかし海から出た最初の動物たちは失敗を余儀なくされ、陸上生活の適応には時間がかかる。ある動物たちは陸の植物の間を進んで行く。

VI：実際、隆起する島々には植生が広がってきている。他方、陸に上がらず水中に留まった動物たちも新たな進化を遂げ、いまや外殻を捨て内骨格をもって動きまわっている。

VII：雨は降り、水は植生の茎を伝う奔流となって流れる。双翅を持つ「飛び跳ねて動くものたち saltigrades」が誕生する。

VIII：地に目を向けると、そこには「腹とたくさんの脚をもったものたち」が這っており、蛇は鎌首をもたげ獲物に襲いかかる。

IX：進化の「冒険」はまだ途上である。今度は、繁茂する植物の中を不器用に「四足歩行するもの quadrupédant」が行き、上空では鳥が自由に飛び交い、空を「篡奪」している。

X：いまや陸と空へと向かう進化は決定的である。地上には耳を聳する鳴き声をあげる有象無象の動物たち。四足歩行も巧みになっている。空にはそれを見下すように飛ぶ鳥たち。

XI：山の噴火と暴風の海。そんな世界の中を四足獣たちは敢然と進み、鳴き声をあげる。

XII：手足を巧みに用いて木々の間に行く猿が姿を現す。そして、太陽の願望に答えるかのように、いまや頭を高くもたげ直立二足歩行をするものが現れる。彼らの生殖願望がこの種を存続させていく。

エピローグ：立ち上がった人間はその目で太陽と星々を見る。太陽が没して死ぬように見えながら翌朝また昇って甦ることに彼らは畏敬の念を抱く。太陽は生命の源泉であり、人間を生殖に駆り立てるものでもある。

このように見てくると、『最良の生成』(*Le Meilleur devenir*) というタイトルの意味もおのずと明らかになってくるように思われる。「生成」と呼ばれる進化と進歩のプロセスにおいて、意識と思考を備えた人間が生まれ出てくるようなものこそが「最良の」生成と呼ばれるのであろう。その意味で、ギルの理論と作品は、(疑似)科学主義と唯物論を基盤としてはいるが、ほとんどヘーゲル的と言えるほどに観念論(イデアリズム)的でもある。第一部全体のタイトル『最良の言葉』(*Dire du Mieux*) に込められている含意もまた同様であろう。ひとことで言う

なら、物質に内在する理念が発現し、存在と精神の高度の一致が実現するプロセスが問題となるのである。

つまり、詩篇はそれ自体が進化する物質（「言語＝音楽」）なのであり、世界——すなわち、物質ないしその進化の所与の瞬間における物質の状態——についての解釈（純然たる、ないしは、婉曲な言葉^{ロゴス}）や表象（単純な、ないしは、複雑な類比物^{アナログン}）などではない。詩篇は実際には、世界のひとつの瞬間＝契機〔*moment*〕、しかもとりわけて強烈な瞬間＝契機（この語はラテン語の）*momentum*：すなわち、「動かす」ことを意味する *movere*〔に由来する〕）を構成するのである。というのも、それは、「獲得された知、すなわち〈意識〉の最高点」——「最良のもの〔*le Mieux*〕」——へと向かう太古からの絶対的で避けえない努力の最高点に、能動的、自覚的かつ納得づくで参加するからである¹⁵⁾。

ボビヨはこのように述べて、「科学詩について」の一節を引用している。

したがって、科学の所与について省察するとき私たちが導かれるのは〈形而上学的な〉類推なのである。省察と言ったのは、私たちが〈存在〉のプロセスに従い、〈普遍〉にたえず関わっているという感情を持って、物質が動物の思考と人間の思考を通して自分を知り自分を調和的に観照しようとするその無限の努力を展開させていると、徐々に感じる場合のことである……。最高度の知とは最高度の存在なのだから¹⁶⁾。

*

翻訳の底本は人文科学研究所図書室に所蔵されている次の書物である。CEUVRE : de RENÉ GHIL // I / DIRE DU MIEUX / I / le / meilleur devenir // II / le / geste ingénu // 1889 表紙に出版社の記載はないが、裏表紙には Des presses / de E. GOUSSARD — imprimeur à Melle (Deux-Sèvres) と記されている。メルはギルが隠棲していた——現在でもギル夫妻の墓碑がある——ドゥ＝セーヴル県の小都市であり、ボビヨによれば¹⁷⁾、このエミール・グッサール (Émile Goussard) は 1897 年の完結に到るまで『最良の言葉』を印刷したという。すでに述べたように、ギルは生涯にわたって自作に改訂を加えているが、人文研の象徴主義研究班の第一の関心は 1880 年代から 90 年代にあるので、1889 年の初版を翻訳・注解することとした。

訳読の作業はまず、2021 年 4 月に開始予定であった象徴主義研究班を見越して、森本、鳥山および松浦菜美子の三人で I から III の訳読を行い、その後、研究班の正規の訳読会として IV 以降を読み進めた。試訳とチェックの担当者は表の通りである。こうしてできあがった訳稿は

ルネ・ギル『最良の生成』(René Ghil, *Le Meilleur devenir*, 1889) (森本・鳥山)

セクション	試 訳	チェック	訳読会開催日
プロローグ	森本 淳生	鳥山 定嗣	2023年11月3日*
I	松浦菜美子	森本 淳生	2021年3月6日/9日*
II	森本 淳生	鳥山 定嗣	2021年3月6日/9日*
III	鳥山 定嗣	松浦菜美子	2021年3月6日/9日*
IV	森本 淳生	松浦菜美子	2021年6月20日
V	鳥山 定嗣	森本 淳生	2021年6月20日
VI	熊谷 謙介	久保 昭博	2021年11月14日
VII	中畑 寛之	足立 和彦	2021年11月14日
VIII	松浦菜美子	合田 陽祐	2022年3月20日
IX	山田 広昭	森本 淳生	2022年5月8日
X	岡本 夢子	野田 農	2022年7月24日
XI	福田 裕大	西村友樹雄	2022年12月11日
XII	中筋 朋	鳥山 定嗣	2023年3月12日
エピローグ	森本 淳生	鳥山 定嗣	2023年11月3日*

註：*をつけた日程は共同研究班の訳読会ではなく個別に開催したものである。

森本がとりまとめ、翻訳の再検討と表記の統一を行って全体稿を作り、それをさらに鳥山がチェックしたうえで、疑問点については両者で検討し最終稿を完成させた（その過程で、残っていたプロローグとエピローグの訳稿も作成された）。

ここでギル特有の語法について、簡単にまとめておきたい。詩篇の読みにくさの原因は、モンタルが指摘するように¹⁸⁾、倒置・従属節・挿入・句跨ぎなどを多用した複雑な統辞法や、個人的で恣意的にも見える句読法、そして特殊な語彙などにある。本作品に即してより具体的に見るなら、たとえば次のような特徴を指摘することができるだろう。これらはいずれも読解のための前提知識と呼ぶべきものでもある（事例の詳細については註解を参照されたい）。

- 形容詞男性単数形を副詞として用いる用法（底本8頁第3行の *lent*, 24頁第9行の *long*, 第12行の *lourd* など多数）。
- ラテン語的とも呼ぶべき性や数の一致を前提とした倒置の多い複雑な構文。関係節が先行詞の前にてたり（14頁第9-10行の *qui* など）、先行詞のない関係節が用いられることもある。
- これもラテン語的と言えるが、現在分詞も自由に性数を変化させて対応する名詞にかけられることが多い（15頁第3行の *durants* など）。
- ラテン語的に主語なしで動詞が用いられていると思われる箇所もある（44頁最終行から45頁冒頭にかけての *lient... repent...*）。
- 現代フランス語では用いられないラテン語由来の語彙の使用（10頁第9行の *stellements*, 18頁第3行の *dirompant*, 第5行の *luxurient*, 26頁第9行の *déhérentes*, 27頁第1行の *spu-*

- mant, 第4行の omnivagues, 30頁第9行の sparsile, 53頁第7行の prolique など)。
- 紛らわしいが、現代フランス語に存在する単語が、現在の語義ではなくラテン語語源の語義で(あるいはそれを重ねて)用いられることもある(14頁第7行の griève, 17頁第11行の déduisent, 30頁第3行の versatiles, 31頁第10行の vaguent など)。
 - 現代フランス語では用いられない古フランス語の語彙の使用(22頁第5行の viateurs, 34頁第7行の vironnante, 54頁第4行の émute など)。
 - その他、専門用語(32頁第14行の saltigrades など)や独自の造語も見られる(30頁第13行の ventée, 43頁第2行の sourdonnements など)。
 - 他動詞はときに代名動詞的な意味で用いられる(16頁第2行の noieront, 22頁第3行の départager, 26頁第1行の adaptaient, 31頁第9行の gardant, 45頁第11行の agitant, 47頁第5行の outrent など)。また、他動詞の絶対的用法もしばしば見られる。逆に現在では代名動詞としてしか用いられない動詞が他動詞で用いられることもある(18頁第15行の irruent)。
 - ホメロスを連想させる枕詞的表現もある(39頁第14行の de nuits doigtées)。

詩法については鳥山の執筆による次節に譲るが、^{アリテラシオン} ^{アソナンス} 頭韻・畳韻や半諧音を多用し、同一ないし類似の表現を反復的に用いるギルの詩句は呪文的とでも呼ぶべき独特の響きを持っている。底本7頁冒頭の回文にも似た «Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...» はその意味で象徴的である。

最後になるが、註解で参照した辞典とその略号は次のとおりである。

宝典 : *Trésor de la langue Française informatisé*, ATILF - CNRS & Université de Lorraine :

<http://www.atilf.fr/tlfi>

Littré : Émile Littré, *Dictionnaire de la langue française* : <https://www.littre.org>

Godefroy : Frédéric Godefroy, *Dictionnaire de l'ancienne langue française et de tous ses dialectes du IX^e au XV^e siècle*, 1880-1895 :

<https://micmap.org/dicfro/introduction/dictionnaire-godefroy>

Gaffiot : Félix Gaffiot, *Dictionnaire latin-français*, 1934 :

<https://www.lexilogos.com/latin/gaffiot.php>

Wiktionnaire : https://fr.wiktionary.org/wiki/Wiktionnaire:Page_d'accueil

なお、一般に詩作品においては二行以上に分かち書きされる場合であっても詩行のまとまりで一行と数えるのが通例であるが、本作品では詩行のまとまりが分かりにくく、ときには頁をま

たがって行われる場合もあるので、解題および註解で行数を示す際には、冒頭から機械的に数えて示すこととした。また、本文各頁冒頭の数字は底本の頁を示している。(森本淳生)

2. 詩 法

ルネ・ギルの『最良の生成』は詩法という観点からも興味深く、とりわけ韻律上、フランス詩の変遷におけるひとつの極限を示す作品である。本項では、ギルの詩論『言語考』との関連を踏まえつつ、『最良の生成』を構成する詩句の主な特徴をまとめてみたい。

韻律——12音節詩句の極限

『最良の生成』は12のセクション(I~XII)の前後にプロローグとエピローグを配置する構成であり、約600行におよぶ詩は12音節詩句で書かれている。が、その詩句のありようは、17世紀以来フランス詩の最も代表的かつ荘重な詩句となった^{アレクサンドラン}定型12音節詩句とは著しく異なるものである。

マラルメは「韻文の危機」(Crise de vers [「詩の危機」])において19世紀末のフランス詩の状況を分析し、^{アレクサンドラン}定型12音節詩句が被った「絶妙な危機 *exquise crise*」を三つの局面において捉えている。すなわち、①1行12音節という詩句の外枠を保持したまま内部の句切りを揺るがせる破格、②12音節詩句の近傍にある11音節詩句や13音節詩句を織り交ぜる変格、③韻律の規則性を取り払った自由詩である。ギルの『最良の生成』はこのうち第一の破格に該当し、その極限的な例を示すものである。

プノワ・ド・コルニューリエが『韻文の理論』で明らかにしたように¹⁹⁾、マラルメが区別した三局面のうち第一の局面は、ユゴーとボードレールを経て、ランボー、ヴェルレーヌ、マラルメにおいていっそう顕著なかたちで現れる。マラルメは、ヴェルレーヌやランボーと異なり、自由詩はおろか、11音節詩句や13音節詩句を試みることもなかった²⁰⁾。この点についてはギルもマラルメと同様であり、その型破りな試みはあくまで第一の局面にかかわる。12音節詩句の外枠を保ったまま内部の句切りを揺るがせる試みについて、マラルメの「韻文の危機」およびギルの『言語考』の一節を並べて引用しよう。

^{アレクサンドラン}12音節詩句——われわれ〔フランス人〕の^{ヘクサメトロス}6歩格——に忠実な者たちは、この詩句の韻律をなす厳格で子供じみたメカニズムを内部から緩める。耳は、人工的な数え方から解放され、12の音色の間の可能なすべての組み合わせを単独で聞き分ける喜びを知る。／こうした嗜好はきわめて現代的なものだと判断されたい。²¹⁾

(マラルメ「韻文の危機」)

この新しい〈詩人〉は夢想した。〈芸術〉は進化し、過去から荒々しく切断されるような瞬間など到来せず、現在は過去から生じ、昨日の〈巨匠〉たちについて彼らは〈父〉なのだと言わなければならない、と。ところで、彼が旧来の^{アレクサンドラン}12音節詩句を——その倍音的ないし非倍音的である絶妙な数学を把握したために——守っているということを読み取ってほしい。彼はそれを鍛錬し、詩句におけると同じく詩節においても、〈詩句〉の行数の長さがまちまちだという（印刷業者の視点！）子供じみたことではなく、^{ユーフォニック}音調のよい持続の海全体が感じられるようなしかたで詩句を展開したのである。²²⁾

（ルネ・ギル『言語考』1887年版の注）

古典的な^{アレクサンドラン}12音節詩句の定型リズムは6+6であり、12音節からなる詩句を均等なふたつの半句に分ける中央の^{セジュール}句切りがその韻律の要となる。マラルメが「この詩句の韻律をなす厳格で子供じみたメカニズム」と呼んでいるのはまさしくこの6音節目の句切りを絶対とするものであり、それを「内部から緩める」（すなわち句切りを揺るがせる）ことにより、6+6の定型リズムから解放された新たなリズムが生み出される。この新たなリズムの可能性として、マラルメは12音節を分割する「可能なすべての組み合わせ」と表現しているが、ギルはもう一步踏み込んで、^{アレクサンドラン}12音節詩句の「倍音的ないし非倍音的である絶妙な数学」について語っている。ギルの「倍音 harmonique」概念はヘルムホルツに由来するが、『言語考』におけるこの語の用法は一貫しておらず、上に引用した一節は後年の版からは削除されている。後年の版における別様の記述、たとえば1888年版の次の記述——「詩的器楽編成はアレクサンドランと呼ばれる12音節詩句を基準とするものであり、2と3の数値の掛け算は調和均整を、両者の足し算は不協和な調子をもたらす²³⁾」——をもとに推察すれば、ギルがここで「倍音的ないし非倍音的である絶妙な数学」と表現しているのは「2と3」を基本単位とする算術であり、それぞれの「掛け算」が「調和均整 eurythmies」をもたらす一方、「足し算」は「不協和な調子 modes dissonnants」を生み出すという。つまり、ギルは12音節詩句のリズムを、2と3の掛け算に基づく調和的なリズム（ $6+6 [= (2 \times 3) \times 2]$, $4+4+4 [= (2 \times 2) \times 3]$, $3+3+3+3 [= 3 \times 4]$, $2+2+2+2+2+2 [= 2 \times 6]$ ）と、2と3の足し算に基づく不調和なリズム（ $5+7$, $7+5$ など）に分け、両者を組み合わせることによって「詩的器楽編成」を構築しようとしていたと考えられる。さらに、ギルは「詩句」だけでなく「詩節」についても、「〈詩句〉の行数の長さがまちまちだ」というのは「印刷業者の視点」に過ぎず、一見そのように見える詩行数も数学的計算に基づくものであり、「^{ユーフォニック}音調のよい持続の海全体が感じられる」ように配慮した結果だと主張している。

ギルの主張の妥当性、理論と実践の整合性はひとまず措くとして、ここではマラルメとギルの共通点を確認しておこう。^{アレクサンドラン}12音節詩句を「内部から緩める」ことにより「12の音色の間の可能なすべての組み合わせ」を探索することに「現代的な嗜好」を認めるマラルメの姿勢と、

ルネ・ギル『最良の生成』(René Ghil, *Le Meilleur devenir*, 1889) (森本・鳥山)

12音節詩句の「倍音的ないし非倍音的な数学」を計算し、それに基づいて「音調のよい持続の海全体」を表現しようとするギルの姿勢はその方向性において合致する。このように両詩人は「旧来の^{アレクサンドラン}12音節詩句」の外枠を守りつつ、それを「内部から緩める」ことによって刷新しようとする点で共通するが、古典的詩法を逸脱する破格の程度において、『最良の生成』は『エロディアド』や『半獣神の午後』を上回る大胆さを示している。

非古典的な12音節詩句

ギルの12音節詩句が実際どのようなものか、『最良の生成』の冒頭5行を例に分析してみよう。

Amour — germe dans lui /²⁴⁾de lui germant — Amour..

et selon aventu/re d'Ellipse, qui vaille

quant au divers mouve/ment d'ouverture allant

de vœu qu'elle advienne / la droite. Autant loin qu'aille

en deux manques de li/mite le Mieux voulant..

この5行のうち^{アレクサンドラン}定型12音節詩句と呼びうるのは第1行のみである。第1行は12音節詩句を均等なふたつの半句に分ける定型リズム(6+6)を備えており、さらに付言すれば、中央の句切りを境に前半句(Amour — germe dans lui)と後半句(de lui germant — Amour..)が左右対称に近いかたちで対応している。

続く4行はいずれも古典的な6+6のリズムで読むことが困難あるいは不可能な詩句である。第2行、第3行、第5行は中央の句切りが単語を分断する点で(ventu/re; mouve/ment; li/mite)²⁵⁾、第4行は本来強勢が置かれる6音節目に非強勢の無音のe[e muet]を配置する点で(advienne /)、いずれも破格である。こうした例は、6音節目の句切りの位置に短音節の前置詞を置く例²⁶⁾や通常強勢を置かない「接語 clitique」を置く例²⁷⁾と比べても破格の度合いが高く、12音節詩句の句切りを無化することにより、定型リズムを激しく崩すものである。

フランス詩の歴史において、6音節目に短音節の前置詞や接語を置く最初の代表例はボードレールに見られるが、『悪の花』の詩人は6音節目に無音のeを配置したり、中央の句切りが単語を分断してしまうような詩句を書くことは決してなかった。そうした破格に手をつけたのはヴェルレーヌ、ランボー、マラルメなどであるが、ギルは先達が躊躇をともなって切り拓いた破格の手法を臆することなく大々的に活用してみせたのである。

詩句の分離・分解

ギルによる 12 音節詩句の非古典的な特徴としてもうひとつ、詩句の分離・分解という現象が目される。たとえばプロローグ（10 頁冒頭）の次の詩句は、

et la Terre vers quel avoir de lois
croissantes.

上の行が 10 音節、下の行が 2 音節、あわせて 12 音節詩句になるが、こうした詩句の分割は格別目新しいものではなく、マラルメの『エロディアード』や『半獣神の午後』などにも認められ、ラシーヌの古典演劇においても話者の交替に伴って詩句が分割される例は珍しくない。それに対して、I の冒頭において

Depuis l'œuvre d'agrégats :

En des monts et vallons aux lueurs minérales
en vain d'ignition plus ouvrante d'ardeurs
dévastés de heurts grands de sinistres splendeurs
intérieures —

第 1 行の 7 音節（Depuis l'œuvre d'agrégats）と 4 行下の 5 音節（intérieures）²⁸）を合わせて 12 音節とするのは異例であり、詩句をこのように分離した詩人がギル以前にいるかどうか、管見のおよぶかぎり見当たらない。本作品において類似の例は散見し、しばしばページをまたぐことさえある²⁹）。

こうした詩句の分割や分離はほとんどの場合 2 行に分かれている（その 2 行はプロローグの例のように隣接する機会が多いが、I の例のように別の詩行の介在によって分離している場合もある）が、詩句の分離・分解が 3 行以上におよぶ場合もある。一見孤立しているように見える詩句の断片をつなぎ合わせることによって 12 音節とみなしうる場合である。そのような 12 音節詩句の分解の最たる例が 2 箇所ある。

【例 1】

De lui :	(2)	[Prologue, p. 12]
Traîne —	(2)	[III, p. 20]
en suite	(2)	[IV, p. 24]

Nuant	(2)	[VIII, p. 36]
ce pendant qu'en	(4)	[IX, p. 38]

【例 2】

longipèdes et mal adroites :	(9)	[X, p. 43]
et grands !	(2)	[XII, p. 47]
croisse...	(1)	[XII, p. 47]

例 1 はプロローグから IX にかけて散在する 5 行, 例 2 は X から XII に見られる 3 行であり, それぞれつなぎ合わせると 12 音節詩句 1 行に相当する。注目すべきことに, 『最良の生成』を構成する詩句はどの行も孤立しておらず, パズルのピースを嵌めるように適切な仕方で組み合わせれば, 音節数の異なる詩行もすべて 12 音節詩句に還元される³⁰⁾。

ギルの 12 音節詩句はこのように, ^{アレクサンドラン}定型 12 音節詩句の句切りを甚だしく揺るがせるだけではなく, 詩句の分離・分解によっても大胆な破調を生み出しており, 12 音節詩句という骨格はかぎりない軟体性を強いられている。

古風な朗誦法

とはいえ, ギルの詩があらゆる点において非古典的というわけではない。12 音節詩句の句切りという点では型破りだが, 詩句の朗誦法, 韻律の基となる音節数の数え方という点では古典的な規範に則っている。たとえば無音の e の扱い (e を音節数の勘定に入れるか否か) や二重母音の扱い (原詩 8-9 頁の *lu-eur*; *ori-ent*; *virtu-elle*; *usti-on*; *voliti-on* といった語の母音を分離して読む) などに伝統的な型の遵守が認められる。さらに, 次のような詩句に見られる無音の e の読み方はひとときわ注目に値する。

« (et orientés irruent-ils et ouvrent-ils) »	[prologue, p. 8]
« Après la nue dont l'amas morne ne s'est »	[II, p. 17]

これらの詩句を 12 音節詩句とみなすには, *irru-ent* や *nu-e* の e を 1 音節に数える必要がある。『最良の生成』が書かれた当時, このような e (母音の直後につづく e) を発音し, これを 1 音節に数えるのは異例のことだが, ギルが実際にそうした読み方をしていたことは詩人による自作詩の朗誦によって裏付けられる。1913 年 12 月 16 日, ギルはソルボンヌ大学の Archives de la Parole (フェルディナン・ブリュノが 1911 年に設立した音声資料部) に協力するかたちで, 本作とは別の詩「空間の中の歌」(*Chant dans l'espace*) を朗誦した。その録音を聴くと³¹⁾, ギルはたと

えば次の詩句における *supplie* や *vallées* における *e* を実際に [ə] と発音している。

« *supplie de le prendre et le Temps et l'Espace !...* »

« *de leurs vieux gestes, — les vallées en allées* »

このような読み方は 19-20 世紀においては異例だが、16 世紀においては母音の直後につづく *e* も発音されていたことを鑑みれば、ギルによる詩の朗誦法は懐古趣味的と言えるほどである³²⁾。

脚韻

ギルの詩は脚韻についても、古典的詩法に即した面と規範を逸脱する面が認められる。単数形と複数形の区別や男性韻と女性韻の区別という点では古典的詩法に則っている一方、平韻 (aabb)、交叉韻 (abab)、抱擁韻 (abba) といった脚韻のパターンや配置の規則性はなく、ときには押韻する二つの単語があまりにも隔たっており、脚韻を踏んでいることに気づきにくい場合もある。たとえばプロローグの 8 頁冒頭の *magnétique* と押韻する語はその近辺には見当たらず、*magnétique* の語が再び現れ *elliptique* と脚韻を踏むのは 11 頁においてである。また、その 2 行下の *vaste* と押韻する語はプロローグ内にはなく、さらには I にもなく、II の 18 頁に *vaste* の語が再び現れ、19 頁に至ってようやく *vaste — dévaste* の脚韻が成立する、といった具合である。

脚韻の欠落 —— 同一単語の反復

また、脚韻の隔たりを許容するとして、本作品の全詩行にわたって押韻がなされているかという点も必ずしもそうではない。通常、同一単語の反復は「脚韻 *rime*」とはみなされないが³³⁾、そのような例がいくつか見られる。しかも、それは詩人の落ち度などではなく、周到に考え抜かれた上で選択されたものと思われる。たとえば *Amour* という語がその顕著な例である。プロローグの冒頭詩句 (*Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...*) は本作品において 4 回繰り返される反復句だが³⁴⁾、詩句末の語 *Amour* と押韻する他の語は作品全体をとおして一度も現れない。ギルが『最良の生成』の原動力とみなした「愛 *Amour*」は、他のいかなる単語とも対をなさず、それ自身とのみ響き合う、いわば絶対的な価値を帯びていると言えよう。同様のことが、本作を締めくくるエピローグの最終詩句 (*au vallon de la Vie où le lent Millier, est !*) の結語 *est* についても言える。「存在する *est*」という語は本作品において 6 回詩句末に現れるが³⁵⁾、他の語と押韻することはなく、あたかも冒頭詩句の「愛 *Amour*」と最終詩句の「存在する *est*」がその絶対的価値において照応しているかのようである。

理論と実践——「言語的器楽編成」理論との関連

ギルは『言語考』において「言語的器楽編成 instrumentation verbale」と称する理論を唱えたが、ランボーのソネ「母音」やヘルムホルツの音楽理論（とくに「倍音」）に着想を得たこの理論はギル自身の実作とどのような関係にあるのだろうか。以下、「言語的器楽編成」理論を概観したうえで、『最良の生成』との関連を探ってみよう。

『言語考』は1886年、マラルメの「緒言」を添えてGiraud社から刊行されるが、ギルはこの初版に度重なる改変を施している。第二版（1887年、Alcan-Lévy社刊）では初版のテキストに注を増補するかたちで加筆修正し、さらに第三版（1888年、Deman社刊）では内容を大幅に書き改めている（また「師 Maitre」と仰いでいたマラルメとの関係悪化に伴い、以後「緒言」は削除される）。他方、本作『最良の生成』は1889年『エクリ・プール・ラルル』誌1月号に抜粋が掲載された後、2年前に発表された『純朴な行い』(*Le Geste ingénu*)と合わせ、『最良の言葉 I』(*Dire du Mieux I*)の第一書として刊行された³⁶⁾。以上のように『最良の生成』の制作時期は『言語考』執筆の直後あるいは同時期であることから、両者のあいだには密接な関連があると想定される。（なお、ギルはその後も『言語考』に手を加えており、1891年『作品のための〈方法〉として』(*En Méthode à l'œuvre*)と改題のうえ推敲を重ね、1904年の決定版ではさらに大幅な改稿をおこなっている³⁷⁾。）

ギルの「言語的器楽編成」理論は、言語音と色と楽器の照応関係、さらにはそれらが喚起する観念やイメージを体系化する試みだが、その出発点はランボーのソネ「母音」にあった。ランボーはソネの冒頭、「母音たち」に呼びかけつつ、A=黒、E=白、I=赤、U=緑、O=青という照応関係を提示したが³⁸⁾、ギルはそれに修正を加えるかたちで母音の色を定め直す。ギルによる変更点は、IとOに対応する色を入れ替え（I=青、O=赤）、Uに対応する色を「緑」から「黄」に変える点にある³⁹⁾。ギルはさらに各々の母音に楽器を対応させ、二重母音や複合母音を含めて次のように図式化する⁴⁰⁾。

【1886年初版】

母音	色	楽 器	子 音	二重母音・ 複合母音	楽器のイメージ
A	noir	les orgues	les M et N prolongeant un mouvement muable lourdement	IA, ÉA, OA, UA, OUA, AN, OUAN	les Orgues hiératiques
E	blanc	les harpes	les T et D stériles, et l'aspirée H, et les G durs et mats	AÉ, OÉ, IN	les Harpes rassérénant les cieux
I	bleu	les violons	les S et les Z loin aiguisés, et les LL mouillées et dolentes et les V priants	IÉ, IE, IEU	les Violons angoissés
O	rouge	les cuivres	les âpres R	OI, IO, ON	les Cuivres glorieux
U	jaune	les flûtes	les graciles L simples, et les enfantins J, et l'F soupirante	OU, IOU, UI, OUI	les Flûtes aprilines

その後、1887年版の注で「誤り」があったことを認め⁴¹⁾、1888年版では次のように改変している⁴²⁾。

【1888年版】

母音	色	子音	楽器	観念・イメージ
		m, n, gn	l'orgue	nuits mouvantes des sensations, sentiments et idées
où, ou, iou, oui	noirs et roux	f, l, s	les flûtes longues, primitives	monotonie, doute, simplesse
ô, o, io, oi	rouges	p, r, s	la série grave des sax	domination, gloire, sûreté
â, a, ai	vermillons	r, s	les séries hautes des sax	tumultes, gloires, ovation
eû, eu, ieu, eui	roses et ors pâles	l, r, s, z	les cors, bassons et hautbois	gloires, amours et leurs doutes
û, u, iu, ui	ors vifs	f, l, r, s, z	les trompettes, clarinettes, fifre et petites flûtes	ingénuité, tendresses, heur
e, è, é, ei	ors-azurs	d, g, h, l, p, q, r, t, x	les violons par les pizzicati, guitares et harpe	sérénité, désistement, deuil
î, i, ie, iè, ié	azurs	ll, r, s, v, z	les contrebasse, basse, alto-viole et violon	amour, passion, douleur

この理論的図式を念頭において『最良の生成』を読み直すと興味深いことがいろいろと見えてくる。たとえば、エピローグにおけるギユメを付された直接話法の一節（54-55頁）は、脚韻に同一音を幾度も反復する点で注目される。——« Astre ! から pitié de lumière et de pétales, virant ! »——までの詩行の脚韻に置かれた語のみ列挙してみれば、le - quand - de - virant - Te - vainquant - Te - virant - de - quand - Te - virant - Te - vainquant - le - quand - de - virant となり、[ø(ə)]⁴³⁾ と [ā] という対照的な響きの母音が代わる代わる執拗なまでに繰り返される。なかでも vainquant（「打ち勝つ vaincre」の現在分詞）は quand とともに [kā] の音を高らかに響かせつつ、Te（この二人称代名詞の指示対象は Astre すなわち「太陽」）と互いの意味を交わしあうかのようなようである。また virant（「回る virer」の現在分詞）も銀河系のなかを回転する「太陽」の運動を暗示するとともに、de pitié de lumière et de pétales virant という表現によって「光」の「花びら」がひらひらと舞うイメージをも喚起するだろう。脚韻として反復される一連の語がいずれも「太陽」と結びついているのである。

この一節に「言語的器楽編成」理論を応用してみよう。『最良の生成』刊行の直前にあたる1888年版によれば、鼻母音 [ā] (ā) は「朱 vermillons」の色調と「サクスの高い音列 les séries hautes des sax」を響かせる一方、[ø] (eu) は「薔薇色と淡い金色 roses et ors pâles」と「ホルン、ファゴット、オーボエ les cors, bassons et hautbois」に近い音色を奏でる。[ā] と [ø] の母音は、鮮やかな赤から淡い金色にかけての色合いとともに木管ないし金管楽器の音色を共有し、さらには両者とも「栄光 gloires」の観念に結びつけられているが、以上の共

通項はまさしく当該の一節における勝ち誇る太陽 (Astre vainquant) のイメージと見事に照応すると言えよう⁴⁴⁾。

頭文字大文字の用法

詩行冒頭および詩句内部に見られる頭文字大文字もギルの「言語的器楽編成」理論に関わるものとして注目される。ギルによる頭文字大文字の用い方は独特であり、韻文の慣用的表記にならって詩行冒頭を一律に大文字にするのでもなければ、散文のように文の単位に基づいて文頭のみ大文字、文中は小文字という規則に従うわけでもない。ギルの用法を品詞別に観察すれば、名詞は詩行冒頭・詩句内部を問わず、いずれの位置においても頭文字大文字となりうる一方、それ以外の品詞(動詞および動詞の現在分詞・過去分詞、形容詞、副詞、冠詞、前置詞、接続詞、関係代名詞等)は詩行冒頭ないし文頭においてのみ頭文字大文字となっている⁴⁵⁾。

『最良の生成』における頭文字大文字の全用例を分類すれば次の表のようになる⁴⁶⁾。

T (147)	Terre[s] (13), Tout (11), Te, T' (10), Tressaillement (10), Torrents (8), Tête[s] (7), Titille (6), Tonnet (6), Terrain[s] (5), Tonnerre[s] (5), Transport (5), Temps (4), Toi (4), Très (4), Tant (3), Terme (3), Test[s] (3), Tirent (3), Tourmentes (3), Tourne (3), Tandis (2), Tarde (2), Tel (2), Tentateurs (2), Terrestres (2), Torrentielles (2), Torrentueuses (2), Toutes (2), Triturant (2), Tu (2), Terminaux (1), Terraqués (1), Tiède (1), Tordent (1), Tous (1), Traîne (1), Transversale (1), Travaillant (1), Tressaillantes (1), Tressaillent (1), Trouants (1)
A (62)	Astre[s] (17), Advenus (10), Amour (8), Autant (5), l'Animé-qui-n'est-autre (3), Au (3), Autruis (3), Avent (3), Aléatoirement (2), Allument (2), Autres (2), Antérieur (1), Après (1), Aride (1), Aux (1)
M (22)	Mais (10), Mieux (4), Millier (3), Matière (1), Matinales (1), Moins (1), Montés (1), Muant (1)
L (16)	La, L' (7), Lent (3), Loi (3), Les (1), Lors (1), Lourdes (1)
E (13)	En (6), Elle (3), Evoluante (3), Ellipse (1)
D (12)	De (3), Dans (2), Des (2), Deux (2), Déhérents (1), Depuis (1), Dont (1)
V (6)	Vie (3), Va (1), Vaguent (1), Vers (1)
Y (5)	Yeux (5)
H (4)	Hésitants (2), Haut (1), Homme (1)
O (4)	O (3), Ouis (1)
Q (3)	Qui (2), Quoique (1)
I (2)	Ils (1), Issante (1)
U (2)	Un (2)
C (1)	Car (1)
N (1)	Nuant (1)
該当なし : B, F, G, J, K, P, R, S, W, X, Z	

アルファベット 26 文字のうち、大文字表記の頻度が最も高いのは T (147 回)、ついで A (62 回)、M (22 回)、L (16 回)、E (13 回)、D (12 回) であり、一度も大文字表記のない文字が 11 文字ある。文字による偏差がこれほど大きいことから、そこに何らかの含意が込められていると推測される。同一子音を繰り返す頭韻・アリテラシオン 疊韻や、同一母音の繰り返しである半諧音は、アンナンス

これらの大文字表記によっていっそう効果をあげるだろう。

まず、群を抜いて頻度の高い T から見てみよう。大文字の T を冠する語として、「嵐」(Tourmentes) や「雷」(Tonnent, Tonnerre[s]) や「〔溶岩の〕奔流」(Torrents, Torrentielles, Torrentueuses) など、宇宙の生成にともなう天変地異を示す語彙、「地球」(Terre[s], Terrestres, Terrain[s]) およびその自転 (Tourne) を示す語彙、「時」(Temps) や「移動」(Transport), 生命の躍動の発端となる「震え」(Tressaillement, Tressailent, Tressaillantes), 各種生物の特徴的な身体部位 (Test[s], Tête[s]), 強調の副詞 (Très, Tant), 「全体」を意味する語 (Tout, Tous, Toutes), さらに「太陽」への呼びかけを示す人称代名詞 (Toi, Tu, Te) などが挙げられる。大文字 T にはこれらの語彙を際立たせる役割だけでなく、音声上および視覚上の効果もあるだろう。ギルの「言語的器楽編成」理論は母音を軸としており、子音については部分的な言及しか見られないが、T については、1886年初版の段階で「ハーブ」に相応しい子音として「不毛な [stériles] T と D」を「有音の [aspirée] H」と「硬くこもった [durs et mats] G」とともに挙げており、1888年以降の版では「ヴァイオリンのピッツィカート、ギター、ハーブ」に相応しい子音として「d, g, h, l, p, q, r, t, x」を挙げている⁴⁷⁾。こうした記述は、先に挙げた大文字 T から始まる単語群と調和するものとは思われず、ギルの理論と実作の対応関係は見えにくいと言わざるをえない。T や D の「歯音 dentale」を「不毛な stériles」と形容するニュアンスも掴みがたいが、「破裂音 explosive」である子音 T は、この音を発音する際の口舌感覚により、たとえば「嵐 Tourmentes」「雷 Tonnerres」「〔溶岩の〕奔流 Torrents」といった語の意味をいっそう強める働きがあるように思われる。また視覚上、長い垂直線と短めの水平線を組み合わせる T の字面は、この詩におけるさまざまな上昇運動のイメージと照応するとと言えるかもしれない。たとえば本作品の冒頭で頻発する火山爆発 (et monte heurt de heurts l'élan d'éruptions), 水中から陸上にあがろうとする生命の動き (ô qui monte, agitée au grand sort inquiet), 植物の成長 (la végétation monte de mouvements...), 人間の直立 (et monte la sveltesse!) など⁴⁸⁾, 『最良の生成』という名の「進化」はしばしば上昇運動を伴って展開する。

また子音 T に続いて大文字の頻度が高い母音 A についても、「星 (々) Astre[s]」や「愛 Amour」, 生命の起源や生物の進化を示す「〈他ではない命あるもの〉l'Animé-qui-n'est-autre」や「新しく〈到来するものたち〉nouveaux Advenus」など、本作品のキーワードが大文字 A を冠している。「言語的器楽編成」理論によれば、1886年初版では母音 A の色は「黒」、対応する楽器は「オルガン」であったが、1887年版で加筆された長大な注およびそれに基づいて改稿された1888年版では、母音 A の色は「朱」に修正され、子音 R, S と組み合わせさせて「サクスの高い音列」を響かせるとともに、「栄光 gloire」や「喝采 ovation」や「喧騒 tumultes」といったイメージを喚起する⁴⁹⁾。『最良の生成』に頻出する Astre の語はまさしく母音 A に子音 S と R が伴う語であり、語義の「星=太陽」は「栄光」や「喝采」のイメージと

も親和性が高く、ギルはこの語に「サックス」の高らかな響きを感じ取っていたのではないかと思われる。とりわけ本作品の終結部において三人称の記述から二人称の呼格へと転じる *Astre* の存在感はますます強まってゆくが、この「星＝太陽」への呼びかけ——先述した直接話法の一節(54-55頁)——には大文字 A とともに T も多用されており、しかも T を冠する二人称代名詞 (Toi, Tu, Te) が *Astre* を指すことから、A と T のふたつの大文字が互いに「星＝太陽」の偉大さを讃え合っていると見えよう。

反復と円環

最後に、『最良の生成』の特徴をなす反復表現と円環構造について触れておこう。

〈反復〉という特徴は、先に述べた脚韻や頭韻や半諧音などの音韻効果にすでに認められるものだが、本作品にはさらにより大きな単位の反復として、反復句の多用が注目される。反復句はまったく同一の詩句を繰り返す場合もあれば、部分的な変容をともなう場合もあり、前者の例として、冒頭詩句 « *Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...* » が挙げられる。回文にも似たこの詩句はそれ自体のうちに〈反復〉および〈円環〉を内包しているが、本作品において4回(プロローグに3回、エピローグに1回)現れるこの詩句には句読点を含めて異同はない。

反復に変容がともなう例は多数あるが、それらはしばしば括弧を付され、『最良の生成』の舞台背景・状況、あるいは断続的に生起する現象を表現していると思われる。そうした例を以下に列挙してみよう。

【例1】

(et orientés irruent-ils et ouvrent-ils)	[Prologue, p. 8]
(et orientés irruent-ils et ouvrent-ils)	[Prologue, p. 9]
où orientés irruent-ils et ouvrent-ils :	[Prologue, p. 9]

【例2】

La pluie illuminante et lourde dégénère.	[I, p. 14]
La pluie illuminante et lourde dégénère	[I, p. 15]
(la pluie illuminante et lourde dégénère)	[I, p. 15]
(la pluie illuminante et lourde dégénère)	[I, p. 16]
(la pluie illuminante et lourde dégénère)	[II, p. 18]
(la pluie évanouie et lente mollit, et / Tarde)	[III, p. 20]
La pluie évanouie et lente mollit, et / Tarde...	[IV, p. 23]

(la pluie évanouie est lente)	[IV, p. 24]
(la pluie illuminante et lourde dégénère)	[V, p. 27]
(la pluie en des endroits sparsile dégénère)	[VI, p. 30]
(la pluie illuminante et lourde emplit les mers)	[X, p. 45]

【例 3】

ô suite du vivant Tressaillement, en suite	[III, p. 21]
O suite du vivant Tressaillement. . .	[III, p. 22]
ô suite du vivant Tressaillement, âpre et	[IV, p. 23]
O suite du vivant Tressaillement, en suite.	[IV, p. 23]
(ô suite du vivant Tressaillement en suite)	[IV, p. 24]
O suite du vivant Tressaillement, en suite.	[IV, p. 24]
la suite du vivant Tressaillement, en suite.	[V, p. 28]
la suite du vivant Tressaillement, en suite :	[IX, p. 38]
(en suite du vivant Tressaillement, en suite)	[XII, p. 49]

【例 4】

Au vallon de la Vie où le Millier agite :	[Épilogue, p. 51]
Au vallon de la Vie où le Millier agite :	[Épilogue, p. 54]
au vallon de la Vie où le lent Millier, est !	[Épilogue, p. 56]

例 1 は〈火山の噴火〉、例 2 は〈雨の落下〉、例 3 および例 4 は〈生命の連鎖と躍動〉を示す詩句であり、一連の詩句の反復と変容はまさしくこうした現象の変化をとまなう反復を表現していると言えよう。

また反復という特徴は、一詩句内における同一単語の繰り返しとして現れる場合もある。

(vers la mer et la mer et la mer et la mer)	[V, p. 28]
Vers la mer et la mer et la mer, vers la mer. . .	[V, p. 28]
(et le vent et le vent et le vent). . .	[VI, p. 30]
(et le vent et le vent et le vent et le vent)	[IX, p. 39]
(et le vent et le vent et le vent et le vent)	[XI, p. 44]

(et la mort et la mort et la mort et la mort) [épilogue, p. 52]

マラルメの詩「蒼穹」のオブセッション («*Je suis hanté. L'Azur! l'Azur! l'Azur! l'Azur!*») を想起させるこれらの詩句の単純かつ執拗な反復は、複雑な構文をもつ難解な詩句のなかでひととき目立つものである。

こうした反復句および反復表現は一方向への進行(本作品の主題である「進化」の過程)を強調するようにも見えるが、それはまた本作品を特徴づける〈円環〉的な運動とも結びつく。たとえばプロローグは円環構造を顕著に示しており、詩句自体に回文的な円環性を備える冒頭詩句(Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...)がプロローグの最終行にふたたび現れる。

この冒頭詩句は先に述べたように定型12音節詩句であるが、本作品を締めくくるエピローグの最終詩句(au vallon de la Vie / où le lent Millier, est!)も同じく^{アレクサンドラン}定型12音節詩句となっている。非古典的な12音節詩句が多用される本作品において、冒頭詩句と最終詩句は定型リズムを遵守する希少な詩句として呼応しており、作品全体をとおしてどれほどリズムが乱れようと、冒頭と末尾には定型が保たれ、いわば韻律上の円環をなしていると言えよう。

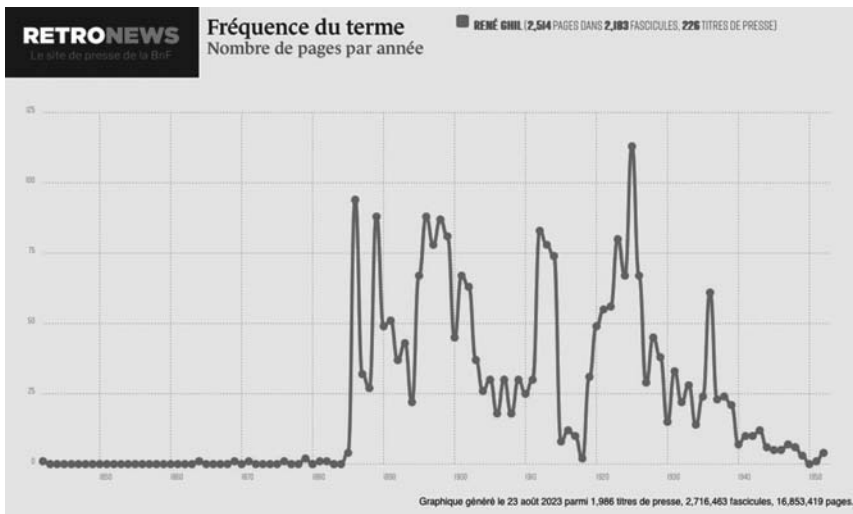
ただし、本作品は完全な円環を閉ざして終わるわけではない。その点で、プロローグの最終6行(vœu de Transport lent immanent à un volume から Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...まで)がそのままエピローグの冒頭6行に繰り返されている点が注目される。プロローグの冒頭とエピローグの末尾が対応しているわけではないため作品全体が完全な円環をなすとは言えないが、プロローグとエピローグの連続性を明示するこの6行の反復により、作品の末尾から冒頭へ回帰する運動が生じることは確かであろう。完全に円環を閉ざすのではなく、回帰しながらも微妙なずれをとまって新たな軌道を生み出してゆくこうした運動は、本作品の冒頭に告げられた「楕円の冒険 aventure d'Ellipse」という表現とともに『最良の生成』の運動を象徴するものと思われる。(鳥山定嗣)

3. 受 容

全体像

本節では、ルネ・ギルと『最良の生成』についての当時の新聞・雑誌の反応についてまとめておく。まず全体像であるが、フランス国立図書館が運営する定期刊行物アーカイブ RetroNews の単語頻度検索機能を用いて René Ghil と調べると結果は次頁のグラフのようになる。

最も多いのは1925年で、81の新聞において113回ギルに言及されている。これはギルが1925年に没したことに因ると考えられる。また第一次世界大戦前後は雑誌数全体が少なく



なったため、ほとんどの単語が同様のグラフを描くことも指摘しておく。

ギルの名前が最初に言及されるのは1885年で、3月4日に『ラントランシジャン』(*L'Intransigeant*)、3月10日に『レコ・ド・パリ』(*L'Écho de Paris*)、4月25日に『政治文学評論』(*La Revue politique et littéraire*)、8月18日に『ル・ヴォルテール』(*Le Voltaire*)がギルの名前を含む記事を載せている。『ラントランシジャン』は新刊案内で『魂と血の伝説』(*Légende d'âmes et de sang*)を取り上げ、「[……]我々が確信していることは、ルネ・ギル氏による奇妙な理論的な序文に続くこの一連の観察の詩はその著者を闘争作家たちの中に位置づけるだろうということだ⁵⁰⁾」と評している。『レコ・ド・パリ』の記事は「シャ・ノワール」の詩人エミール・グドーが担当しており辛辣なコメントを残している。

韻文でのエッセイは形式としてあまりしっくりしていない。純粋な抒情詩の仕事を除いて、哲学的な道に取り組んだ日には、マラルメ氏をはじめとする数人の詩人たちに彼らの思考の空虚さを覆い隠すだけの呪術的で不可解な言葉の作品群を任せないといけない。

歌うときは、やむを得ない時は歯と歯の間で意味不明なことを口ずさむことができる。リズムがリードするのだから。しかし考えを主張するときは、韻文であっても明確にものを書かねばいけない。⁵¹⁾

『政治文学評論』はプルーストを指導したマキシム・ゴーシェが担当している⁵²⁾が、同じく酷評しており「助けてくれ!⁵³⁾」とまで書いている。ロベール・カーズが『ル・ヴォルテール』に寄せた「若き詩人たち」の中でもやはりギルの曖昧さが批判されている⁵⁴⁾。

翌 1886 年にギルの名前は 94 回言及されており、これが 1880 年代、1890 年代を通して一番多く言及された年になる。月別に見ると 9 月に 25 回、10 月に 38 回と 2ヶ月間に集中していることがわかる。これはもちろん『言語考』の出版に際してのことである。『ル・デカダン』(*Le Décadent*) が 19 回、『ル・スカパン』(*Le Scapin*) が 16 回、『ラ・デカダンス』(*La Décadence*) が 9 回という内訳を見ると、世紀末小新聞で主に話題になっていたようである。大手新聞の中では『ル・タン』(*Le Temps*) が 3 回ギルに言及しており、10 月 24 日の記事でアナトール・フランスが象徴主義について考えを述べている。

『最良の生成』

ルネ・ギルに関する言及は Retro News 上では 2514 ページ該当する。これを網羅的に調べギルに関する新聞雑誌の反応をまとめることは難しく、今回はギルの『最良の生成』に関する反応に限りたいと思う。Retro News で *Meilleur devenir* を語順通りの表現のみを検索するとギルの作品に関する記事を表示させることができる。一方、一般的な語に関しては抽出が難しく、『作品』(*Œuvre*) 全体に関する書評をのみを浮き上がらせることは不可能である。また作品内で使われている特殊な語を使うことで『最良の生成』の一部を引用しつつ、ギルに言及している記事を見つけることができる。例えば *quadrupédant* を検索した場合に見つかるアンリ・フーキエの記事を引用する。

これらの詩句は、——これらは詩なのですよ——ダーウィンの生物変移論を称える詩の前奏曲である。あのかくもわかりやすい哀れなダーウィンは何と云うだろうか？ 私がこれらの詩句を引用するのは、苦勞して練った詩句の支離滅裂さでもって読者を微笑させるためではなく、限界まで推し進められた詩句を見せることで、奇妙なものの中に新しさを求める私たちの文学の危険性を指摘するためである。⁵⁵⁾

また *saltigrades* で検索しても『最良の生成』に言及する箇所にとどり着くことができる。デュシャンは『最良の生成』Xの「飛び跳ねる軟らかなものたちはもはや海には向かうまい…… *des saltigrades doux n'iront plus vers les mers...*」の部分引用した上で、「不意に奇妙な呪文に撃たれた詩人たちは不明瞭な音でもごまご言い始めた⁵⁶⁾」とギル周辺の詩人たちを批判している。

Meilleur devenir では 504 ページ (19 世紀 100, 20 世紀前半 400) が該当する。抜粋が発表された 1888 年には 5 件の記事が見つかる。以下抜粋と再掲載を除いた 3 件を時系列順に紹介する。

情報を補うためには、我々は少なくとも指導者である器楽の製作者の名前を伝えなければならぬ。ルネ・ギル氏の名前を挙げれば、私たちの仕事は完了する。彼は、自分で努めて声高く言っているように、誰の弟子でも師匠でもない。

弟子のことでは、我々は確かにそう信じたい、誰もあのような思想を導いたという名誉を主張しないだろう。ギルの『最良の生成』は私たちには理解できなかった、私たちの弱い知性では彼の詩の深い考えを推し量ることができなかったのだ。原稿が見直される時には——というのも、新しい流派は一気に書いて見直さないものだから——我々は読む喜びをもっと得られると期待しよう。⁵⁷⁾

『最良の生成』は『最良の言葉』の第1巻、「自然」の第一部であり、かくも待ちわびられたルネ・ギル氏による作品である。

(ルネ・)ギル氏は、デカダン詩人には珍しい思いやりから、経験の浅い読者が鑑賞しやすくなるようにと、詩の冒頭に数行の説明をつけた。というわけで、氏はわざわざ次のように説明している。「この10番目の詩では、さまざまな四足獣の多数は、噴火の苦しみの前に死ぬ。最後には最初の四つの手を持つ獣たちが現れる」すぐにお分かりになることだろうが。[……]

もうすっかりお分かりだろう。私たちは大地の大異変の真っ只中にいるということが。この異変を前にしてありとあらゆる動物は、著しい不安を抱いて逃げ惑うのだ。[……]

まるでその場にいるように見えてくるだろう。驚異的だ、言葉だけが欠けている、しかし音楽性は確かにある。それに何たる音楽だろう！ このルネ・ギル氏は正真正銘のワンマンバンドだ。カフェコンセールで大ヒットだろう。[……]

十分的を得ているだろうか。誓ってもいい、まるで植物園、猿の檻の前にいるかのようだ。まさに「詩は絵のように！」だ。⁵⁸⁾

なんということだ。翻訳する必要があるのは言葉ではない。全てフランス語で書かれているのだから。しかし……私にはフランス語で書かれていないものよりも理解したとは言えない。なのでどうやったら用語集が『純朴な行い』あるいは『最良の生成』の「理解に役立ち」うるのかわからない。

ルネ・ギル氏がデカダンでも象徴主義でもないのは確かだ。氏は和声的である。その中で何をしているのかははっきりしないのは明らかだ。⁵⁹⁾

そのほか『ラ・ジロンド』(*La Gironde*)が12月30日に『最良の生成』の抜粋を掲載しているが、いずれにせよ以上からは一般的にギルの作品は理解されず、さらには嘲笑的的となってい

たことが窺える。

『最良の生成』が出版された1889年には反応がないものの、1890年には11件 meilleur devenir を含む記事が見つかる。そのうち、ギルの作品に関連するのは6件⁶⁰⁾で、中でも興味深いのは、1890年に復刊したばかりの『メルキユール・ド・フランス』の書評がギルに理解を示していない点である。「詩人の「意図」をしっかりと捉えてはいるが、彼の表現を前にすると、理解できないという拒絶反応を私は感じてしまうことを認めよう⁶¹⁾。」

一方、小雑誌の中ではギルが真剣に検討され評価されている。同じ日付に出版された『ラ・プリューム』(*La Plume*)では、ギルを信奉していたスチュアート・メリルが「この輝かしい夢を、ルネ・ギルは抱き、そして色と音楽がほとぼしる言語の中に具現化せしめたのである。⁶²⁾」と肯定的に述べている。

雑誌別に見ると、1895年に創刊された無政府主義週刊誌『ル・リベルテール』(*Le Liberaire*)が最も多く、41回 Meilleur devenir という表現を使っているが、ギルとは無関係のようである。次に『メルキユール・ド・フランス』で25回、そのうちギルに関するものは9つである。『ラ・プリューム』では11回、うち4回がギルの作品への言及である。『フィガロ』(*Figaro*)や『ル・タン』、『ル・マタン』(*Le Matin*)などの大手日刊紙は『最良の生成』について語っておらず、前掲の『ジル・ブラス』(*Gil Blas*)が『最良の生成』に触れたことが例外のように感じられる。また1891年にはローデンバックが『政治文学評論』に発表した「新たな詩」(« La poésie nouvelle »)の中で同郷の詩人の活躍にこのような皮肉を浴びせている。

そしてルネ・ギル氏は革新者であり創造者を自称し、『言語考』を出版し、「詩的器楽編成」を発表し、その卓越さを『純朴な行い』あるいは『最良の生成』において詩人自ら証明しようとした。[……]

ナポリの儀式を思い出す。それは聖母の髪を一本見せるものである。ひとりの観光客が近づき、観察して、司祭に言う「私にはその髪は見えませんな！」そして司祭はこう答えるのだ「しかし私は40年間この髪の色を見せていますがね、一度も見たことがありませんよ。」⁶³⁾

ここからわかるように、当時の新聞雑誌における『最良の生成』の反響は極めて少なく、かつ好意的な意見はほとんどない。20世紀に入ってからでは1906年にアドルフ・レッテが言及している。

この詩人の野心は、最も遠い起源から今日までの地球の進化を描写し、来るべきものにも触れて予言することだと私は思う。しかし全く保証はしない。というのも『最良の生成』

と『純朴な行い』に分かれた『最良の言葉』はあまりに不明瞭で混沌とした言語で書かれているため、何が彼の考えなのかを正確に読み解くのは難しいからだ。⁶⁴⁾

他にポール・フォールとルイ・マンダンの「1850年以降のフランス詩」という記事の中でも触れられているが、作品に対する評価は見当たらない⁶⁵⁾。1925年のギルの死に際しては、5つの記事が『最良の生成』に言及している⁶⁶⁾。『メルキュール・ド・フランス』は10月号の短い訃報に続いて11月号でギルについての長編記事を掲載している。

この作品〔『最良の生成』〕は不可分の作品〔l'Œuvre-Une〕の輝かしい砂漠の中でのオアシスである。⁶⁷⁾

また1936年の『ラントランシジャン』によるとギル夫人はギルの死後、詩人自身による朗読の音源を所有し、友人たちに聞かせていたようである。

アンドレ・ビリー氏がアポリネールの声のレコードを大切に保管している一方で、アリス＝ルネ・ギル夫人は自宅、かつて『最良の生成』の詩人が住んでいた、彼の死後何も変わっていないロリストン通りの小さなアパートに、詩人自身によって朗読された「空間の中の歌」(Le Chant dans l'Espace)の録音⁶⁸⁾を保管している。

ルネ・ギル夫人は年に一度、夫の死を偲んで、友人たちや夫の作品を愛読していた数人の若者を集める。そして詩人の声は支持者たちの間に響き渡るのだ。⁶⁹⁾

Retro Newsでの検索結果によれば、1938年のギルの全集出版時に『最良の生成』について触れている新聞雑誌は『メルキュール・ド・フランス』のみである⁷⁰⁾。

以上のように、決して好意的な評価に恵まれたわけではないギルの詩作品ではあるが、アンドレ・ブルトンがアンドレ・パリノーによる1952年のインタビューの中で『最良の言葉』や『血の言葉』のタイトルを挙げながら、黙読では難解だが朗読会で声に出して読まれるときにはその「音楽的立体感〔volume musical〕」によって他の詩篇を圧倒すると評価していたことは注目に値しよう。ギルの詩は若きブルトンを「珍しい光を放つ星がちりばめられた一種の言葉の夜」に引きこんだのだった⁷¹⁾。(岡本夢子*)

* おかもと ゆめこ 滋賀県立大学人間文化学部 講師

註

- 1) 詩作品と同様、ギルはこの理論的テキストにもくり返し改訂を加えた。その全容は次のエディションによって知ることができる (René Ghil, *Traité du verbe: états successifs (1885-1886-1887-1888-1891-1904)*, textes présentés, annotés, commentés par Tiziana Goruppi, A.-G. Nizet, 1978)。同書所収の解題も有益である。なお、マラルメとの決別後の第三版(1888)以降、マラルメの緒言は削除されている。
- 2) 1866年7月28日付けテオドール・オーパネル宛て書簡。Stéphane Mallarmé, *Œuvres complètes*, éd. Bertrand Marchal, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2 vol., 1998 et 2003, t. I, p. 705.
- 3) 『詩華集(フランス世紀末文学叢書XIII)』(国書刊行会, 1985年)には立仙順朗訳で「生きる希い I, II」の翻訳が収められているが(p. 160-167), これは『生の願望』(*Le Vœu de vivre*) 終曲および『利他的な秩序』(*L'Ordre altruiste*) 第三部からの抜粋である (René Ghil, *Œuvres complètes*, 3 vol., Albert Messein, éditeur, 1938, t. I, p. 339-340 et 427-429)。
- 4) Cf. René Ghil, *De la Poésie-Scientifique et autres écrits*, textes choisis, présentés et annotés par Jean-Pierre Bobillot, ELLUG, 2008.
- 5) Cf. Jean-Pierre Bobillot, « René Ghil: La dissidence matérialiste », in René Ghil, *Le Vœu de Vivre et autres poèmes*, textes choisis et présentés par Jean-Pierre Bobillot, avec *Chant dans l'Espace*, CD de poèmes lus par R. Ghil (1913) et J.-P. Bobillot (2004), Presses universitaires de Rennes, 2004, p. 15.
- 6) 「そう、僕には分かっている、僕たちは物質の空しい形態にすぎない——でも、〈神〉や僕たちの魂を発明したのだから、きわめて崇高な形態ではあるのだが。」(1866年4月28日付けアンリ・カザリス宛書簡, Mallarmé, *Œuvres complètes*, op. cit., t. I, p. 696)
- 7) 『魂と血の伝説』(*Légende d'âmes et de sangs*, 1885)の冒頭に収められた「わが思想」でギルが(『半獣神の午後』の)マラルメとゾラとを並べて称揚し、「そう、〈生〉、〈生〉のみ!」と述べていたのは示唆的である。
- 8) 日本ヴァレリー研究会ブログ「Le Vent se lève」(<https://www.paul-valery-japon.com/blog/>)に掲載された森本と鳥山によるモレアスやレニエの翻訳は、こうした欠落を補うささやかな試みである。
- 9) Robert Montal, *René Ghil, du symbolisme à la poésie cosmique*, Éditions Labor, 1962, p. 169.
- 10) Ghil, *Œuvres complètes*, op. cit.
- 11) Ghil, *Œuvres complètes*, op. cit., t. I, p. 7-9. なお、モンタルの著書にも『作品』の全体像を要約的に分析した箇所があり参考になる (Montal, op. cit., p. 149-166)。
- 12) 第一部『最良の言葉』は1889年の『最良の生成』と『純朴な行い』の刊行以後、1897年までかかってまずは完成され、1905-1909年に改訂が施された。『血の言葉』は1898-1901年にまず完成され、ついで1912-1926年に改訂が施されたが、最終巻は没後刊行である。『法の言葉』は3篇のみが1913年、1919年、1920年に発表されている (Jean-Pierre Bobillot, « René Ghil: une mystique matérialiste du langage? », in Ghil, *De la Poésie-Scientifique et autres écrits*, op. cit., p. 8)。同書およびポビヨのもうひとつのエディション (Ghil, *Le Vœu de Vivre et autres poèmes*, op. cit.) に収められた書誌も参照のこと。
- 13) Montal, op. cit., p. 196 sqq. とりわけ『生の願望』の影響が指摘されている。
- 14) *Ibid.*, p. 149.
- 15) Bobillot, « René Ghil: une mystique matérialiste du langage? », in Ghil, *De la Poésie-Scientifique et autres écrits*, op. cit., p. 37. この一節に付された註ではさらに次のように述べられている。「私

たちとしては断言したいが、これこそがこの『最良の言葉』という奇妙なタイトルの意味である——「最良のもの」についての言説ではなく、この言説による〈最良のもの〉の成就、そして／あるいは、その成就において〈最良のもの〉から発出する言説（「詩的=科学的な」）、さらには……。」

- 16) Ghil, *De la Poésie-Scientifique*, *op. cit.*, p. [40].
- 17) Ghil, *De la Poésie-Scientifique et autres écrits*, *op. cit.*, p. 93.
- 18) Montal, *op. cit.*, p. 169.
- 19) Benoît de Cornulier, *Théorie du vers. Rimbaud, Verlaine, Mallarmé*, Editions du Seuil, 1982.
- 20) 『賽の一振り』 (*Un coup de dés*) はこの三局面のいずれにも該当しない特殊事例とみなされる。
- 21) « Les fidèles à l'alexandrin, notre hexamètre, desserrent intérieurement ce mécanisme rigide et puéril de sa mesure ; l'oreille, affranchie d'un compteur factice, connaît une jouissance à discerner, seule, toutes les combinaisons possibles, entre eux, de douze timbres. / Jugez le goût très moderne. » (Mallarmé, « Crise de vers », *Divagations*, Bibliothèque-Charpentier, Eugène Fasquelle, 1897, p. 238 ; *Œuvres complètes*, éd. Bertrand Marchal, *op. cit.*, t. II, p. 206) Cf. « Vers et musique en France », *National Observer*, 26 mars 1892, p. 484-486.
- 22) « Il a songé, ce Poète nouveau : que l'Art évolue, qu'un moment ne vient pas où l'on se sépare violemment du passé et que du passé sort le présent, que l'on doit dire des Maîtres d'hier : ils sont les Pères. Or, lisez qu'il garde, pour en avoir saisi la merveilleuse mathématique harmonique ou inharmonique, le vieux vers alexandrin dompté et déroulé de manière qu'en lui et qu'en la strophe, sans la puérité de Vers de lignes plus ou moins longues, point de vue d'imprimeur ! l'on sent la mer entière des durées euphoniques. » (René Ghil, *Traité du verbe*, Alcan-Lévy, 1887, p. 48, note xxvi)
- 23) René Ghil, *Traité du verbe*, 1888, Deman, p. 30 : « selon le vers de douze pieds et dit alexandrin se mesure l'instrumentation poétique, alors que multipliées, les valeurs deux et trois sont eurythmiques, et additionnées, modes dissonnants. » Voir aussi René Ghil, *En Méthode à l'œuvre* [1891], 1904, Messein, p. 60. *Traité du verbe : états successifs*, éd. Tiziana Goruppi, *op. cit.*, p. 129, 149, 181.
- 24) / は中央の句切りを示す。
- 25) 厳密に言えば、第2行は7音節目に無音のeを有する点で、第3行や第5行とは破格の性格が異なる。詳しくはBenoît de Cornulier, *Théorie du vers*, *op. cit.*, p. 134-141, p. 164を参照。
- 26) « et véhémence de / sort devant vers une ère » (*Le Meilleur devenir*, 1889, p. 8).
- 27) « d'amasser splendeurs les / errants hasards virants » (*Le Meilleur devenir*, 1889, p. 9).
- 28) 詩句内部にあるものとみなして intérieure の語末のeを勘定に入れる。
- 29) 9頁末尾の et la Terre vers quel avoir !.. (8音節) と10頁の Car : long allantes ! (4音節), 18頁下方 Tonnet (2音節) と19頁冒頭の est dans un moins pesant apaisement (10音節) の組み合わせなど。
- 30) 本作品の行数について、各詩行の音節数に関わりなく機械的に行数を数えれば687行におよぶが、こうした詩句の分離・分解を考慮して12音節詩句の詩行数に換算すれば596行となる。
- 31) « Chant dans l'Espace » の音声資料はポビヨの編纂した *Le Vœu de Vivre et autres poèmes*, *op. cit.* の付属CDで視聴できるほか、Gallicaでも聴くことが可能である。https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k127964z.r=langFR

- 32) なお、*irruent* や *nue dont* のような「母音+e+子音」の連続は16世紀半ば頃まで見られるが、ロンサルがこれに難色を示して以後、忌避されるようになる (Pierre de Ronsard, *Abregé de l'Art poétique françois*, 1565)。
- 33) ただし、同音異義語の組合せは脚韻とみなされる。本作に見られる *nue* (雲) と *nue* (裸) の押韻はその一例。
- 34) プロローグに3回 (7頁, 10頁, 12頁), エピローグに1回 (51頁)。
- 35) プロローグとエピローグに2回ずつ (1頁, 12頁, 51頁, 56頁), IIとIIIに1回ずつ (17頁, 20頁)。
- 36) 1889年に刊行された『最良の言葉I』は「I. 最良の生成」と「II. 純朴な行い」の二部構成であった。その後、「III. 利己的な証」(1890), 「IV. 生の願望」(1891-93), 「V. 利他的な秩序」(1894-97)を加えた五部構成に発展するが、1938年の『全集』では、このうちIIIを除いた四部構成となる。
- 37) 一連の改変についてはゴルピのエディションを参照。René Ghil, *Traité du verbe : états successifs*, *op. cit.*
- 38) Rimbaud, « Voyelles », v. 1 : « A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu : voyelles ».
- 39) ギルは後者の変更点の理由として、Uという「単一の母音」に「緑」という「複合色」を対応させるのは誤りだと述べている。Ghil, *Traité du verbe*, Giraud, 1886, p. 27.
- 40) Ghil, *Traité du verbe*, Giraud, 1886, p. 28.
- 41) Ghil, *Traité du verbe*, Alcan-Lévy, 1887, p. 50-53, note xxvii.
- 42) Ghil, *Traité du verbe*, Deman, 1888, p. 28-29.
- 43) 非強勢の語 (単音節の前置詞 *de* や後接語の *le* や *Te*) を詩句末に配置するのは破格であり、韻律の要請により強勢を置かれるこれらの語は [ə] ではなく [o] と発音されると思われる。
- 44) なお、1886年初版の段階では、*quand - virant - vainquant* の押韻に響く鼻母音 [ā] (AN) は「黒」の色調と「厳肅莊重なオルガン *les Orgues hiératiques*」の音響を鳴り響かせる一方、*le - de - Te* における [o] (ə) は正確なところは不明だが、おそらく [e] (E) の音が喚起する「白」と「ハーブ」に近い音色を奏でることになろう。ギルは A, E, I, O, U のうち E に関連する二重母音を AÉ, OÉ, IN と記していることから、E を [ə] ではなく [e] ないし [ε] と発音していると思われる。
- 45) *Toi* や *Te* の大文字はこの代名詞が指示する名詞 *Astre* の大文字に対応したものとみなしうる。
- 46) 括弧内の数字は頭文字大文字の出現数および各単語の出現数を示す。
- 47) Ghil, *Traité du verbe*, Giraud, 1886, p. 29; Deman, 1888, p. 26.
- 48) Ghil, *Le Meilleur Devenir*, 1889, p. 18, 22, 35, 48. ちなみに本作品中「上昇する *monter*」という動詞は計11回用いられている。
- 49) Ghil, *Traité du verbe*, Alcan-Lévy, 1887, p. 45, note xxviii; Deman, 1888, p. 29.
- 50) « [...] Cette série de poésies d'observation, que précède une préface théorique curieuse de l'auteur, M. René Ghil, est appelée, nous en sommes certain, à classer, son auteur parmi les poètes de combat. » (« Bibliographie », *L'Intransigeant*, 4 mars 1885)
- 51) « L'essai qu'il nous donne en vers est moins heureux comme forme. Le jour où l'on abandonne la carrière purement lyrique, pour aborder la philosophique, il faut laisser à M. Mallarmé, et à quelques autres, leur amphigourique bagage incompréhensible de mots cabalistiques, qui ne leur servent qu'à voiler le néant de leurs pensées. / Quand on chante, on peut à la rigueur fredonner

entre ses dents des choses inintelligibles : c'est le rythme qui doit dominer ; mais quand on émet la prétention de penser, il faut écrire clairement, même en vers. » (Émile Goudeau, « Impressions d'un lecteur », *L'Écho de Paris*, 10 mars 1885)

- 52) *La Correspondance générale de Proust*, éditée par Philip Kolb, Paris, Plon, t. I 1880-1895, 1970, p. 109, note 7.
- 53) Maxime Gaucher, « Causerie littéraire », *La Revue politique et littéraire*, 25 avril 1885.
- 54) Robert Caze, « Les jeunes Poètes », *Le Voltaire*, 18 août 1885.
- 55) « Ces vers — ce sont des vers — forment le prélude d'un poème en l'honneur du transformisme darwinien. Qu'en dirait ce pauvre Darwin, si simple ? Je ne les cite pas pour faire sourire le lecteur devant leur incohérence péniblement voulue, mais bien pour signaler, en le montrant poussé à ses derniers résultats, un danger de notre littérature, cherchant le nouveau dans l'étrange. » (Henry Fouquier, « Chronique », *L'Univers illustré*, 29 juin 1888)
- 56) « Les poètes, soudain frappés d'un étrange maléfice, se mirent à baragouiner des sons inarticulés. » (Gaston Deschamps, « Souvenirs et Portraits », *Les Annales politiques et littéraires*, 18 mars 1900) この箇所はマックス・ノルダウが *Degeneration* でもフランス語で引用している。ノルダウは原文で引用する理由をこう述べている。「これもフランス語で引用することにする。第一に訳せば詩句の響きを失うことになるし、第二にもし私がギルの詩を直訳すれば、私が真面目に訳したのだと読者が受け取るだろうと想定することは不可能だからである。I also quote in French; in the first place because they would lose their ring in a translation, and secondly, because if I were to translate them literally, it is hopeless to suppose that the reader would think I was serious [...]」(Max Nordau, *Degeneration*, London, William Heinemann, 1898, p. 135)
- 57) « Pour compléter les renseignements, nous devons vous faire connaître au moins le nom de l'inspirateur, du créateur de l'instrumentation ; notre tâche sera complète quand nous aurons nommé M. René Ghil, qui n'est, a-t-il soin de le dire hautement, ni l'élève ni le maître de personne. / Pour élève, nous plaçons à le croire certainement, nul ne revendiquera l'honneur d'avoir dirigé de telles idées. Son *Meilleur devenir* n'a pu être compris de nous, notre faible intelligence n'a pu deviner les profondes pensées de son poème, espérons qu'une fois que le manuscrit sera revu, car la nouvelle école ne relit pas le premier jet, nous aurons plus de bonheur. » (Jean Balva, « Causerie », *L'Autorité*, 3 juillet 1888)
- 58) « *Meilleur Devenir* est le livre I de DIRE DU MIEUX, première partie de NATURE l'œuvre si impatientement attendue de M. René Ghil. / Par un sentiment de délicatesse assez rare chez les poètes décadents, M. Ghil (René) a placé en tête de son poème quelques lignes d'éclaircissement destinés à en faciliter l'accès aux lecteurs inexpérimentés ; c'est ainsi qu'il veut bien prendre la peine de nous expliquer comme quoi « en ce poème X la multitude des divers Quadrupèdes finit devant les tourmentes éruptives : à la fin, les premiers Quadrumanes apparaissent » ainsi que vous n'allez pas tarder à vous en apercevoir. [...] / Vous avez tous compris, n'est-ce pas ? que nous sommes en plein dans un cataclysme tellurien, devant lequel tous les animaux de la création s'enfuient avec une inquiétude marquée. [...] / N'est-ce pas, qu'on voit ça comme si on y était ? C'est frappant ; il ne manque que la parole, mais la musique y est bien. Et quelle musique ! Ce M. René Ghil est un véritable homme-orchestre ; il fera fureur dans le cafés-concerts. [...] / Est-ce assez tapé ? Ma parole d'honneur, on se croirait au Jardin des Plantes, devant la cage des singes. *Ut*

pictura poesis! » (Grosclaude, « Les gaietés de la semaine », *Gil Blas*, 16 juillet 1888)

- 59) « Mon Dieu, ce ne sont pas les mots qui ont besoin d'être traduits ; ils sont tous français, et cependant . . . je ne comprends pas plus que s'ils ne l'étaient pas. Je ne vois donc pas comment le glossaire pourra « servir à l'intelligence » du *geste ingénu* ou du *meilleur devenir*. / Il est vrai que M. René Ghil n'est ni décadent ni symboliste, il est harmonique. . . Décidément, il ne fait pas clair dans tout cela. » (Pol René, « Notes parisiennes », *Le Courrier du soir*, 24 octobre 1888)
- 60) *Mercur de France*, 1^{er} janvier 1890, p. 40, p. 81 ; *La Plume*, 1^{er} janvier 1890, p. 18 ; S., « Bulletin du jour », *Journal des débats*, 7 mars 1890 ; Stuart Merrill, « René Ghil », *La Plume*, 1^{er} avril 1890 ; A. V., *Mercur de France*, 1^{er} avril 1890, p. 141.
- 61) « [...] si je saisis parfaitement le « vouloir » du poète, j'avoue mon philistinisme devant son expression. » (A. V., *Mercur de France*, 1^{er} avril 1890, p. 141) おそらく筆者はアルフレッド・ヴァレット。
- 62) « Ce rêve glorieux, René Ghil l'a eu, et il a su le matérialiser en une langue palpitante de couleur et de musique » (Stuart Merrill, « René Ghil », *La Plume*, 1^{er} avril 1890)
- 63) « Et M. René Ghil, se proclamant aussi rénovateur et inventeur, publia *le Traité du Verbe*, promulgua *l'Instrumentation poétique* dont lui-même essayait de prouver l'excellence dans le *Geste ingénu* ou le *Meilleur Devenir* [. . .]. On songe à cette cérémonie, à Naples, où l'on montre un cheveu de la Vierge : un voyageur s'approche ; regarde et dit au prêtre : « Mais je ne le vois pas ! » Et le prêtre répond : “Mais moi, il y a quarante ans que je le montre et je ne l'ai jamais vu.” » (Georges Rodenbach, « La poésie nouvelle », *La Revue politique et littéraire*, 4 avril 1891)
- 64) « Ce poète a, je crois, pour ambition de décrire l'évolution de notre planète depuis les origines les plus lointaines jusqu'à notre temps et de prophétiser touchant son venir. Toutefois je ne réponds de rien, car son *Dire du Mieux*, divisé en *Meilleur Devenir* et en *Geste ingénu*, est écrit dans une langue tellement obscure et chaotique qu'il est bien difficile de démêler quelle est, au juste, sa pensée. » (Adolphe Retté, « La Poésie française en 1905 », *La Revue*, 1^{er} janvier 1906, p. 103)
- 65) Paul Fort et Louis Mandin, « La Poésie française depuis 1850 », *L'École et la vie*, 26 avril 1924.
- 66) Le Veilleur, « Pont des arts », *Excelsior*, 17 septembre 1925 ; L. G. F., « René Ghil », *Comœdia*, 18 septembre 1925 ; « Petit Mémorial des Lettres », *Paris-soir*, 19 septembre 1925 ; Le Chat, « Ça et là », *Le Journal*, 24 septembre 1925 ; « Échos », *Mercur de France*, 1^{er} octobre 1925.
- 67) « Cet ouvrage [*Le Meilleur devenir*] est une oasis dans le désert éclatant de l'Œuvre-Une » (Jean Royère, « René Ghil, poète et théoticien », *Mercur de France*, 1^{er} novembre 1925)
- 68) 註 31 を参照。
- 69) « Tandis que M. André Billy conserve précieusement un disque où demeure gravée la voix d'Apollinaire, Mme Alice-René Ghil garde chez elle — dans le petit appartement de la rue Lauriston qui fut celui du poète du *Meilleur Devenir* et où rien n'a changé depuis sa mort — l'enregistrement du Chant dans l'Espace, récité par l'auteur lui-même. / Une fois l'an, pour commémorer la mort de son mari, Mme René Ghil assemble les amis du disparu et quelques jeunes admirateurs de l'œuvre — et la voix du poète retentit au milieu de ses fidèles. » (Les Treize, « Les lettres », *L'Intransigeant*, 15 mars 1936)
- 70) André Fontainas, « Les poèmes », *Mercur de France*, 15 novembre 1938.
- 71) 『ブルトン, シュルレアリスムを語る』, 稲田三吉／佐山一訳, 思潮社, 1994年, p. 17。

[7]

Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...¹⁾

et selon aventure d'Ellipse²⁾, qui veille
quant au divers mouvement d'ouverture allant
de vœu qu'elle³⁾ advienne la droite. Autant loin qu'aïlle
en deux manques de limite le Mieux volant. . .

1) 一種の回文。以下、本篇の詩的言語は意味の理解を大きく阻むことを厭わずに、音響的側面に多大の注意を払って構成されていく。「愛」は第5行の le Mieux (〈最良のもの〉) と同じく、世界の生成・進化の原理。

2) 中心がふたつある「楕円」のイメージは、世界の生成・進化が様々な可能性において試みられたことを示すのであろう。そこから定まった方向(次々行の「直線」)が見えてくる。3行後の「限界の」

[7]

愛——おのれの内なる胚にしておのれ自身から胚胎する——愛……

そしてそれは〈楕円〉状の冒険に従う、いずれのものが
直線が出現することを願って開かれていく様々な動きのうちで
価値を持つにせよ。限界がふたつとも存在しない中で
意欲する〈最良のもの〉がどれほど遠くまで行くにせよ……

↙ ふたつの欠如」はそうした二中心の「〈楕円〉」のイメージから導き出されているようである。ゴルピ (*Traité du verbe: états successifs (1885-1886-1887-1888-1891-1904)*, textes présentés, annotés, commentés par Tiziana Goruppi, A. -G. Nizet, 1978, p. 115) は「楕円 ellipse」のイメージは「進歩のシンボルそのものである」と述べ、『エクリ・プール・ラル』に掲載されたギルの論考を参照している。「すべては円環をなすように見えるが、少しでも重さを持つや、同一の位相はもちろん、感知しえないが持続的で遠心的な逸脱を伴って回帰することになる——そう、楕円のデッサンに従って。」「円環に従って動く〈物質〉は進化も進歩もしないことだろう。／しかし、もし〈物質〉が楕円的に動くのなら：それは永遠かつ無限に、楕円によって円環の宿命から脱し、進歩をもって進化する——それは、直線から永遠かつ無限に開放されることになり、楕円はたえず直線になるべく伸びていくはずである。[……] /しかし、何によって〈物質〉はこうした楕円の運動をするようになるのか。／科学研究が、化学とその親和力以来、私に証明してみせたのは、本質的に言って、〈最良のもの〉を生み出す生殖的〈愛〉の法則だった。」(« Données évolutives », *Écrits pour l'art*, 5^{ème} année, n° 2, mars 1892, p. 72-73)

3) 直後の la droite を指すものとして読む。

[8]

et ! de¹⁾ la Matière-venante²⁾ magnétique
condensant d'immanente vertu de venir :³⁾

Lent issante en lueurs et lueurs aux Tourmentes⁴⁾
(et orientés⁵⁾ irruent⁶⁾-ils et ouvrent-ils)
et véhémence de sort devant vers⁷⁾ une ère
virtuelle, aux moments hors d'eux-mêmes virants —

[de⁸⁾ Tonnerres haut et aheurtés de Tonnerre
Autant en ardant que hors d'eux-mêmes ouvrir :
(et amassent splendeurs les laxités⁹⁾ énormes)
en Torrents de lueurs d'aigus heurts et Torrents
qui n'éteignent¹⁰⁾, durant le moment ordinaire

appertement devient l'unité d'une Loi]

Évoluante¹¹⁾ en elle-même à normes lentes

-
- 1) この de は第 12 行の devient l'unité d'une Loi にかけて「〈物質〉から〈法則〉の統一性が生成する」と読む。
 - 2) venante は、charbon tout venant（選別前の石炭）といった用法を踏まえて理解する。
 - 3) 本篇におけるコロン（:）の用い方は独特であるので、一般に日本語表記では用いられないが、本試訳においては使用することとする。
 - 4) lent は本篇に特徴的な形容詞を副詞的に用いる用法。女性形の issante および無冠詞名詞の lueurs、次々行の véhémence は第 1 行の Matière にかかるものとして読む（第 12 行の devient l'unité d'une Loi にかけることも可能だが、[] があり難しそうである）。
 - 5) 複数形の orientés はここでは「東方」ではなく、東に現れる「曙光」の意であろう。それをつづく ils で受ける。

[8]

そして！ 到来の内在的な力によって凝縮する
磁気を帯びたいまだ選別されぬ〈物質〉から：

それは煌めきとなってゆっくりと現れ出て、煌めきの〈嵐〉となって
(そして東の方では曙光が侵入し〔暗い空を〕開いていく)
そして潜在する時代へと前に進み行く運命のため
それ自身の外へと逸れる諸々の瞬間に、激烈に熱を帯びる――

[それ自身の外へと開かれるのと同じくらい熱く
〈雷鳴〉と高みで衝突しあう〈雷鳴〉から：
(そして数々の輝きを寄せ集めるのは〔天空の〕巨大な弛緩)
するどく衝突しあう煌めきの〈奔流〉、消えることのない
〈奔流〉のさなか、平常の瞬間においては

はっきりと生成する、〈法則〉の統一が]

ゆっくりと進む常態でそれ自身において進化していく

6) irruer は一般に代名動詞 *s'irruer* (侵入する) でしか用いられない。ここでは本作品の特有語法である他動詞の代名動詞的用法と理解する。18頁第15行、25頁17行目も参照。

7) *devant* は副詞で、その具体的方向性が *vers une ère* で示されていると読む。

8) この *de* も悩ましいが、第1行の *de* と同じく第12行の *devient l'unité d'une Loi* にかけて読む。

9) 空の「弛緩 *laxités*」はここでは稲妻のことを言うのであろうが、次頁第5行ではむしろ差しこむ曙光を言うように思われる。

10) *éteindre* は他動詞であるが、ここでは本作品の特有語法として代名動詞の意味で読む。11頁第4行も同様。

11) これも第1行の *Matière* にかかるものとして読む。

[9]

(et orientés irruent-ils et ouvrent-ils)
et véhémence¹⁾ de sort devant vers des normes —

[Autant en ardant que hors d'eux-mêmes ouvrir

où orientés irruent-ils et ouvrent-ils :
les moments en ardant des laxités ! — énormes
d'amasser splendeurs les errants hasards virants]

Lent issante en lueurs et lueurs aux Tourmentes :
Évoluante en elle-même à normes lentes :

Autant en ardant que hors d'eux-mêmes ouvrir
itérativement mouvemente²⁾ en lumière
une ustion³⁾ urgente de volition :
et la Terre vers quel avoir ! . . .

1) 以下, véhémence, 第7行の issante と lueurs, 第8行の Évoluante は une ustion urgente de volition にかけて読む。

2) 他動詞 mouvementer の絶対的用法で, 主語は次行の une ustion urgente de volition である。

3) ustion はラテン語の ustio (燃やすこと, 焼灼) がフランス語化したものとする。

[9]

(そして東の方では曙光が侵入し〔暗い空を〕開いていく)
そして常態へと前に進み行く運命のため激烈に熱を帯びる——

[それ自身の外へと開かれるのと同じくらい熱く

そのとき東の方では曙光が侵入し〔暗い空を〕開いていく：
熱く燃える数々の弛緩の瞬間！——様々な方向に彷徨う
偶然を輝きとして寄せ集める数々の巨大な瞬間]

それは煌めきとなってゆっくりと現れ出て、煌めきの〈嵐〉となって：
ゆっくりと進む常態でそれ自身において進化していく：

それ自身の外へと開かれるのと同じくらい熱く
くり返し光のうちで動きを生み出す
意欲はいまや燃えあがろうとしている：
そして〈地球〉はいかなる所有へ向かっているのか！……

[10]

et la Terre vers quel avoir de lois
croissantes.

Car : long allantes¹⁾ !

issant de vertu de magnétique venir
de là devenir quoi longtemps devienne²⁾, issantes
la règle giratoire et la gravité lentes
qui ne soient que de lui³⁾ l'allant évènement. . .

De lui :

ô d'autres stellemments⁴⁾ ordre qui lent allume !
continue et devante adhésion⁵⁾ :
qui n'a point et l'Avent et le Terme, et n'est lentes⁶⁾
qu'œuvres d'évènements en l'immense et l'augment :
vœu de Transport lent immanent à un volume :
Amour — germe dans lui de lui germant — Amour. . .

La règle giratoire et la gravité lentes :

La règle giratoire et la gravité, du
moment lent urgent qui mouvemente en lumière

-
- 1) 本詩節の構造は難解であるが、allantesは第1行のloisを受け、それがさらに3行後のla règle giratoire et la gravité lentesにかかっているものと読む。第5行のissantesも同様である。なお、Car : long allantes ! は4音節しかないが、これは前頁最終行のet la Terre vers quel avoir ! . . . の8音節とともに12音節詩句を構成するのであろう。また、longは副詞的用法の形容詞（既出）とする。
 - 2) issant de vertu 以下ここまでを独立現在分詞構文として読む。devenirは現在分詞issant（現れ出る）を補完する不定詞。この現在分詞の意味上の主語がquoi longtemps devienneで、主語となる節の内部にあるので接続法をとると理解する（次々行のqui ne soient que . . . の接続法も同様である）。
 - 3) luiは次行にも現れるが、本篇冒頭のgerme dans lui de lui germantに見られるlui=Amourと同一の存在で、世界の生成・進化の原理のようなものを指すのであろう。翻訳では以下、luiは「愛」と訳す。

[10]

そして〈地球〉はいかなる法則の所有へ向かっているのか
増大する法則の。

なぜなら：長い時間をかけて進行するのだ！

磁気的な到来の力から現れ出て
そこから長期間にわたり生成するものが生成するのだが、
ゆっくりと進む回転の規則と重力とが現れ出る
それは愛をめぐって進行していく出来事にすぎない……

愛をめぐって：

おお、鏤められた他の星々をゆっくりと灯す秩序よ！
いつまでもつづくしかるべき結びつき：
それは〈待望〉も〈終末〉も持たず、増大していく
広大な世界に生じる様々な出来事がゆっくりともたらず働きにすぎない：
ゆっくりした〈移動〉の願望は量塊に内在している：
愛——おのれの内なる胚にしておのれ自身から胚胎する——愛……

ゆっくりと進む回転の規則と重力：
回転の規則と重力が、いまやこのとき
ゆっくりと光のうちに動きを生み出す瞬間に

-
- 4) *stellement* は宝典には記載がないが、ラテン語 *stella* (星) に由来する *stellé* は「星をちりばめた *constellé, étoilé*」の意として採項されており、ヴィエレ=グリファンやアポリネールの用例が挙げられている。「*le faubourg accroupi, / Stellé de becs de gaz et voilé de fumées. . .*」(Vielé-Griffin, *Les Cygnes (Poésies 1885-86)*, Alcan-Lévy, Éditeur, 1887, p. 103) ; « Dans les nuits toujours stellées / Les bouches toujours mêlées / Se baisent éperdument » (Apollinaire, *Casanova*, 1918, II, p. 995) d'autres *stellements* は *ordre* の補語とも、*allume* の目的語ともとりうるが、ここでは後者の読み筋で訳す。
- 5) *devante* は *devoir* の現在分詞を女性形にしたものとする。*adhésion* は星座や星の運行を司る法則性を言うものと解釈した。
- 6) 単数形の *est* に続く複数形の形容詞は悩ましいが、直後の *œuvres* にかかるものと読む。

[11]

harmonisent¹⁾ qu'au Temps qui n'est —

[de Tonnerres haut et aheurtés de Tonnerre :
en Torrents de lueurs d'aigus heurts et Torrents
qui n'éteignent, durant le moment ordinaire

appertement devient l'unité d'une Loi]

et long issantes²⁾ !

harmonisent qu'au Temps qui n'est, parmi des Temps :
Issante³⁾ virant de lent amas magnétique
apte lors quelque part au destin elliptique⁴⁾
de graviter⁵⁾ équipollent Milieu, laissant
départs après départs pour le peuplement vaste⁶⁾
céder les anneaux grands qui lent enrourleront⁷⁾
aux pesants ordres qui les agglomèreront :

Tourne⁸⁾ !

départ après départ à normes lentes :

-
- 1) 主語は前頁最後の La règle giratoire et la gravité と読む。
 - 2) 次行に harmonisent とあるので、第 1 行と同じく主語は前頁の La règle giratoire et la gravité ととり、issantes もこれにかかるものと読む。
 - 3) 女性単数名詞としては直前の l'unité d'une Loi があるが、8 頁と同じく [] の中にあるので難しい。次頁第 5 行の une ustion urgente de volition にかかるものと読んでおく。いずれにせよ、等価的な（差異のない）物質の塊から回転を通じて星々とそれらを統べる法則が生まれるプロセスが歌われていると考えられよう。
 - 4) 7 頁第 2 行の「〈楕円〉 Ellipse」と呼応。ひとつの中心のまわりを永遠に回り続けるのではなく、ふたつの中心をもつことで多様へと変化する可能性を帯びることを言うのであろう。

[11]

調和を生み出す、存在しない〈時間〉において――

[〈雷鳴〉と高みで衝突しあう〈雷鳴〉から：
するどく衝突しあう煌めきの〈奔流〉、消えることのない
〈奔流〉のさなか、平常の瞬間においては

はっきりと生成する、〈法則〉の統一が]

そして長い時間をかけて現れ出て！

調和を生み出す、存在しない〈時間〉において、諸々の〈時間〉の中で：
現れ出る、ゆっくりとした磁気を帯びた堆積
とき来ればいずれかの地点で楕円的に周回する運命も
可能となる等価的な〈場〉からは逸れ、制約もなく
広大なる移植にむけて次々と出発する
大きな環の数々をゆっくりと巻きつかせ
それらを塊にする重々しい配置に従わせることだろう：

回る！

次々と出発しゆっくりと進む常態で：

-
- 5) graviter (周回する) は自動詞としかとりえない。とすると、次の équipollent Milieu (等価的な〈場〉) は2行前の amas magnétique の同格と読めるだろう。
 - 6) この行は次行の les anneaux を形容する同格。
 - 7) enrrouler も他動詞としてしかとりえないが、絶対的用法と理解する。この行と次行では、中心から「環」として分離した物質が回転する中でひとつの塊となり惑星を形成するプロセスが言われているように思われる。本プロローグでは結局、曙光という一日の始まりと、地球の生成および太陽系の始まりとが重ね合わされて歌われているようである。
 - 8) 命令法ともとれるが、次頁第4行の Tourne と同様に、同頁第5行の une ustion urgente de volition を主語とする動詞と読む。

[12]

Lent issante en lueurs et lueurs aux Tourmentes :
Évoluante en elle-même à normes lentes :

Autant en ardant que hors d'eux-mêmes ouvrir
Tourne ! mouvementée en heurts grands de lumière
une ustion urgente de volition :

et la Terre vers quel avoir de lois
croissantes...

et la Terre vers quel avoir désaggravant :
et de moments de lui la suite l'éprouvant :

De lui :
vœu de Transport lent immanent à un volume
et au longtemps d'advenir qui dans lui-même ! est
qui n'a point et l'Avent et le Terme, et n'est lentes
qu'œuvres d'évènements en l'immense et l'augment :

vœu de Transport lent immanent à un volume :
Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...

[12]

それは煌めきとなってゆっくりと現れ出て、煌めきの〈嵐〉となって：
ゆっくりと進む常態でそれ自身において進化していく：

それ自身の外へと開かれるのと同じくらい熱く
回る！ 光の大いなる衝突の中で動かされて
意欲はいまや燃えあがろうとしている：

そして〈地球〉はいかなる法則の所有へ向かっているのか！
増大する法則の……

そして〈地球〉はいかなる所有に向かって重さを失っていくのか：
そして愛をめぐる諸々の瞬間の連続は愛を試みる：

愛をめぐって：
ゆっくりした〈移動〉の願望は量塊に内在し
到来の長い時間にも内在するが、この願望は愛自身のうちに！存在する
それは〈待望〉も〈終末〉も持たず、増大していく
広大な世界に生じる様々な出来事がゆっくりともたらず働きにすぎない：

ゆっくりした〈移動〉の願望は量塊に内在している：
愛——おのれの内なる胚にしておのれ自身から胚胎する——愛……

[14]¹⁾

I

Depuis l'œuvre d'agrégats²⁾ :

En des monts et vallons aux lueurs minérales
en vain d'ignition³⁾ plus ouvrante d'ardeurs
dévastés⁴⁾ de heurts grands de sinistres splendeurs
intérieures —

En des monts et valons aux lueurs minérales :
griève⁵⁾ d'apports, qui dans heurts illimités
Terraqués ! mêlent muantes des âpretés⁶⁾ :
qui⁷⁾ du Temps est exempte et durant des nuits noie⁸⁾
et qui n'éteigne la lueur en les méats⁹⁾

La pluie illuminante et lourde dégénère.

1) 13頁は白紙。

2) œuvre は多義的な語であるが、ここでは「活動」やその結果として「産出されたもの」を指すと理解しておく。「活動」とは言っても現段階で問題になっているのは人間によるものではなく地質的な活動である。また、冒頭からあえて œuvre の語を提示しているのは、ギルが自作のタイトルとして採用した *Œuvre* と響かせる意図があるのかもしれない。

[14]

I

集塊の活動が始まって以来：

山々と峡谷では鉱物が煌めくが
発火にはいたらず灼熱に一層開かれ
内部の不吉な輝きの激しい衝突によって
崩れ落ちる——
山々と峡谷では鉱物が煌めくが：
数々の恵みが，〔地表の〕凹凸を変えながら際限のない
水と陸との衝突！において複雑にする，その恵みにおいて重大な雨は：
〈時〉をまぬがれ幾夜も続き〔地表を〕水没させるが
空隙に宿る煌めきを消すことはない

光輝く重たい雨はその力を失う。

-
- 3) ignition は一般には「発火」を意味し，試訳でもそのように訳したが，内容的には「噴火」を意味していると思われる（特に，15頁第13行に *le heurt d'éruption* とあるのを参照）。
 - 4) *dévastés* は男性複数形。直前の *ardeurs* にかかるようにみえるが，これは女性複数形であるため，*monts et vallons* を修飾すると考えられる。
 - 5) 形容詞 *grief* の女性単数形で，一般に「つらい，苦しい，重大な」の意だが，ラテン語の *gravis*（重い）が変形した *grevis* がその語源であり，*gravis* は *grave*（重大な）の語源でもあるので，ここでは *grave* の語義を踏まえて読む。この *griève* で始まる節は後出の *La pluie* にかかるものと理解した。
 - 6) *âpreté* は一般には「荒々しさ，不快さ」を意味するが，ここでは語源であるラテン語の *asperitas* に近い「起伏の険しさ」を意味するものと理解する。*asperitas* は，「岩の表面などのざらざらや凹凸」，「（土地の）起伏の激しさ」を意味する *aspérité* の語源でもある。直前の *muantes* はこの *âpretés* に一致している。
 - 7) 本行および次行の *qui* は最終行の *La pluie* にかかるものとして読む。
 - 8) 他動詞 *noyer* の絶対的用法。
 - 9) *méats* は解剖学用語で「道」や「管」，あるいは，植物組織の細胞間の空隙を指す。ここでは溶岩の炎が見える地表の「空隙」を指すのだろう。

[15]

La pluie illuminante et lourde dégénère
et dans elle,

pendant qu'aux nuages durants¹⁾
un sinistre d'éparres²⁾ lourd ouvre et envoie :
Toutes³⁾ en perpétuité d'ardents Torrents
Tonnent, ignition lourde de laps⁴⁾ striants —
Toutes qui haut mouvaient : les pesanteurs ouvrantes.

En vain d'ignition plus ouvrante d'ardeurs :
Qui⁵⁾ dévaste (soustrait à appel magnétique
aux origines⁶⁾ ailleurs vastement virant)
et émeut d'ardeurs nouvelles et d'élan grand
l'élan de métal des heurts dont plus haut agirent
les mouvements : le heurt d'éruption ouvre et
envoie,

(la pluie illuminante et lourde dégénère)
et dans longtemps⁷⁾ l'éparre et le Tonnerre
itérativement vaporise...

1) *durant* は一般に前置詞であるが、ここでは *durer* の現在分詞形を形容詞として *nuages* に性数を一致させたものと読む。後続の *striants* や *ouvrantes* も同様。
2) *éparres* の語は宝典には採項されていない。Littré は *épars* のかたちで「雷鳴が続くことのない小さな稲妻」と説明している。Wiktionnaire は *éparre* を採項し、同様の語義でギルの一節を引用している。「*D'électricité attire ! Mes / Yeux l'ont senti, un pâle éparre à la saison / Molle des printemps et des*」

[15]

光輝く重たい雨はその力を失う

その雨の中,

空一面の密雲を

稲妻という重苦しい災厄が開き〔光を〕発する一方で:

灼熱の〈奔流〉によってすべてがいつ果てることもなく

轟き、重く発火して幾筋もの流れをなす——

高みで動いていたすべて: 開きゆく重さが。

発火にはいたらず灼熱に一層開かれ:

(他の場所では広域にわたって方向を変えさせる極地からの

磁気呼びかけを逃れて) 衝突から生じる金属のほとばしり、

その運動はかつていっそう高い所へと及んだのだったが、

それを崩し新たな灼熱と激しいほとばしりで

掻き立てるもの: すなわち、噴火の衝撃が〔地を〕開き

〔蒸気を〕発する、

(光輝く重たい雨はその力を失う)

そして長いこと稲妻と〈雷鳴〉の中

くり返し蒸発させる……

↙ sèves exhumés / Un éparre d'orage et parmi leur verdure / Et sur la mer diurne, en tes grands Yeux a lui!... » (René Ghil, *Nuit aux terrasses*, dans : *Anthologie de la poésie française*, volume 10, Le XIX^e siècle, tome III; Éditions Rencontre, Lausanne, 1967, p. 428) なお、ヴィリエ・ド・リラダン『未来のイヴ』の第6巻第4章にも同じ語が用いられている (« au-dessus [...] des éparres muets et d'aspect livide »)。齋藤磯雄訳では、この語は「稲妻」と訳されている(創元ライブラリ, 1996年, p. 384)。

3) この Toutes は次々行の pesanteurs と性数の一致をしていると思われる。

4) laps のラテン語語源 lapsus (流れ) を踏まえて読む。

5) この関係節は4行後の le heurt d'éruption にかけて読む。

6) 悩ましい箇所であるが、冒頭の前置詞 à は前行の appel (呼びかけ) が発せられる場所を示すものとする。origines は南極や北極など磁場を生じさせる「起源」を言うのであろう。

7) 破格だが、この longtemps は次行の itérativement と同位にあり、ともに vaporise にかかる副詞、vaporise の主語は4行前の le heurt d'éruption であるとして読む。

[16]

Mais dans
la pluie et mer où lent noieront¹⁾ les monts qui girent²⁾
de derniers levers³⁾ droits au haut luxuriants
dure, qui⁴⁾ dure lent en ardeurs qui n'ouvrirent !
le métal d'élan des heurts grands et leurs Torrents —
et dans la mer où lent noieront les monts ardents
(la pluie illuminante et lourde dégénère)
en œuvre lente dans les âges véhéments
lourd agirent et demeurent des gisements. . .

1) 他動詞 *noyer* を代名動詞的な意味（沈む）で用いる本作品の特殊語法であるように思われる。

2) 宝典によると自動詞 *girer* は « *Tourner sur soi-même, ou autour d'un axe* » の意。語源のラテン語 *gyrare* は Gaffiot によれば « *faire tourner en rond, faire décrire un cercle* » の意。具体的にどのような情景が描かれているのかは難しいが、噴火した溶岩が回転する様子を描いたものと理解しておく。

3) *levers* は一般には「日の出」の意だが、ここでは「噴火」を言うものと読む。

[16]

だがしかし

雨と海では、垂直に中天へと充ち満ちた最後の噴火を受けて
山々は〔溶岩を〕回転させつつゆっくりと沈んでいくだろう
その雨と海では、開くことのなかった灼熱の中でゆっくりと存続するものが存続する！
激しい衝突による金属の迸りと灼熱の〈奔流〉とが存続する——
そして海へと灼熱の山々がゆっくりと沈んでいくだろう
(光輝く重たい雨はその力を失う)
その海中では激烈なる長い歳月にわたりゆっくりと活動する
数々の鉞脈がかつて重く蠢いたのだが、それは今もなお存在する……

4) 以下の関係節が直前の動詞 *dure* の主語である。次行も動詞 *dure* の主語であると読む。

[17]

II

En des monts et vallons aux lueurs minérales...

Après la nue¹⁾ dont l'amas morne ne s'est
ouvert de plus d'un doute²⁾ en ustions d'air, et
de plus d'un doute en la longueur nument perdante
Transversale, et en sinistres d'éruptions
Trouants : dans avent³⁾ lent de variations
radieuses d'un air,

c'est qui⁴⁾ palpite allante
immensément par monts et la mer hasardante⁵⁾
quand divergeant⁶⁾ en diurne et long glissement
d'aridités mouvantes qui des nuits déduisent⁷⁾ :
c'est une aurore lourde de nuits et d'eaux, à
intervalle⁸⁾...

Lors que, par les îles qui luisent
universellement monts droits et longs dans la

1) この詩行を十二音節で読むためにはこの *nue* を二音節で読まなければならない。

2) 「懷疑 *doute*」とは雲間にさす光あるいは雲の裂け目を言うと思われる。こうした閉ざされたものが開かれることを *doute* の語と関連させるのはマラルメを想起させる (Cf. « Une dentelle s'abolit / Dans le doute du Jeu suprême »)。

3) *avent* はラテン語語源 *adventus* (到着) に即した意味で用いられている。

[17]

II

山々と峡谷では鉱物が煌めく……

陰鬱な雲の塊がひとつならずの懷疑で
開かれ、それが大気を燃えあがらせることも、
ひとつならずの懷疑で、長くくつきりと消えていく
横断線になることも、穴を穿つ噴火の災厄になることもなかったが、
その雲の後には：大気の光り輝く変化が
ゆっくりと到来し、

ほら、澁刺とうち震えつつ
危険を顧みずに、果てしなくも山々と海を越え
いまや夜を下方へ押しやる蠢く不毛さが
長く漸進的に陽の光となる時へと変わり行き：
ほら、夜と海とで〔なお〕重い曙光が
しばしの^{のち}後にまた〔現れる〕……

そのとき、煌めく島々は
どれもみな直立する高い山といえようが、そのまわりには

-
- 4) qui は後出の une aurore (曙光) にかかると読む。
 - 5) hasardante は動詞 hasarder (危険をおかす) の現在分詞女性単数形。意味から考えて、直前の la mer ではなく、この文の主語 aurore にかけて読む。
 - 6) quand は前々行の palpiter にかけて読み、破格だが、つづく現在分詞 divergeant がその主動詞であるとする。divergeant の意味上の主語は前々行の qui となるから、すなわち次行の une aurore である。
 - 7) déduire はラテン語の deduco (下方へ導く) を踏まえて用いられているように思われるが、本作品の特有語法とみなして déduire を代名動詞の意に理解し、「夜から導き出される」と読むことも可能かもしれない。
 - 8) à intervalle という表現は悩ましいが、太陽が沈み夜という intervalle (合間) を経てまた昇ることを指すと理解しておく。

[18]

古来の海：海は一面に波立ち
重苦しい間隔をおいて休らう、すべて等し並みに。

淀みをうち破り轟く：開かれても
発火にはいたらず灼熱に一層開かれ
灼熱はほとぼしって轟き、そして充ち満ちる――

そして重く、大気と海は重苦しい大気の間を動かす……
煌めくのはいくつもの稲妻！
(光輝く重たい雨はその力を失う)
そして最大の衝突である噴火のほとぼしりが立ちのぼる

そのとき！ 数々の鉦脈はかつて重く

蠢いたのだが、広く軽やかになりつつそれは今もなお存在する：
そして変わりゆく夜々、衝突しあう灼熱の風に向かって
そのとき！ 噴火によって散り散りに点在する頂として
島々を開き、そこからは夜々、島々が充ち満ちて生まれ
それ以外の場所は隆起しない、海面のあちこちで
海水をくるくると暴風雨に高く巻きあげながら！
まさに原初の鉦脈の石化した堆積物を水没させるのだ：
轟く！
灼熱はほとぼしって轟き、そして充ち満ちる。

-
- 8) この現在分詞 *ouvrant* と次々行の *exhaussant* の意味上の主語は最終行の *les ardeurs* であるとして読む。
- 9) 噴火によって「開かれた」海面に現れる溶岩のうち (*dont*)、そのいくつか (不定冠詞つきの *iles*) が実際に島となる。
- 10) この関係代名詞 *qui* の先行詞も最終行の *les ardeurs* として読む。動詞 *irruer* はここでは次行の *aux eaux* (海水の中へと) を間接目的補語、次々行の *les dépôts* 以下 (直前の *que* は *n'irruent* の *ne* と呼応する限定表現) を直接目的補語とする他動詞 (侵入させる) と理解する。ただし、この第 17 行目の *que* は前々行 *n'exhaussant* の *ne* と呼応し、*qui n'irruent* 以下の 2 行は挿入節として読むこと (この場合は *irruent* は代名動詞的用法と理解する) も可能かもしれない。
- 11) *en parts* は「海面のところどころでは」の意と解釈した。*haut* は副詞 (高く) で *girantes* にかける。*girer* (回転する) に由来する *girantes* は女性複数形なので、*eaux* にしかかけられない。
- 12) この二音節とともにアレクサンドランを構成する十音節は、次頁第 1 行の *est dans un moins pesant apaisement* である。

[19]

est dans un moins pesant apaisement
Tiède et neuve la mer de vagues générales...

Moins lourd meut¹⁾ l'air et moins lourde la mer, et des
Terrains vont longs et nus en l'âge hasardés
au loin luisants, par ce

que palpitant allantes
vastement par montagne et vallée ondulantes
viennent deux aurores²⁾ de nuits et d'ondes, à
intervalle :

et dans des nuits et diurne, vaste³⁾ —
nuée humidement⁴⁾ et que le vent dévaste
haut, une lueur d'instant adustes⁵⁾
est là...

1) mouvoir は現在では他動詞として用いられるが、ここでは古い自動詞用法で「動く」の意と思われる。

2) 「ふたつの曙光」は、この箇所にかざれば暗い空にのぼる朝日とそれが海面に反射することを言うように見えるが、後出の箇所（20頁第10行、27頁第12行、29頁第17行など）では「代わる代わる」と交代することが言われているから、太陽と月のことであろう。

[19]

より重苦しくない風の中
生暖かく新しい海は一面に波立つ……

より重苦しくなく大気は動き、より重苦しくなく海も〔動く〕、そして
〈土地〉は長々とむき出しのまま時代のうちに危険を冒しに赴き
遠くでは煌めいている、なぜなら

澁刺とうち震えつつ

広大にも波うつ山と谷を越え
夜と海とのふたつの曙光が、しばしの^{のち}後にまた
到来するから：

そして夜には、そして昼には広大に——
湿ったあたりに起こった密雲が風で高く払われて
諸々の焼けた瞬間の煌めきが
そこにある……

3) dans des nuits と diurne, vaste はそれぞれ次々行の une lueur にかけて読む。

4) 宝典によれば humidement という副詞は「湿った場所において」を意味しうる。「起こり」を補って訳出した。

5) aduste は宝典によれば, brûlé, desséché の意。

[20]

III

Allument les éparres. . .

ce pendant¹⁾, en vaste
calme et en des déserts diurnes et stellants²⁾
que le doute intégral par des épars nuages
Traîne —
(la pluie évanouie et lente mollit, et
Tarde)

et que par moins de heurts dans l'erreur³⁾ d'orages
stagnent en nudité de nouveaux gisements
luisants de deux aurores⁴⁾ alternantes : Astres⁵⁾ . . .

et qu'un mouvement d'être est girant⁶⁾, et qu'il est
(l'humidité vivante en quête multiplie)
l'Animé-qui-n'est-autre⁷⁾ éduit⁸⁾ en volonté
des neutres et minérales unions nues
aux⁹⁾ nuits liquides exemptes d'ondolement grand :

1) ce pendant . . . que le doute . . . traîne . . . と読む。その後の et que par moins de heurts . . . および空行の後の et qu'un mouvement . . . et qu'il est . . . さらに次頁冒頭の qu'il appert . . . もすべて ce pendant にかけて解釈した。なお、宝典では、cependant の項に ce pendant の綴りも用いられるとあり、ルコント・ド・リール、ローデンバック、モレアスの詩句が例に挙げられている。

2) 宝典によれば、1842年の『アカデミー・フランセーズ辞典補遺』に動詞 steller が「星のように輝く」の意味（ラテン語の stella（星）から派生した第一群規則動詞）で掲載されているという。

3) erreur は古義「彷徨、遍歴」で解釈する。

4) 19頁第8行の註解参照。

5) この複数形の Astres（星々）は deux aurores を受けるものだが、ラテン語の astrum（星）の複数形 astra には「天空」の意味もある。31頁第15行、45頁第16行も参照。

[20]

III

煌めくのはいくつもの稲妻……

その間にも、広大な
静けさと日中あるいは星の照る砂漠の中、
全面的な懐疑が散り散りの雲をとおして
たなびく——

(雨は消えゆき、ゆっくりと弱まるが、
なかなか止まない)

そして彷徨う雷雨の中、衝突は和らぐので
新たな鉦脈はむき出しのまま沈滞し
ふたつの曙光を代わる代わるあびて煌めく：〈星々〉……

そして存在の動きは自転であり、それは
(生命の湿気は探し求めて増殖する)
〈他ではない命あるもの〉であり、意志となって
大きな波のうねりを欠いた液状の夜のような
中性的かつ鉦物的なむき出しの結合体から分かれ出る：

6) girer は 16 頁第 2 行に既出 (同所註解参照)。ここで「自転する」とは、生物を定義する自己回帰運動を指すか。

7) qui n'est autre (他ではない) とは、生命が自他の別、自己を持つことを言うのであろう。

8) 「分かれ出た」と訳した éduit は宝典や Littré には記載がないが、Godefroy の esduire の項には代名動詞的用法として s'écarter, s'échapper, s'enfuir の意とある。ラテン語動詞 educere (外に出す, 外へ引き出す) から連想されるフランス語動詞 éduire の過去分詞とも理解できよう。

9) aux nuits の前置詞 à の解釈としては、時間を示す à (à la nuit tombante など) や, éduire de A à B (A から B へ分かれ出る) といった理解も可能かもしれないが、ここでは一種の「様態」を示すもの (「~の状態にある, ~のような」) と理解しておく。

[21]

qu'il appert qu'un monde palpité d'être augmente
qu'engendra l'Animé-qui-n'est-autre girant :

Elle¹⁾ le meut en vœu de la lumière lente
dont²⁾ est dispensateur de sort l'éveil vital —
ô suite du vivant Tressaillement, en suite
en le long verdoisement en la vague exhumant³⁾
et, au plus de vent de l'air qu'elle⁴⁾ expérimente !
en l'ample aggrippement⁵⁾ qui monte végétal :
Elle le meut en vœu de la lumière lente —

-
- 1) Elle の指示対象は 2 行下の suite du vivant Tressaillement と解釈する。なお、ギルは詩行を小文字で始めることが多いが、とりわけ T の子音は例外であり、ⅢやⅣの Elle も例外的に大文字で始まっている。
- 2) dont の先行詞が何であるかは悩ましい。前行の la lumière にかけることもできるが、ここでは詩節冒頭の Elle (すなわち suite du vivant Tressaillement) にかけて読み、生命進化の原動力である「〈震

[21]

その間にも、存在することにうち震えた世界が増大することは明らかであり
〈他ではない命あるもの〉が自転しつつこの世界を生み出したのだ：

〈それ〉が〈他ではない命あるもの〉を緩慢な光を求める願望のうちで動かす
その生命の目覚めこそ運命の分配者である——
おお、生命の〈震え〉の連続、それはつらなり
地面を掘り起こすように波立つ長い緑の一面となり、
そして、それが身に受ける大気の最大の風の中！
広大な把握となり、植物となって上に伸びる：
〈それ〉は〈他ではない命あるもの〉を緩慢な光を求める願望のうちで動かす——

↙え)」がついに植物となって「目覚める」ことを言うとして理解した。

3) *exhumer* のラテン語語源(「土(*humus*)から出す」)を踏まえて理解した。

4) この *elle* も *suite du vivant Tressaillement* を指すと読む。

5) *agrippement* の綴りの方が一般的だが底本に従う(46頁第10行参照)。「把握」とは根を指すか。あるいは地表を覆い広がってゆく植物の動き、ないしは、つる植物のようなイメージか。

[22]

ô qui¹⁾ monte, agitée au grand sort inquiet²⁾
de digérer l'appât qui gît ou qui vit³⁾, et —
apte à départager d'elle⁴⁾, ou laissant⁵⁾ aux nues
ouvertures de vouloirs d'ovaire de nues
volitions aller en germes viateurs⁶⁾—
de prodiguer le mieux d'Autruis ampliateurs⁷⁾ :

en suite⁸⁾

multipliant la quête du vœu génital :

Ô suite du vivant Tressaillement. . .

-
- 1) この qui は、つづく過去分詞 agitée が女性単数形であることから、先行詞に前文の主語 (Elle = suite du vivant Tressaillement) をとるものと解釈する。
 - 2) 以下, inquiet de digérer... [et] de prodiguer という構文で読む。
 - 3) 進化過程における植物の誕生を歌う段階であるにもかかわらず, digérer (消化する) とあるが, 食虫植物のようなものが想定されているわけではなく, 将来の動物の誕生が予見されている, と読むべき。

[22]

おお、それは上に伸びる、それをつき動かす大いなる運命は
餌が死んでいようと生きていようとそれを消化することを求める、そして——
それから分かれることができ、あるいは
子房の意志の赤裸々な開口へと、赤裸々な意欲を
旅する胚として向かうがままにさせる——
複製する〈他者たち〉のうちで最良のものを振り撒くことを求める：

それから

生殖願望の追求を繁殖させる連続となり：

おお、生命の〈震え〉の連続……

↙ なのだろう。

- 4) apte が修飾する名詞は grand sort ともとれるが、意味からして3行後の le mieux (最良のもの)であろう。自己複製が可能なものうちの最良のものが生命進化の原動力である「〈震え〉」から分離し、ついには花粉のようなものとなって生息域を拡げていく、といったことが歌われているのであろう。elle の指示対象は冒頭の qui monte の先行詞 suite du vivant Tressaillement である。départager は通常他動詞で「裁決する、分ける」の意味だが、代名動詞的なニュアンス(「分かれる」)で用いられているように見える。
- 5) 以下の構文は, laisser aller de nues volitions (en germes viateurs) aux nues ouvertures de vouloirs d'ovaire と読む。
- 6) viateur は宝典や Littré には記載がないが, Godefroy によれば, 古フランス語では voyageur の意。ラテン語名詞 viator (旅人, 使者) をフランス語化したものとも理解できよう。
- 7) autrui の複数形は稀。ampliateur は一般には法律用語で「複本作成者」の意だが, ここではラテン語動詞 ampliare (増す) を踏まえて理解する。
- 8) en suite には ensuite の意味もかけられているかもしれない。「それから」と「連続」のふたつの語義を訳出した。

[23]

IV

L'humidité vivante en quête multiplie —

et qu'il appert¹⁾ qu'un monde évolutivement²⁾
en palpitant augmente, et veut : de nuit allante³⁾
Elle le⁴⁾ meut en vœu de la lumière lente —
ô suite du vivant Tressaillement, âpre et
irritée ! ô qui monte en grand sort inquiet
de digérer l'appât qui gît ou qui vit, et —
apte à départager d'elle, ou laissant aux nues
ouvertures de vouloirs d'ovaire de nues
volitions aller en germes viateurs —
de prodiguer le mieux d'Autruis ampliateurs
vers une plante vraie et dans l'air pur éduite :

multipliant la quête du vœu génital
Ô suite du vivant Tressaillement, en suite.

La pluie évanouie et lente mollit, et
Tarde...

-
- 1) 唐突に et qu'il appert... と que が登場するが、Ⅲと同じく、20 頁冒頭の ce pendant que の que が再度現れたものとして読む。このⅣの詩句はⅢの詩句と同一のものも多く、両者の密接な関連がうかがえる。
 - 2) ギルのキーワードであるのみならず、ジュール・ユレの『文学的進化に関するアンケート』やモレアスの「象徴主義宣言」などからも分かるとおり、évolution (進化) は文学においても当時の主要テー

[23]

IV

生命の湿気は探し求めて増殖する——

そしてその間にも、ひとつの世界が進化しながら
うち震えつつ増大し意志するのは明らかなのだ：澆刺たる夜に
〈それ〉がこれを緩慢な光を求める願望のうちで動かす——
おお、生命の〈震え〉の連続、荒々しくも
かき立てられた連続よ！ おお、これは上に伸びる、その大なる運命は
餌が死んでいようと生きていようとそれを消化することを求める、そして——
それから分かれることができ、あるいは
子房の意志の赤裸々な開口へと、赤裸々な意欲を
旅する胚として向かうがままにさせる——
複製する〈他者たち〉のうち最良のものを振り撒くことを求める
純粋な大気のうちに分かれ出た真正な植物へと向けて：

生殖願望の追求を繁殖させる
おお、生命の〈震え〉の連続が、つらなる。

雨は消えゆき、ゆっくりと弱まるが、
なかなか止まない……

↙ マのひとつだった。

3) *de nuit allante* は形容語として次行の *Elle* にかかるが、内容的には副詞的に訳す。

4) Ⅲの21頁第3行および第9行と同一の詩句。大文字で始まる *Elle* の指示対象はⅢの場合と同じく、次行の *suite du vivant Tressaillement* を指すと読めるが、冒頭の *L'humidité vivante...* を受けるのかもしれない。つづく *le* は21頁では *l'Animé-qui-n'est-autre* を受けていたので、ここもそのように読めるかもしれないが、この頁に表現としては現れないので、次々行の *qui monte* 以下を先取りするものと読んでおく。

[24]

Mais houlante haut nuement, la mer mûre
(la pluie évanouie est lente)

la mer mûre
d'elle en vallons et en monts mornes arrape¹⁾ et
roule (en quoi monotone aux vents outrément et
multiple, le vent rompt²⁾) roule morne murmure³⁾
quels animaux des eaux impuissants à d'instants
mouvoir⁴⁾ une mollesse inapte dans stériles
Tests, et venus des nuits long⁵⁾ explorantes des
natives visquosités :

et dans les mers mues
lourd : ils végètent l'anxiété⁶⁾, végétants
(ô suite du vivant Tressaillement en suite)
de digérer l'appât qui gît ou qui vit, et —
apte à départager d'elle, ou laissant aux nues
ouvertures de vouloirs d'ovaire de nues
volitions aller en germes viateurs —
de prodiguer le mieux d'Autruis ampliateurs
vers l'animal lui-même en mouvement :

en suite

multipliant la quête du vœu génital
Ô suite du vivant Tressaillement, en suite.

1) arraper という動詞は宝典や Littré には記載がないが、Godefroy には araper (r は 1 つ) の項に saisir avec force et avidité とある。ラテン語の adripere (自分に引き寄せる、掴む) に基づく造語とも理解できよう。arrape et roule の直接目的補語が次々行の quels animaux... である。

2) 関係節 en quoi の先行詞は la mer mûre と読む。monotone と multiple は主語 le vent を修飾する形容詞。aux vents... multiple と関係づけて「四方八方の風となって」と訳す。

[24]

しかし、波を高くはつきりとうねらせ、熟した海は
(消えゆく雨はゆっくりと降る)

熟した海は
陰鬱な峡谷と山々をなすみずからのうちから奪い取り、そして
転がしていく(そこでは、風が単調だが激しく
四方八方の風となつてうち破る) 転がされ陰鬱なつぶやきを発するのは
水中の何という動物たちか、不毛な
〈外殻〉の中にあつて不能で軟弱な体を緩慢にしか
動かすことができない、それらは粘々とした原始のものが
長きにわたり探索した夜々から生まれ出たもの：

そして攪拌される海の中で
重々しく：それらが生長しつつ、育む強い願望は
(おお、生命の〈震え〉の連続がつらなる)
餌が死んでいようと生きていようとそれを消化することを求める、そして——
それから分かれることができ、あるいは
子房の意志の赤裸々な開口へと、赤裸々な意欲を
旅する胚として向かうがままにさせる——
複製する〈他者たち〉のうち最良のものを振り撒くことを求める
動き回る動物そのものへと向けて：

それから
生殖願望の追求を繁殖させる連続となり
おお、生命の〈震え〉の連続が、つらなる。

3) *morne murmure* は次行の *quels animaux* の同格とする。

4) *impuissants* は *animaux des eaux* にかへ、*à... mouvoir* とつなげて読む。挿入された *d'instants* は「瞬間瞬間、瞬間的に」と解し、全体として「緩慢にしか動かすことができない」と訳す。

5) 本作品の慣用により、この形容詞男性単数形 *long* は副詞として読む。3行後の *lourd* も同様。

6) *végéter* は一般に他動詞としては用いられないが、ここでは *l'anxiété* を直接目的補語とするものと読んでおく(*l'anxiété* を主語 *ils* の同格と考え、「それらは……という願望として生長する」とも読めるかもしれないが、いずれにせよ破格である)。*l'anxiété* は2行後の *de digérer* につなげて読む(22頁で同様の詩句の既出部分を *grand sort inquiet de digérer...* と読んだのと同様)。この *anxiété* は「不安」ではなく「強い願望」の意であろう(宝典は稀な用法として、「*Désir intense, extrême tension nerveuse d'une attente vécue, non plus dans la crainte, mais dans le plaisir*」の語義とともにゾラの用例(*une telle anxiété du succès*)を挙げている)。つづく *végétants* は複数形であるので主語の *ils* にかかる。

[25]

Tel,

qu'en les deux milieux¹⁾ il appète divers²⁾ :
et qui³⁾ du Terrain nu qu'onde ne violente
en devant implanter⁴⁾ vite veut l'univers⁵⁾ :
et d'expérimenter en la genèse allante
qui lent eut que⁶⁾ valaient pour qui vive et supplante
les natales lourdeurs de plus longtemps des mers :

Tel, qu'en les deux milieux il appète divers :
l'unique monde plein d'évagation⁷⁾ lente
qu'engendra l'Animé-qui-n'est-autre girant
d'unions neutres exemptes d'ondolement grand —
en dualité pullulante allante, agite.

Quoique dirompant⁸⁾ haut les Terres, et les mers
aux eaux dans virements d'orages haut girantes :
parmi des nuits en désastre d'astres, dressant
les îles longues issantes et n'exhaussant
ailleurs, qui⁹⁾ n'irruent ! que lents dépôts :
ouvranter
en vain d'ignition plus ouvrante d'ardeurs
Tonnent levantes les ardeurs, et luxurient.

-
- 1) 定冠詞 les を指示形容詞的に訳す。「ふたつ」というのはここまで語られてきた水中の環境と、ここで登場する陸地の環境であろう。第12行の dualité（二重性）も同様に解釈できよう。
 - 2) il は前頁最後に現れた l'animal lui-même en mouvement を受けると読む。divers は「多様なものとして」と理解し、水生動物から陸上動物への進化を指すものと解釈する。
 - 3) 関係代名詞 qui は前行の il を受けるものと読む。
 - 4) implanter は他動詞だが代名動詞的な意味（根付く）で理解するほかないようである。en devant は devoir のジェロンディフと解する。

[25]

あたかも、

このふたつの環境で、それは多様なものとして欲求するかのよう：
そしてそれはすぐにも根付かねばならぬので、
波が犯さぬむき出しの〈土地〉の世界を望むのだ：
そして澁刺たる生成の中で実験することで
それが悠久の時の末にえた帰結とは、取って代わる生物としての価値があるのは
海がより長い時間をかけて育んだ生来の重々しきものだったということ：

あたかも、このふたつの環境で、それは多様なものとして欲求するかのよう：
この唯一の世界にはゆっくりとした彷徨が満ちているが
これは、自転する〈他ではない命あるもの〉が
大きな波のうねりを欠いた中性的な結合体から生み出したもの——
澁刺たる繁茂する二重性にあるこの世界は、つき動かす。

とはいえ〔灼熱は〕〈大地〉を高くうち破り、海をも
海水をくるくると暴風雨に高く巻き上げながらうち破る：
災厄の星々が照らす夜々、長く伸びる姿で現れ出る島々を
屹立させ、それ以外の場所は隆起させず
ほかでもないゆっくりと形成された堆積物を水没させるのだ！：

開かれても

噴火にはいたらず灼熱に一層開かれ
灼熱はほとばしって轟き、そして充ち満ちる。

5) 前行からの要素を倒置させ、l'univers du Terrain nu... と読む。

6) 関係代名詞 qui は第3行の qui と同じく第2行の il を受けるものと読む。lent は副詞的用法の形容詞 男性単数形。eut que... は悩ましいが、que 以下の内容を「結論として得た」といったニュアンスで理解しておく。

7) évagation は一般には「放心」の意だが、ラテン語語源の「彷徨」の意にとる。動物の運動、あるいは、進化の実験か。

8) 動詞 diromper は18頁第3行に既出(同所註解参照)。この現在分詞の直接目的補語は les Terres, et les mers であり、つづく dressant および n'exhaussant と、その意味上の主語は最終行の les ardeurs である。

9) 関係代名詞 qui も18頁第15行と同じく、最終行の les ardeurs を先行詞とするものと読む。

[26]

V

Mais lent adaptaient-ils¹⁾ quant à imprudemment
 aller les purs et les premiers sortis de l'onde
 (quels animaux des eaux inaptes à mouvoir)
 à étrangers avènements²⁾ aux monts du monde :
 lent qui³⁾ loin de la mer émeuvent⁴⁾ vers le mont
 les mêmes qui naissent Autres par un laps long.

Aux mouvements de leur vouloir est adaptée⁵⁾
 multiple, qu'ils astreignent aux velléités
 l'enveloppe stérile à stupeurs⁶⁾ déhérentes⁷⁾ :
 et des irradiements⁸⁾, nus aux époques à
 sentir parmi les mers l'aventure et la proie —
 dans, haut ! de longs départs lourds et diligents
 meuvent en âpretés grêles, et

dans les plantes

 pesantes va leur ordre stupide, levant
 lourde la motion vers les Terrains du vent.

Tressaillent des ardeurs les Terres, et giroie⁹⁾

1) ils は次行の les purs et les premiers sortis de l'onde を受けるものと読む。adapter は一般には他動詞だが、ここでは代名動詞 s'adapter のニュアンスで用いられているように思われ、第 4 行の à étrangers avènements 以下につなげて読む。

2) avènements は「到来」ではなく「到達」の意で読む。

3) 関係代名詞 qui の先行詞は次行の les mêmes 以下と読む。

4) émeuvent は本作品の特有語法である他動詞の代名動詞的用法で、s'émouvoir の意で理解する。

5) 以下の 3 行は、l'enveloppe (qu'ils astreignent aux velléités) est adaptée aux mouvements de leur vouloir と読む。

6) この stupeurs も本頁第 15 行の stupide も、「愚鈍、愚かな」ではなく、ラテン語語源 stupere (動かずにいる、茫然自失する) のニュアンスで読む。

[26]

V

だが無謀にも〔陸に〕向かうことについて言えば、
海から最初に出た純粋なものたちは
(動くことの苦手な水中の何という動物たちか)
世界の山々に到達するという未知の行動にゆっくりと適応していった：
ゆっくりと海からは遠く山の方へと動くのだ
長い時を経て〈他なるもの〉として生まれる同じものたちは。

結びを解かれた朦朧状態にあっては不毛だった外皮が
それらの意志の動きにあわせて
多様なかたちとなり、漠たる意志に従う：
幾時代も海中で冒険と獲物の気配を感じられるほど
むき出しであった放射状に広がるものが——
高みへ！ 長々と重たげながらもせき立てられて発動し
かばそい刺々しさとなって動く、そして
重くうなだれる
植物の中へとそれらの朦朧とした命令は進み行き、
風の〈土地〉に向かって重たげに動きを起こす。

〈大地〉は灼熱で震え、そして旋回するのは

7) 宝典や Littré には採録されていないが、ラテン語の *haerere* (結びつけられている、固定されている) 由来の語幹に否定の接頭辞 *dé-*をつけた新造語と捉え、「結びを解かれた」の意と理解する。この語は、51 頁第 13-14 行、56 頁第 4-5 行にも見られる。

8) *irradiements* という語は宝典や Littré に記載がないが、動詞 *irradier* が名詞化されたものと理解する。クラゲの四方に伸びる触手、あるいは、ヒトデの腕やウニの棘皮のようなものがイメージされているか。なお、この語は 3 行後の動詞 *meuvent* と関連づけて読む。訳ではほやかしてあるが、*meuvent* は本作品の慣例にしたがって代名動詞的ニュアンス——*se mouvoir* (動く)——と読むか (*des irradiements* が主語)、他動詞と読むか (*ils* が主語で *des irradiements* は直接目的補語) のどちらかであろう。

9) 動詞 *giroyer* は宝典や Littré には記載がないが、Wiktionnaire によれば自動詞で *tournoyer* (回転・旋回する) と同義とされる。

[27]

l'œuvre latente des mers mûres en spumant¹⁾ :
et, des nuits éteignantes instants allumant²⁾ !
(la pluie illuminante et lourde dégénère)
d'omnivagues³⁾ lueurs ouvrent. . . .⁴⁾

Au vent d'alors
en les plantes lourdes va leur ordre stupide.

Lourdes ouvertement au long de vastités
luisant d'intérieures eaux : qui grand murmurent⁵⁾
véhémentement et monotinement,

durent

les plantes —

Deux aurores grand alternent, hors
nuages et nuits éteignantes et orages
sur la montée à l'air des animaux des eaux.

1) ラテン語の spuma (泡) から派生させた現在分詞 (フランス語 spume は医学用語で癲癇発作時などにみられる口泡を指す)。

2) allumant の意味上の主語は次々行の lueurs, 直接目的補語は instants des nuits éteignantes と読む (ただし, instants には冠詞がないので, 破格だがこれは一種の副詞 (「瞬間瞬間に」) のように使われているのかもしれない)。

[27]

熟した海が泡立ちながら行う秘められた活動：
そして、〔光を〕消す夜々の瞬間瞬間を輝かせつつ！
(光輝く重たい雨はその力を失う)
あまねく彷徨う煌めきの数々が〔闇を〕開く……

当時の風を受け

重たげな植物の中へとそれらの朦朧とした命令は進み行く。

〔植物は〕重たげに公然と広漠な大地に沿って広がり
内なる水に煌めき：大きなざわめきを
激烈にまた単調に立てる、

長く耐えるのは

植物——

ふたつの曙光は壮大に代わる代わる現れる、
雲と〔光を〕消す夜と嵐の外で
空気の中へと上がる水中の動物たちの上に。

-
- 3) ラテン語の *omnivagus* (あまねく彷徨う) をフランス語化した形容詞と理解する。
 - 4) この箇所は通常の三点ではなく五点による中絶符になっている。
 - 5) *Lourdes, luisant, qui* はすべて *les plantes* にかけて読む。

[28]

当時の植物の中へとそれらの茫然とした命令は進み行く：

その一方で、空気の中に乗り出した企ての苦しみを抱えて！
奇異な姿で重たげに彷徨うものはみな数々の彷徨の末に破滅し消えていく
馴染みのない空気を離れ、あつという間に、試されることもなく
(海に向かって、海に、海に、海に)
すべて道を外れ、敗走しつつ乾き消えてゆく
海に向かって、海に、海に、海に向かって……

そして長らく〔光を〕消す夜々の瞬間瞬間を輝かせつつ
あまねく彷徨う煌めきの数々が〔闇を〕開く！

その間にも

絶え間ない選択の中、生成の連鎖をくり返し
生殖願望の追求を繁殖させる
生命の〈震え〉の連続が、つらなる。

2) devient の主語は 2 行後の la suite du vivant Tressaillement であるが、すこし意識する。

[29]

VI

Tordent-elles¹⁾ en élans qui girent,
des parts
en sommets d'îles qui végétèrent épars —
leurs outrages²⁾ : irruent³⁾ des îles !
et plante
et meut la vitalité pullulante, allante. . .

Tout en dérouté aride déviait, et n'eut⁴⁾.
Mais de⁵⁾ qui n'ont mouvementé vers même voie. . .
mais des lents géniteurs dont le sort lent
connut
cet avantage lent de l'eau longtemps urgente :
lent⁶⁾ qui⁷⁾ viennent d'aventure lent⁸⁾ diligente
et les mêmes qui vont Autres par un laps long :
sur⁹⁾ de plats irradiements nus et pulsatiles
de quoi l'onde est ondante en hauteur et largeur
de nouveaux Advenus évaguent. . .

(Deux aurores grand alternent, hors de désastres)

1) elles は次行の des parts を受けるものと読む。

2) outrage は一般には「侮辱」の意だが、ラテン語語源の ultra (向こう側へ、越えて) を踏まえ、隆起が次第に高くなること言うものと理解する。

3) 他動詞の irruer は 18 頁第 15 行に既出 (同所註解参照)。ここでは「島の陸地部分をそれまで海面であった領域に侵入させ拡げる」の意で理解する。leurs outrages が irruent の主語、直接目的補語が des ↗

[29]

VI

身を振り、渦を巻いて跳ねるかのように

鳥々の

頂の部分は隆起し、ところどころに植生を見せた――

隆起はどンドンと高くなり：鳥々を上げていく！

茎をのばし

蠢かせるのは、溢刺と繁茂する生命力……

[水から出たものは] すべて敗走しつつ乾き道を外れ、生命を失った。

けれども、同じ道に向かって動きを起こさなかったものたちのうち……

けれども、動きの緩慢な生殖体たちだ、その緩慢な運命は

知った

ずっと差し迫ったものだった水があるというあの緩慢な利点を：

これは緩慢に入念な冒険からゆっくりと生まれてくるものたち

長い時を経て〈他なるもの〉として歩み行く同じものたち：

波を高く広がりをもって波うたせる

むき出しに拍動しながら放射状に平らに広がるもので

新しく〈到来するものたち〉は彷徨い出る……

(次々と起こる災厄とは関係なく、ふたつの曙光が壮大に代わる代わる現れる)

↙ *iles* であると読むが、*irruent* を他動詞の代名動詞的用法と理解して、*des îles* をその主語とすることもできよう。

4) *n'eut* の目的語がないため、文脈から「生命を持たなかった(失った)」と理解する。

5) 「部分」を示す *de* であると読む。

6) 副詞ととり、つづく *viennent* にかけて読む。

7) 先行詞は3行前の *des lents géniteurs* で、この同格が次行の *les mêmes qui...* であると読む。

8) *lent* は男性形なので、*aventure* ではなく *diligente* にかかる副詞的用法。

9) *sur* は悩ましいが、*compter sur ses doigts* (指を折って数える) のように「道具」を表すものと読む。
irradiements が示しているように思われる「触手」を広げ海面を波立たせながら彷徨うイメージか。

[30]

et quand du

Test stérile n'est que vestige¹⁾, évaguent du
gré de²⁾ leurs vitesses les nouveaux : versatiles³⁾
Tant ! qu'ils vaguent nuant les hautes ondes du
gré de leurs vitesses larges, et versatiles
sous l'aquatile⁴⁾ vent des végétaux de mers.

Des végétaux de mers errent vents aquatiles. . .

Très hautes et plus haut ! des végétations
(la pluie en des endroits sparsile⁵⁾ dégénère)
Très hautes et plus haut ! des végétations
droites de nudité morne et perpétuelle
ouvrent sur les stipes des maturations⁶⁾
mêlant ventée⁷⁾ en amas d'agitations :
(et le vent et le vent et le vent) . . .

Dans le doute

(Tout déviait et disparut en la dérouté)
dans le doute mu de variété des eaux
de nouveaux Advenus vaguent, et versatiles. . .

1) 後口動物（ヒトデやウニなど）から前口動物（エビといった脱皮動物など）への進化を指しているように思われる。この進化に伴って敏捷な運動性が獲得される。

2) du gré de という熟語は存在しないようだが、gré の語義（意向）をふまえて理解する。

3) versatiles は現在では「気が変わりやすい、移り気の」の意だが、ここではラテン語の形容詞 versatilis（動く）を踏まえて読む。

[30]

そして

不毛な〈外殻〉のうち残骸だけが遺されるとき、新しきものたちが
それぞれの速度にまかせて彷徨い出る：動きまわるのだ
かくも！ だから、各自の様々な速度にまかせて
高まる波の色合いを変化させつつ彷徨う、そして
海の植物たちを揺らす水流のままに、動きまわるのだ。

海の植物たちは水流にもまれては揺れ動く……

かくも高く、より高く！昇っていく植生、
(ところどころにまばらに降る雨は力を失う)
かくも高く、より高く！昇っていく植生、
生気も変化も見せず、むき出しの姿からまっすぐ伸びる植生は
茎また茎の上に 成熟して形成されるものを広げる
風に身を震わせながら、揺れに揺れる：
(そして風、そして風、そして風) ……

^{まよひ}
懐疑の中で

(すべては道を外れ、敗走しつつ消えていった)
大洋がさまざまに見せる姿に懐疑をかきたてられて
新しく〈到来するものたち〉は彷徨い、動きまわる……

4) aquatile は宝典に記載なし。Littré には « Qui vit dans l'eau. Plante aquatile. » とあるが、ラテン語の形容詞 *aquatilis* を踏まえてより一般的に「水の」と理解する。

5) ラテン語の *sparsilis* (*qui peut être dispersé*) に基づいて理解する。

6) 先行する *des végétations* を主語として、*ouvrent (sur les stipes) des maturations* と読む。*maturations* は成熟の結果として開くもので、葉や花、キノコの傘などが考えられよう。*stipe* (茎) はシダ植物の「葉柄」やキノコの「茎」を表す語。

7) *ventée* は動詞 *venter* (風が吹く) の過去分詞女性形の名詞化と理解する。この語は 40 頁第 7 行、42 頁第 3 行にも見られ、35 頁第 3 行では *la ventée* と定冠詞を付されている。

[32]

VII

et en le lourd venir grandi haut stridule et
 Titille qui n'alentisse d'air qui dure¹⁾, et!
 grandie erratile et multiple d'éveils, stride
 mixte, plainte et splendeur — la plénitude²⁾...

Aride³⁾

en la moiteur au vent de pétales qui pleut!
 variété qui vient dans une géniture
 lent adaptée à l'air qui longtemps la sature⁴⁾
 des⁵⁾ imprudents montés quant à imprudemment
 aller les purs et les premiers sortis de l'onde⁶⁾
 et vers la mer longtemps⁷⁾ qui disparaurent:
 du
 vent⁸⁾ supportés par les irradiements⁹⁾ diptères
 des saltigrades doux¹⁰⁾ n'iront plus vers les eaux —

-
- 1) qui n'alentisse d'air qui dure を主語とし、stridule et titille を動詞とする。alentisse は他動詞の代名動詞的用法（速度を落とす）と理解する。
- 2) erratile はラテン語の erratilis（彷徨っている）に由来し、grandie, multiple, mixte とともに次行の la plénitude にかかる。ただし、mixte は意味上は strider——宝典によれば「鋭い鳴き声をあげる」の意——を具体的に説明するものであろう。なお、以上の4行は34頁や41頁で（ほぼ同一のかたちで）くり返され、似た詩節が56頁末尾にも見られる。
- 3) 41頁第8行や56頁第10行では la plénitude aride と続いて現れるので、この aride も空行で隔てられているが直前の plénitude にかけて読む。「乾いている」とは陸に上がった動物を言うのであろう。
- 4) qui の先行詞は l'air で、la は前行の une géniture を受けると読む。saturer は「うんざりさせる」というよりは、ラテン語の saturare の語義をふまえて、「養う、満腹にする」といったニュアンスで読むべきだろう。

[32]

VII

そして、重々しく到来しつつ大きくなり、高く鋭い音をあげ
軽く触れていくのは、大気が滞留しても速度を落とさぬもの、そして！
大きくなり彷徨い様々な目覚めで一杯になりつつ、
うめきと輝きの混ざった鋭い音をあげるのは——充溢……

乾いている充溢

花びらのように降り注ぐ風雨の湿り気の中であって！
空気にゆっくりと適応した子孫が変種として現れ
長きにわたり空気で養われる
この変種が生まれたきっかけは、無謀にも〔陸に〕上がってきたものたち
無謀にも〔陸に〕向かうことについて言えば、これは海から最初に出た純粋なものたちで
彼らはもうずっと前に海の方へと消えてしまっていた：

風に乗り

放射状の双翅によって支えられ
飛び跳ねて動く軟らかなものたちはもはや水域には向かうまい——

-
- 5) この des (de+定冠詞) は 2 行前の vient にかけて読む (「無謀にも陸に上がったものたちから生じる変種」)。
6) les purs et les premiers sortis de l'onde の位置づけは悩ましいが、前行の les imprudents montés の同格的言い換えと理解しておく。
7) vers la mers longtemps は前行の aller に続きそうにも見えるが、26 頁冒頭の同一表現の箇所や 28 頁第 6-7 行 (disparaît en dérouté aride / Vers la mer...) を踏まえれば、直後の qui disparurent に続けて読むべきであろう。
8) 以下、du vent (風によって、風に乗って) と par les irradiements diptères のふたつが supportés の補語であると理解する。
9) 31 頁第 5 行の註解参照。
10) saltigrade は形容詞または男性名詞で、宝典によれば「飛び跳ねて動く (もの)」の意。doux とあるように、もはや「外殻」を備えてはいない。

[33]

Torrentielles quand en leurs stipes¹⁾, les eaux
Terrestres multiplement des monts vont et vaguent²⁾ :
Torrentueuses et longtemps nueusement³⁾
Très hautes, et plus haut qui de pétales pleuvent —

(Titille qui n'alentisse la lourdeur, et
grandie erratile et multiple d'éveils stride⁴⁾)

Torrentueuses lent les végétations
Très hautes ! de pétales grands ondent ruptiles⁵⁾...

Des saltigrades doux n'iront plus vers les mers :
et ventant de lumière⁶⁾ la stupeur⁷⁾, ouverte
des longs irradiements pulsatiles aux airs
en grêle mouvement d'ailes grêles à perte !
pratiquent-ils l'erreur⁸⁾ d'un vol agitateur⁹⁾ :

ce pendant qu'à sauts grêles dans la pesanteur
morne, leur aile qui multiple d'éveils stride

1) leurs は 6 行後の les végétations を受けるものと読む。stipes は 30 頁第 12 行の註解参照。前置詞 en はシダ植物の葉の重なりの中を水が伝っていく様子を示しているのであろう。

2) ここの vaguer は「彷徨う」の意でとる。31 頁第 10 行の註解参照。

3) nueusement の語は 47 頁第 6 行にも現れるが、宝典や Littré に記載なし。次行で雨が問題になるので、nue (雲) から造語した副詞と理解しておく。

4) この 2 行は 32 頁第 2-3 行を参照して読む必要がある。grandie erratile et multiple は la lourdeur にかけるしかない。この la lourdeur は alentisse の直接目的補語に見えるが (その場合, qui は celui qui の意), むしろ titille と stride の主語とし, それに qui n'alentisse がかかると読むほうが, 32 頁と整合的である (alentisse も同様に他動詞の代名動詞的用法と理解する)。

[33]

地上の水はそのとき、植生の茎々をつたい、
奔流となって山々から様々に分岐して流れ彷徨う：
奔流となり、そして長い時間をかけて雲となって
かくも高く、より高く昇っていく水は花びらのように雨となって降り注ぐ——

(軽く触れていくのは〔大気が滞留しても〕速度を落とさぬ重さを持つもの、
大きくなり彷徨い様々な目覚めで一杯になりつつ鋭い音をあげる)

奔流のようになった植生はゆっくりとかくも高く！
昇っていき、裂開して大きな花びらで波うつ……

飛び跳ねる軟らかなものたちはもはや海には向かうまい：
朦朧とした翅に光の風を送り、
長く放射状に広がる拍動によって大気へと〔翅を〕開き
割に合わぬが繊細な翅を繊細に動かして！
彼らは実践するのだ、空気をかき乱して飛翔し彷徨うことを：

その間にも、陰鬱な重力の中で繊細な跳躍をして
彼らの翅は様々な目覚めに一杯になって鋭い音をあげる

5) Littréによれば *ruptile* は次の意味を持つ。« Terme de botanique. Qui s'ouvre en se déchirant d'une manière irrégulière, par l'effet du grossissement des parties renfermées. »

6) *venter de lumière* (光で風を送る) とは、翅を動かして飛ぶと翅がきらきらと輝くことをイメージしているのであろう。*venter* は一般には自動詞だが、ここでは他動詞で、直接目的補語は *la stupeur*, 意味上の主語は3行後の *ils* である。

7) 26頁第9行と同じく、*stupeur* は「朦朧とした状態」と理解する。

8) 20頁第8行と同じく、*erreur* は古義「彷徨、遍歴」で解釈する。

9) *agitateur* はもちろん「扇動者」ではなく、ここでは「(空気を)かき乱す」の意であろう。

[34]

plus qu'à voler est¹⁾ apte à palpiter. . .

et en le lourd venir grandi lent stridule et
Tittle qui n'alentisse d'air qui dure, et !
grandie erratile et multiple d'éveils, stride
mixte, splendeur et plainte — la plénitude. . .

et meut

la vitalité vironnante²⁾—

et loin de Terres

et vers les grands pétales d'agitations :

Terminaux et divers par adaptations

des sortis de leur sort³⁾ porteront l'amplitude⁴⁾

aigus et larges !

Tittle la plénitude. . .

1) 主語は前頁最終行の leur aile である。

2) vironnant も vironner も 宝典や Littré には記載なし。Godefroy によれば, vironner は古仏語で tourner en rond, tourner, aller autour の意という。

3) des sortis de leurs sort は porteront の主語であり, 前行の terminaux et divers および次行の aigus et larges はこれにかけて読む。aigus は嘴などの鋭い部位を備えるようになることを言うか。

[34]

この翅は飛ぶよりも、揺らめくことに適している……

そして、重々しく到来しつつ大きくなり、ゆっくりと鋭い音をあげ
軽く触れていくのは、滞留する大気の流れによっても速度を落とさぬもの、そして！
大きくなり彷徨い様々な目覚めで一杯になりつつ、
輝きとうめきの混ざった鋭い音をあげるのは——充溢……

そして蠢かせるのは

周囲を彷徨う生命力——

そして〈大地〉からは遠く

揺れ動く数々の大きな花びら〔のような雨〕の方へと：

自分の運命から脱したものたちが適応の果てに

達するかたちは多様であり、彼らは鋭くなりまた大きくなって

〔生息の〕領域を広げていくだろう！

充溢は軽く触れていく……

4) porter l'amplitude の意味するところは難しいが、「生息域を広げる」といった含意か。

[35]

VIII

Torrentielles quand en les stipes, les eaux
Terrestres multiplement des monts vont et vaguent :

Haut véhémentement vers la ventée et des
ustions d'air et des longueurs nûment perdantes¹⁾
Tressaillantes²⁾ d'autres et ardents errements !
la végétation monte de mouvements. . .

et, d'agitations et grand pleuvant ruptiles
de pétales³⁾ :

 parmi⁴⁾ les heurts d'éruptions
à sursauts magnétiques soustraits⁵⁾ ! et pendantes⁶⁾
d'instant, et droites là de sinistre mouvant —
inhument leur ondant horizon de grand vent
Les masses végétant en orages. . .

1) 17 頁第 3-4 行の変奏。

2) Tressaillantes は longueurs にかかるものとして解釈する。

3) d'agitations から pétales までを、前行の de mouvements の説明ないし la végétation の動きとして解釈する。

4) 以下の構文は、les masses (主語) inhument (動詞) leur ondant horizon. . . parmi les heurts. . . ととる。

[35]

VIII

地上の水はそのとき、茎々をつたい、
奔流となって山々から様々に分岐して流れ彷徨う：

激烈に高く、風の吹く圏域へと、そして
燃えあがるような大気、長くくっきりと消えていくが
別の燃えるような彷徨によってうち震えるものへと！
植生が繁茂の動きで盛りあがっていく……

そして、揺れ動き裂開し、花びらとなって
雨のように広く降り注ぐ：

磁気爆発から

逃れて落ちてきた噴火の衝撃の間へと！ ときに
垂れ下がり、かしこでは垂直に不吉な動きを示しつつ——
雷雨の中で生長するいくつもの〔植物の〕塊が
大風で波うつみずからの境界を埋めていく……

5) les heurts... soustraits à sursauts... と読む。sursauts magnétiques はさしずめ「磁気爆発」と訳しうるが、ここでは一般的な噴火と変わらないように思われる。その噴火物のうちで噴火の勢いを逃れて地上に落ち衝撃を与えたもの（溶岩）の間に、植生が飲みこまれていく情景がイメージされているのであろう。

6) pendantes と次の droites は最終行の les masses にかかる。

[36]

Mais plante

et meut la vitalité pullulante, allante...

Nuant

les hautes ondes de nuit vive, versatiles¹⁾
quand vont et évaguent²⁾ des vitesses :
Montés³⁾ des eaux vers le vent dont ils ne mourront !
du ventre et multipodes (et à pulsatiles
et plats irradiements évague leur divers
parentage) : montés au vent dont ils ne meurent
et massant de hauts nœuds d'épaisseurs⁴⁾, repent⁵⁾ aux
stations de nouveaux Advenus
dont vient luire
l'air muant⁶⁾ : et lors qu'⁷⁾est adéquate⁸⁾ à quoi meut
de vaquante stupeur⁹⁾ leur ventre lourd, et meuvent¹⁰⁾
d'ire, et qui luise et meurtrisse en dardant ! de leurs
multipliés¹¹⁾ Têtes d'angles et vertex d'ire
les volitions lentes et liant — leur voix...

1) 30 頁第 3 行の註解参照。

2) この évaguer には「彷徨う」だけでなく、「(水中生物が) 波間から姿を見せる」といったニュアンスもあるかもしれない。

3) 以下, Montés... du ventre et multipodes... montés... massant... はすべて, 第 11 行の de nouveaux Advenus にかかる。第 3-5 行が水中を動く生物を語ったのに対して, 第 6 行以降は陸(「風」)に上がった「新しく〈到来するものたち〉」を歌う。

4) 「脚が多数」と言われていたので頭部をもつムカデのような形態の生物がイメージされているか。あるいは, 鎌首をもたげる蛇の頭などを想定しているか。

5) 動詞 repter はラテン語の動詞 reptare (這う, ぶらぶら歩く) から作られた新語であろう。フランス語の reptation (匍匐, 爬行, はうこと), reptile (爬虫類の動物, 地面をはう動物) はその関連語である。

6) この箇所が蛇のイメージを前提しているとすれば, muer は「脱皮する」の意となりそうだが, l'air muant (脱皮する空気) は理解が困難である。とりあえず「空気が(色合いを)変化させつつ輝く」と訳しておく。蛇の鱗の輝きがイメージされているのかもしれない。

[36]

しかし茎をのばし

蠢かせるのは、溢刺と繁茂する生命力……

命にあふれる夜の

高まる波の色合いを変えながら、動きまわり

すばやいものたちが進み行き彷徨うその一方で：

海から風へと上がっても、それで命を落とすことはないだろう！

腹とたくさんの脚をもったものたち（そして拍動しながら

放射状に平らに広がるもので、その様々な類縁種が

彷徨い出る）：風へと上がっても、それで命を落とすことなく

厚みのある節を上部に集めたこの新しく〈到来するものたち〉は

生息域を這うのだ

彼らのせいで、空気は〔色合いを〕変化させつつ

煌めくにいたる：そして、空っぽで朦朧状態のまま

自分の重たい腹を動かすものに〔意欲の声が〕ぴったりと合うとき、

その怒ったように頭頂を尖らせた角張った無数の〈頭〉で

襲いかかり！煌めいて殺めるものを怒りにまかせて動かすのは

ゆっくりとしたしなやかな意欲——この意欲の声……

7) Littré には « Lors que, lors même que, se dit au même sens qu'alors que » とある。

8) est adéquate の主語は女性単数名詞なので、4行後の leur voix しかありえない。

9) 26頁第9行の註解参照。蛇とおぼしき動物はまだ明確な思考を有しておらず、空虚で朦朧とした意欲しか持たない。

10) meuvent 以下の4行も難解である。meuvent の主語は3行前の de nouveaux Advenus でもありうるが、それだと「意欲 (volitions) を動かす」ことになり内容的に不自然である。したがって、ここでは最終行の les volitions を主語として読んだ。また破格だが、qui luise et meurtrisse en dardant... を celui qui... と読み、meuvent の直接目的補語とする。ちなみに、蛇には発声器官がないので、voix (声) の語は困惑させるが、ここは volitions (意欲) の「声」なのであろう。

11) multipliés は Têtes と vertex の両方にかかっていると解釈する。

[37]

et repté aux stations leur masse haute, et pleuvent
pétales les végétations. . .

Dont luiront
moite Terre et stipes au plus haut, que¹⁾ noueront
des noûures vivantes qui luisent :

vient luire
de multipliés Têtes d'angle et vertex d'ire
la volition liante en reptants émois
long agitant : et longs algides²⁾ qui demeurent. . .

1) que の先行詞は les végétations としたが、直前の stipes かもしれない。

2) algides には前行の名詞 émois を補って読む。

[37]

そして生息域を這うのは彼らの上部に集められた塊、そして雨のように
植生が花びらとなって降り注ぐ……

その植生の

湿った〈大地〉とこれ以上ない高さの茎々は煌めくだろう、それ自体が
煌めく生き生きとした結実の数々はこの植生たち同士を繋ぐだろう：

煌めくのは

怒ったように頭頂を尖らせた角張った無数の〈頭〉の
しなやかな意欲、それは這うように広がる動揺となって
長いあいだ揺れ動く：そして長いあいだ冷たい動揺が残る……

[38]

IX

ce pendant qu'en
ininterrompue option devient en suite
multipliant la quête du vœu génital
la suite du vivant Tressaillement, en suite :

Muant la pesanteur de vertiges latents¹⁾...
imminentes et de leurs Têtes d'angles, dure
ire aux pullulements moites! —
et qui luisent et meurtrissent droit! des splendeurs
reptiles²⁾ algidement reptent

et diapre
de³⁾ multipliés Têtes d'angle et vertex âpre⁴⁾
aux stipes — leur noûre⁵⁾ d'instant et qui luit
captieusement.

Mais il est en aventure⁶⁾
cahots et sauts! parmi l'âge des végétants :

1) muer は 36 頁第 13 行にも現れたが、ここでは「脱皮する」という自動詞の語義や、muer sa tête (鹿の角が抜け落ちる) といった表現に基づき、より明確に脱皮のイメージで解釈する。vertiges は「めまい」ではなく、語源的な「旋回」、「渦巻き」の意でとり、とぐろをまく蛇がそのとぐろを「徐々に (latents)」動かしながら、鎌首をもたげていく情景と理解する。以下、muant, imminentes, qui luisent... はみな第 8 行の des splendeurs にかかる。

[38]

IX

その間にも

絶え間ない選択の中、生成の連鎖をくり返し
生殖願望の追求を繁殖させる
生命の〈震え〉の連続が、つらなる：

身をゆっくりとくねらせつつ、重さを脱ぎ捨てながら……
その角張ったいくつもの〈頭〉で迫り、
湿った〔植物の〕大繁殖に対する激しい怒り！——
煌めく〈頭〉で一直線に！殺める
壮麗な蛇たちが冷たく這っていく

そして〔結実〕飾りたてる

でこぼこ
凸凹した頭頂を尖らせた角張った無数の〈頭〉を
茎々のあたりで——時々^に生じるその結実は欺くように
煌めくのだ。

しかし、冒険は途上である

よろめいたり飛び上がったたり！ 植物の繁茂する時代のただ中で：

-
- 2) この reptiles は形容詞だが、意識して「壮麗な蛇たち」とした。
 - 3) この de は「手段」を示すものとり、前行の diapre を絶対的用法ないしは代名動詞的ニュアンスのものと読むこともできるが、ここでは不定冠詞複数形と理解し、以下は diapre の直接目的補語と読む。いずれの場合も動詞 diapre の主語は次々行の leur nouûre である。
 - 4) âpre は次行の aux stipes につづけて、âpre à... を avide de... に解することも可能かもしれないが、ここでは語源であるラテン語の形容詞 asper (凸凹した) を踏まえて読むべきだろう (14 頁第 8 行の âpretés に対する註解参照)。この場合、aux stipes は「茎々のあたりで」といった意味になろう。
 - 5) nouûre は蛇が現れる文脈では「結び目」すなわち「とぐろ」の意にもなりそうだが (44 頁第 14 行を参照)、37 頁第 5 行と同じく「結実」の意で理解しておく。
 - 6) il は非人称で次頁冒頭の que 以下を受ける。同様の il est en aventure que... の構造は次頁第 8 行以下にも現れる。

[39]

que mal quadrupétant par des géométries
longipèdes¹⁾ et mal adroites,
Triturant plus avant de Terrains aux galops
de nouveaux
Advenus, à grands exils et en des peurs nues
cahots et sauts ! vont dans Terres et dans îlots
errants de rauqueurs²⁾...

Mais il est en aventure
qu'en déploiement hors vent de vol usurpateur³⁾ :
par des irradiements vastes et pulsatiles
Travaillant à grandes ailes l'air au loin d'îles —
Aléatoirement ailés au loin levant⁴⁾
(et le vent et le vent et le vent et le vent)
aléatoirement ailés de nuits doigtées⁵⁾
de nouveaux Advenus à l'altitude issant
agitent le destin d'angulaires montées :
Tant ! que nul doute est dans le vol usurpateur
et qu'un stagnant désert n'est pas, qui d'ouverture
d'ailes ne palpite de lumière et nuits,
quand :
Aléatoirement ailés de nuits doigtées —

1) des géométries longipèdes (長足の幾何学) は、四足歩行するには幾何学的に言って不向きな長い足を踏まえた表現と理解する。

2) rauqueur の語は宝典や Littré には記載なし。形容詞 rauque (しわがれた, うなるような) の名詞化とする。errants de rauqueurs という表現は分かりづらいが、「咆哮しつつ彷徨う」と理解しておく。

3) いままで自分たちのテリトリーではなかった空にはじめて進出するので、「空を篡奪する」という意味で「篡奪者の飛翔」と言ったのであろう。

[39]

幾何学的にうまく四足歩行のできない
長い足をもち、不器用で、
〈土地〉をもっと前へと早足で蹴りながら

新しく〈到来するものたち〉は
大いなる流浪の地に向かって、むき出しの怖れを抱き、
よるめいたり飛び上がったり！ 数々の〈大地〉と小島の中を進む
咆哮しつつ彷徨いながら……

しかし、冒険は途上である
風をよけつつ篡奪者の飛翔は展開していく：
拍動するゆったり放射状に広がるものによって
大気を大きな翼で叩きながら鳥々をはるか後にする——
偶然にも翼を持ち日の出へと遠く舞い上がり
(そして風、そして風、そして風、そして風)
巧みな指をもつ夜々を経て偶然にも翼を持ち
新しく〈到来するものたち〉は高みに現れ出て
急角度で上昇するという運命を煽り立てる：
それほどに！ だから篡奪者の飛翔にはいかなる疑いもない
そして広げられた翼によって昼や夜に揺らめかぬような
停滞した砂漠などもない、

そのとき：
巧みな指をもつ夜々を経て偶然にも翼を持ち——

4) au loin levant は le soleil levant (日の出) を下敷きにし、二行後の de nuits doigtées (巧みな指をもつ夜々) と対句になっていると解釈した。

5) nuits にかかる形容詞 doigtées は難解だが、ホメロスに見られる有名な表現「薔薇色の指をもつ暁 *ῥοδοδάκτυλος Ἥως* (rhododáktulos Ḓós)」を連想させ、nuit を修飾する一種の枕詞のような形容詞と理解できるかもしれない。また、nuits (夜) は、神による創造ではなく「進化論」的な生成を促す契機を示しているとも言えよう。

[40]

(ouïs! ouïs¹⁾ aux nues haut et nues où
Tirent²⁾-ils d'aile immense qui vire d'heur, ou
de lamentation houle)

aléatoirement ailés de nuits doigtées
de nouveaux Advenus à l'altitude issant
agitent le destin d'angulaires montées :
vent et ventées.

1) ouïs!ouïs (ウイ, ウイ) は鳥の鳴き声を模しているか。また, 創造に対する肯定の「ウイ oui」も含意されているかもしれない。

2) tirer は口語的表現で「行く, 進む」の意。宝典には, « *Fam.* Aller, s'acheminer, se diriger. » と説明がある。

[40]

(聞こえる！ 聞こえる，雲また雲の高き天空に
そのものたちは巨大な翼を運よく向き変えたり
鳴き声で波うたせながら，進んで行く)

巧みな指をもつ夜々を経て偶然にも翼を持ち
新しく〈到来するものたち〉は高みに現れ出て
急角度で上昇するという運命を煽り立てる：

風，また吹き渡る風。

[41]

X

Ouïs ! ouïs aux nues haut et nues où
Tirent-ils d'aile immense qui vire...

et quand vide
et vers les grands pétales¹⁾ dans l'air plus aride —

(et en le lourd venir grandi lent stridule et
Titille qui n'alentisse d'air qui dure, et !
grandie erratile et multiple d'éveils, stride
mixte, plainte et splendeur ! la plénitude aride)

et vers les grands pétales d'agitations
lors évanouissait un vol ardent qui stride...

(des saltigrades doux n'iront plus vers les mers...)

1) この行および第9行に見える pétales の語が文字通り花びらを意味するのか、雨のメタファーなのかは悩ましい。振り返ってみると、32頁第6行、33頁第4行、34頁第9行では雨のイメージで用いられていたようだが、33頁第8行、35頁第8行、37頁第2行は花びらの意であろう。続く第5-8行と同様の詩句が32頁と34頁に見られ、本頁第4行では l'air aride (乾いた大気) と対比されているようにも見えるので、本頁の pétales は雨のメタファーか。

[41]

X

聞こえる！ 聞こえる，雲また雲の高き天空に
そのものたちは巨大な翼を向き変えて進んで行く……

すると空には何もいなくなるのだ
そして，より乾いた大気を横切る数々の大きな花びらの方へと——

(そして，重々しく到来しつつ大きくなり，ゆっくりと鋭い音をあげ
軽く触れていくのは，滞留する大気の流れによっても速度を落とさぬもの，そして！
大きくなり彷徨い様々な目覚めで一杯になりつつ，
うめきと輝きの混ざった鋭い音をあげるのは！ 乾いた充溢)

そして，揺れ動く数々の大きな花びらの方へと
そのとき，鋭い音をあげる熱烈な飛翔は消え去りつつあった……

(飛び跳ねる軟らかなものたちはもはや海には向かうまい……)

[42]

Mais ouïs ! ouïs haut et lors un doux et vaste
éploiement viateur¹⁾ ouvrant : qui vinrent là
de qui planaient (vent et vent et vent et ventées)
aléatoirement ailés de nuits doigtées
Tirent d'aile avivant diaphanéités
de nouveaux Advenus :

et par l'instant qu'allume
(ouïs ! ouïs haut ou au loin d'eaux) le départ :
une luisante erreur et de vent et de plume
va droit ! et vire issante en aventure du
gré silent d'aller droit, et vire.

Un laps palpite
et plane, qui porte le doute de limite. . .

1) viateur については、22 頁第 5 行の註解参照。

[42]

いいや、聞こえる！ 聞こえる、高く、そのとき、ゆったりと広大に
旅するものが翼を広げる：飛んでいたものたちのうちで
そこに到来したものたち（風、そして風、そして風、そして吹き渡る風）
巧みな指をもつ夜々を経て偶然にも翼を持ったものたちが
進んで行く、半透明〔の羽根〕を生き生きと輝かせる
新しく〈到来するものたち〉だ：

そして、出発が

（聞こえる！ 聞こえる、高く、水辺から遠く離れて）燃え立たせる瞬間に：
風と羽根の彷徨う煌めきがまっすぐに
進む！ そして、まっすぐに進むことを静かに望んで
冒険に乗り出しながら向きを変え、また向きを変える。

しばしの間、

限界に懐疑を抱くものが揺らめき、飛ぶ……

[43]

et par delà¹⁾ l'amas multiple et pullulant
de sourdonnements²⁾ et de voix grand³⁾ ullulant⁴⁾
à de meuglantes, haut : et lors qu'est adéquate
à quoi meuvent de stupeur et d'ire des peurs
et aigus appétits — une épouvante,
et mate⁵⁾

(Va hâte et houle la vie ! et vont les galops)
quand dérouté une émigration de galops
mieux quadrupédant haut par des géométries
longipèdes et mal adroites :

et par delà la mer et la mer et les eaux
(ouïs ! ouïs aux nues) hors d'une limite :

un départ oisellant⁶⁾ part et meurt aux splendeurs.

1) 以下, par delà...につづき, lors que (第3行), quand (第8行)で始まるふたつの従属節, さらに et par delà... (第11行)以下の状況補語を経て, 主文は最終行の un départ... part et meurt である。

2) sourdonnement は, bourdonnement と sourd, assourdissement などを掛け合わせた造語か。「耳を聾するぶんぶんいう音」といったニュアンスであろう。

3) 副詞的用法の形容詞男性単数形。

[43]

そして、耳を聳するざわめきの音を次々に発し増殖する
有象無象の群れ、もうもうと鳴くものたちに大声で叫ぶ群れを
高く飛び越えて行くのだ：朦朧状態と怒りによって
恐怖と激しい欲求をつき動かすものにとって
——恐怖こそがふさわしいとき、

そして

(急ぐ、うねる、生命は！ そして駆け足は先に進んでいく)
幾何学的に長い足をもち、不器用だが、
体をもたげてより上手に四足歩行のできるものたちの
駆け足での移動が水に濡れ道を見失うとき：

そして海、そして海、そしてあふれる水を越えて
(聞こえる！ 聞こえる、雲間に) 限界のあなたに：

鳥となつての出発がなされ、輝きの中で命を落とす。

4) 綴りは底本通り。動詞 *ululer* (*hululer*) と理解する。

5) *mate* は直前の *une épouvante* にかかる形容詞にも見えるが、ここではラテン語語源の *mattus* (湿った) の意に理解し、次々行の *une émigration de galops* にかかるものと読む。動物たちの移動が水に脚を取られ行き悩む様子がイメージされているのではないか。それと対照的に鳥たちは高く飛んでいく。

6) *oiselant* は *oiseler* (鳥を仕込む、放つ。鳥に罟を仕掛ける) の現在分詞だが、辞書記載の語義を離れて、語源の *oiseau* により忠実な意味 (「鳥になつての」) であるように見える。

[44]

XI

Mieux quadrupédant haut par des géométries
longipèdes et mal adroites¹⁾...

De mont d'élan nu, haut ! et des monts²⁾ : et qui des
derniers³⁾ heurts ardent vaste ! épioie et multiplie —
(en Torrents des lueurs d'aigus heurts et Torrents⁴⁾)
un sursaut loin multiple en nuit lourde et de stries⁵⁾
irrite et rompt l'orage⁶⁾ des nuits imminent
de désastres dans une dérouté vivante
irruants⁷⁾ ! quand la mer de spumants⁸⁾ heurts haut vente
(et le vent et le vent et le vent et le vent)
et les Terres ardentes hautes en mouvant
luxurient...

Triturant plus avant de Terrains aux galops...
cahots et sauts (de rapides noûures lient⁹⁾)

1) この第2行は9音節で、残る3音節はかなり離れた第12行の luxurient (充ち満ちていく) である。
2) monts は I に登場する噴火のイメージに呼応しているようにも見えるが、文字通りの山々ではなく、
四足獣たちの跳躍によって描かれる弧の動きを「山」とみなして、四足獣そのものを指示しているとも
理解できる (いずれの場合も、de mont... et des monts は続く des derniers heurts にかけて読む)。
続く qui の先行詞は、四足獣の描写と読む場合は第1行の mieux quadrupédant となるが、噴火のイメージ

[44]

XI

幾何学的に長い足をもち、不器用だが、
体をもたげてより上手に四足歩行のできるものたち……

むき出しの、高い！跳躍の山、その山が幾重にもなり：その数多の衝突を
次々とまた新たに、燃えるように果てなく！ 広げ増やしていく四足獣たち——
(すどく衝突しあう煌めきの〈奔流〉、その〈奔流〉のさなか)
彼方でも驚きが連なって、重い夜のもといくつもの跳躍の筋をなし
夜々の差し迫った嵐を掻き立て引き起こす
生命の敗走へと押しやる災厄の嵐！
そのとき、泡立つ衝突の海は高く風を立て
(そして風、そして風、そして風、そして風)
燃えるような〈大地〉は高く^{うこめ}蠢かしては
〔草木に〕充ち満ちていく……

〈土地〉をもっと前へと早足で蹴りながら……
よるめいたり飛び上がったたり (すばやくとぐろを巻き

↙ジで読む場合は3行後の un sursaut (爆発) である (四足獣のイメージで読む場合はこの sursaut は「驚いて飛び上がること」の意となろう)。ここでは四足獣のイメージで訳出した。

- 3) derniers のニュアンスはとりにくいが、衝撃が新たに次々と生まれていく様子を示すものと理解しておく。
- 4) この詩句は11頁第3行と同一。
- 5) stries (筋, 縞) は四足獣のイメージで読む場合は彼らが描く跳躍の軌跡, 火山のイメージで読む場合は噴火した溶岩の軌跡を言うのであろう。
- 6) 嵐を掻き立て (irriter), 引き起こす (rompre)。この「嵐」の内実が次行の désastres (〔生命にとっての〕災厄) である。
- 7) irruants (侵入させる, 押しやる) は前行の désastres にかけて読む。
- 8) spumant は27頁第1行に既出 (同所註解参照)。
- 9) lient および次頁冒頭の repent の主語はないが、蛇のようなものが想定されているのだろう。

[45]

et déliantes reptent en hispides¹⁾ peurs):

Tout...

cahots et sauts ! et éventrements d'aiguës
douleurs aux végétaux et ! véhémentement
en²⁾ la silvestre nuit et des déserts nuement
et des ondes et leur allure, qui³⁾ vont — nues
et haletantes épouvantes dans le vent :

Tout...

cahots et sauts ! et lointains mouvant nuits nues
de vie épave⁴⁾ et qui pantèle dans le vent :
Tout l'errant mouvement agitant⁵⁾ aux désastres
des monts — quadrupédant⁶⁾ en des voix longues meut.

et la Terre est immense...

et sorti⁷⁾ vers l'air vaste :

(la pluie illuminante et lourde emplit les mers)
d'eux⁸⁾, qui quadrupédant longtemps manqua des Astres⁹⁾
Tout l'errant mouvement agitant aux désastres
des monts dévastateurs d'éperdus ! éperdu
arrête dans l'instant là nouveau, qui lent vente
de murmure sur leur doute¹⁰⁾ hëlant ardu¹¹⁾.

-
- 1) 形容詞 hispide は一般には植物が「剛毛で覆われている」ことを意味するが、ラテン語の hispidus はより一般的に hérissé (逆立てた) の意で、Gaffiot には「鱗を逆立てた体」という用例が挙げられている。
 - 2) この前置詞 en が次行の leur allure までを支配すると読む。
 - 3) この qui は四足獣を想定しているのだろうが (第 16 行にも eux と複数形の代名詞が現れるが、これも四足獣を受けると思われる)、文法的には第 3 行の cahots et sauts を先行詞としていると読みうる。éventrements 以下ここまで、および、続く nues 以下は、動詞 vont の状況補語である。
 - 4) épave は一般には「漂流物、残滓、落伍者」を意味するが、ラテン語語源の形容詞 expavidus は「怯えた」の意である。
 - 5) 他動詞の絶対的用法というよりは、本作品に特徴的な代名動詞的用法 (s'agiter) とと思われる。
 - 6) この形容詞は前行の mouvement にかけて読む。
 - 7) sorti は男性単数なので、前行の la Terre を受けるのではない。3 行前の l'errant mouvement にかけて

[45]

またそれを解いては、鱗を逆立たせるほど恐れ^{おのの}戦いて這っていく)
すべては……

よろめいたり飛び上がったたり！ そして、草木で腹に傷を負い
鋭い痛みを感じながら、そして！ 激烈に
森の夜、そして肌もむき出しに荒野を歩き
また水辺とその流れを行く——むき出しの
あえぐような恐怖を風の中で感じつつ：
すべては……

よろめいたり飛び上がったたり！ 遠くでは、風の中であえぎ
漂流する怯えた生のむき出しの夜を^{うごめ}蠢かし：
彷徨う運動の全体は、山々の災厄に遭って
逃げ惑い——四足獣が長い声をたてて動く。

そして、広がる〈大地〉の広大さ……

果てなき空にふと気を取られても：

(光輝く重たい雨は海を満たしていく)

彼らの中には、長き四足歩行のせいで、すでに〈星々〉を逸したのもいた
その彷徨う運動の全体は、山々の災厄に遭って
逃げ惑い、災厄に蹂躪されて度を失ったものたち！ 度を失って
新しく来たる時のうちに立ち止まる者が、自分たちの懐疑に
ぶつぶつと鳴き声を緩慢にあげて、高みへと苦しげに呼びかける。

↙ て読む。「果てなき大気へと向かう」として文字通り空に向かってしまうと訳すと、後続箇所——*manqua des Astres* (〈星々〉を逸した)——と齟齬が出るので、*sortir* の意味のうち「逸脱する、はみ出る」といった含意を出し、「地に足つけて」生きて行こうとしている生物がふと「空で生きること」に気を取られてしまった、と解釈しておく。

8) *eux* はここまで語られてきた四足獣たちを受けけるのだろう。次行と合わせて読むと結局「四足獣たちのうちで彷徨う運動 (*l'errant mouvement*) をなすものたちは」となる。この *mouvement* を修飾する関係節 *qui... manqua...* が前置されている。

9) 「〈星々〉を逸する」とは飛べないということ。*Astres* には「天空」の意味も込められていよう (20 頁第 10 行の註解参照)。

10) 飛べるかどうかをめぐる懐疑 (疑念) であろう。

11) *ardu* は一般には「困難な、峻厳な」の意だが、ラテン語語源の形容詞 *arduus* (高い) も踏まえて理解し、副詞的用法の形容詞男性単数形であると読む。

[46]

et de même inquiets, des parentages donnent
aux horizons l'appel divers de hauts sanglots
(va hâte et houle la vie! et vont les galops)
et des allers d'un ordre¹⁾ vaste et long ordonnent
alentour l'aventure de vie et de vent :

Tandis qu'épeurant loin²⁾ des vols de leurs³⁾ voltiges
aux vertiges un départ oiselant :
dans les végétations de pétales et
du vent, de nouveaux Advenus vont virants et
de doigts d'âpretés⁴⁾ agrippent⁵⁾ et vont !..

En suite

multipliant la quête du vœu génital
quand devient du vivant Tressaillement la suite.

1) ここでの *ordre* の語は難しいが、動物たちがとる「隊形」, 「隊列」と理解しておく。

2) この *loin* を単独の副詞ととり、*des vols...* が *épeurant* の意味上の主語とする読みと、*loin de...* と続けて、3行後の *de nouveaux Advenus* が意味上の主語とする読み（いずれの場合も *un départ...* が *épeurant* の直接目的補語）のふたつの解釈が可能であろう。ここでは前者に従って訳す。*aux vertiges* は *épeurant* にかけて読むが、*voltiges* にかけて読む（「目も眩むばかりの曲芸飛行」）こともできよう。

[46]

そして不安をともにした、類縁種たちは、
高らかな鳴咽の声も様々に四方の地平線に向けて呼びかける
(急ぐ、うねる、生命は！ そして駆け足は先に進んでいく)
そしてまた、果てなく伸びる隊列の様々な動きが
そのまわりで、生命と風との冒険の行方を定めていく：

他方では、遠くで空を行くものたちの曲芸飛行が
鳥となって出発することを、目も眩むばかりに恐れさせるので：
花びらをなし、風がもたらす植生の中で
新しく〈到来するものたち〉は様々に道を変え
ざらざらとした荒々しい指で掴み、進んで行く！……

そのとき

生殖願望の追求を繁殖させる連続となり
生命の〈震え〉の連続が生成する。

-
- 3) 空を飛ぶことのできる動物たち。
 - 4) 14 頁第 8 行の註解参照。
 - 5) 綴りは底本通り。動詞 *agripper* と理解する。21 頁第 8 行参照。

[47]

XII

et grands¹⁾ !

Tandis qu'épeurant loin des vols de leurs voltiges
aux vertiges un départ oiselant :

et grands

en²⁾ les droitures qui plus haut outrent³⁾ en sorte⁴⁾
végétant d'âges et longtemps nueusement⁵⁾
ondant le mouvement nuant de nuits, d'où sorte⁶⁾
le variant vironnement⁷⁾ par les grands doigts
(cri d'être et d'ire qui meurtrisse⁸⁾ au moment !
du haut vertige quadrumane⁹⁾ : en les droitures
des végétaux géants lointains dans les natures
les nouveaux Advenus vont et vont, dont l'exploit
croïsse¹⁰⁾...

(L'humidité vivante est un pullulement)

Tout le moment est un sanglot d'épais pétales¹¹⁾
couvrant d'arôme houleux et de ventements¹²⁾
la population en des sourdonnements¹³⁾
d'Antérieur, quadrupédante...

1) 冒頭二連の初めてくり返される *grands* は、文法的には二連目末尾（第 12 行）の *les nouveaux Advenus* にかかるが、意味的にはこの「新しき〈到来するものたち〉」の飛躍の場面全体を形容するものとして、あるいは、「新しき〈到来するものたち〉」が進化を進めていく *exploit*（功績）に対する一種の号令として、捉えることもできよう。

2) 以下の前置詞句は第 10 行の *en les droitures* 以下と同格で、その 2 行後の *les nouveaux Advenus* 以下の主節の状況補語である。

3) *outrer* は一般には他動詞で「誇張する」、「憤慨させる」の意だが、ここでは 29 頁第 4 行の *outrages* と同じくラテン語語源 *ultra*（向こう側へ、越えて）を踏まえ、代名動詞的ニュアンスの用法ととらえて、「どんどん伸張していく」の意に理解する。

4) *en sorte* は続く現在分詞 *végétant* とともに、「～といった状態で生長する類いのものとして」の意と理解する。

5) 33 頁第 3 行の註解参照。

[47]

XII

そして大いなるものたち！

他方では、遠くで空を行くものたちの曲芸飛行が
鳥となって出発することを、目も眩むばかりに恐れさせるので：

そして大いなるものたち

直立する木々がより高く伸びてゆき
時をかけ、色合いを雲のように微妙に変化させる夜々の動きを
長きにわたり雲のように波立たせる木々からは、現れてほしいのだ、
〔十本の〕大きな指を使って様々に回転する
(存在し怒る叫びはその瞬間に殺めるとよい！)
目も眩まんばかりの高みの四手獣が：大自然の中、
はるかに伸びる巨大な植生の直立する木々の間を
新しく〈到来するものたち〉は進み、進んで行く、その偉業が
いや増すようにと……

(生命の湿気が繁茂している)

あらゆる瞬間が厚みある花びらのすすり泣きとなって
うねるような香りと吹きわたる風で覆う
耳を聳するざわめきの音をあげる〈先に現れたもの〉の
集団、四足歩行するものたちを……

-
- 6) d'où の先行詞は 2 行前の les droitures (木々)。sorte は「願望」を表す接続法現在。
 - 7) 動詞 vironner (回転する、周囲を彷徨う) については 34 頁第 7 行の註解参照。ここでは猿が木の上で行う様々な回転がイメージされているか。本行および次々行はすこし意識した。
 - 8) 願望の接続法と読む。
 - 9) quadrumane は語源的に「四つの手を持つ獣」を意味する。ここでは猿のイメージととる。名詞でも形容詞でも用いられるが、ここでは vertige にかかる形容詞と理解する。
 - 10) 「願望」を表す接続法現在。croïsse の綴りは底本通り。
 - 11) 木々から次々に葉が落ちてくるイメージか。これまでも、花びらが落ちる様子と雨のイメージが重ねられて表現されてきた。
 - 12) ventement は宝典や Littré には記載がないが、Godefroy には « action du vent, le vent » とある。
 - 13) 43 頁第 2 行の註解参照。

[48]

Matinales¹⁾

désorientent vers des longtemps amples leurs
aventures les mers, et ouverts et meilleurs²⁾
les vœux d'Astre³⁾ ont ardé⁴⁾ saturant⁵⁾ les pétales
les vœux d'Astre ont ardé sur le monde plus droit⁶⁾
élevant l'instant pur⁷⁾,
et monte la sveltesse !

Mais,

(cet instant qui soit apte à qu'évanouis
en lui⁸⁾ ! soustraire⁹⁾ haut des Yeux¹⁰⁾ exempts d'ennuis
en¹¹⁾ est plus haut épié)
des poings de natales
vigues appréhendant les stipes (haut vitales
les ailes¹²⁾ !) d'autres vont ordinaires¹³⁾ et droits
et nouveaux quant aux pieds dont non prenants
les doigts :
et haute, leur Tête¹⁴⁾ d'intelligente angoisse

-
- 1) 女性複数名詞は前頁にはない。2行後に *aventures* と *mers* があり, *mers* にかけて解釈した。
 - 2) 男性複数形の *ouverts et meilleurs* は前行の *des longtemps* にもかけられるが, ここでは次行の *les vœux* にかけて読む。
 - 3) 単数形の *Astre* はこの箇所が初出。エピソードでは多く登場し, 54 頁には *Astre* に呼びかける箇所もある。太陽のこと。
 - 4) *ardé* は *arder* の過去分詞。*arder* は古風な動詞 *ardre* (*brûler, être en feu*) の異形。*ardre* の語は 52 頁第 12 行に見られる。
 - 5) ラテン語語源に倣って「養う」の意で理解する (32 頁第 8 行の註解参照)。太陽の光は木々を養い, 花びらを育む。
 - 6) *droit* は形容詞ではなく副詞と理解し, *le monde* ではなく *élevant* にかけて読む。
 - 7) *l'instant pur* とは, 次行の *la sveltesse* や 3 行後の *cet instant* とともに, 直立歩行の「瞬間」を指すのであろう。

[48]

朝になると

海は、時空の広がりの方へと彼らの冒険を
逸らせていく、そして開かれ、より良くなるようにと
〈星〉の願望は燃えあがり、花びらを養った
〈星〉の願望は燃えあがり、世界の上に
よりまっすぐに純粋な瞬間を掲げた、

さあ、すらりと立ち昇れ！

けれども、

(この瞬間は、そのうちに〈眼〉が消え失せればよいのだが！
高いところにいて倦怠を知らぬ〈眼〉から見えないものであってほしい
とはいえ、より高いところの〈眼〉からは窺われている)

生まれつきの

力強さを備えた拳で茎を掴み(高いところでは命を運ぶ
翅!)他のものたちは規則正しくまっすぐ立って進む
足とはいえば新たになり、掴めなくなっている

足の指は：

そして高く、彼らの〈頭〉をもたげ、知恵ある苦悩を抱えている

-
- 8) 難解であるが、qu'évanouis en lui!は挿入であるとして、qu'[ils (=les Yeux) soient] évanouis en lui (=cet instant)と補い、「願望」の意で読む。
 - 9) apte à soustraire...と読む。一般にはse soustraire à...の形で用いられる動詞だが、Littréには同じ意味でse soustraire de...の用例も挙げられている。また、ここではこの代名動詞的な意味を再帰代名詞なしで示す本作品の特殊語法と理解する。
 - 10) Yeuxはこの箇所が初出で、エビログにも同じく大文字で始まるかたちで現れる。大文字のYは葉を開くstipes(茎、葉柄)の形をいくらか連想させる。この〈眼〉の主は木に住む猿たちだろうか。
 - 11) Yeuxを受ける。より高いところにいる〈眼〉とは今度は神の眼、あるいは星々であろうか。
 - 12) 花粉を運ぶ虫たちのイメージを想定して「命を運ぶ翅」と理解する。この「翅」にはYの字のように広がった葉柄のイメージも重ねられているか。
 - 13) ordinaireの語は「常態の」、「秩序に適った、規則に従った」など様々な解釈がありうる。
 - 14) これまでは複数形で現れていたが、ここからはTêteと単数形で用いられている。

[49]

d'Yeux¹⁾, perpétuellement ! nouvellement là
ils montent de la masse des appétits à
cri d'être et d'ire qui meurtrisse !..

et puissantes et voulantes²⁾ parmi l'altesse
des grands stipes, apertement³⁾ érigent et
ouvrent une rupture ensanglantée en l'âpre
et garant poil que le diurne vent diapre
les volontés de génitoires et vulve⁴⁾ !

et

(en suite du vivant Tressaillement, en suite)

apertement devient l'unité d'une Loi.

-
- 1) d'Yeux は前頁末尾の intelligente angoisse にかけて読むことも可能だが、ここではつなげずに読む。
なお、d'Yeux は Dieu と発音が同じである。
 - 2) puissantes et voulantes は 4 行後の les volontés を修飾するものとり、これを érigent et ouvrent の
主語と解釈する。
 - 3) 綴りは底本通り。apertement と読む。

[49]

〈眼〉ゆえに、絶え間なく！ 新たにそこにあつて
殺めんばかりの存在し怒る叫びをあげる
欲求の塊からは離れて、彼らは立ちあがる！……

そして、力強く、望み強く、大いなる
茎々の高みのさなかに、はっきりと屹立させ、そして
血まみれの裂開を開く、ごわごわとして
身を守る体毛、昼の風が輝かせる体毛に包まれた裂開を
睾丸と外陰との意志は！

そして

(生命の〈震え〉が連続となり、つらなる)

はっきりと生成する、〈法則〉の統一が。

4) 53頁第13-14行の対応箇所を参照。

[51]¹⁾

vœu de Transport lent immanent à un volume
et au longtemps d'advenir qui dans lui-même ! est
qui n'a point et l'Avent et le Terme, et n'est lentes
qu'œuvres d'événements en l'immense et l'augment²⁾ :

vœu de Transport lent immanent à un volume :
Amour — germe dans lui de lui germant — Amour...

Au vallon de la Vie où le Millier agite :

Dans l'âge des natures longues³⁾ ! cet Astre⁴⁾ et
les astres illimités de nuit et de nues
nuaient les Yeux : et dénoués ont amples et
environnants erré les gestes⁵⁾ d'immortelle
hauteur, longtemps avérant l'Homme⁶⁾ :
déhérents⁷⁾ !

ils montent⁸⁾ déhérents de la nuit qui perpète
la masse des appétits lourde d'ire et d'être
ces Advenus :

et la Tête haute en l'exploit⁹⁾
de haut voir aux songes d'horizon, lent et droit !
Tourne¹⁰⁾ l'envie¹¹⁾ au loin que d'elle apprendrait-elle¹²⁾...

1) 50 頁は白紙。

2) この 4 行は 12 頁第 11-14 行と同一。以下、エピローグではプロローグと類似の表現が散見される。

3) 定冠詞付き複数形の *natures longues* が何を指すのかは悩ましいが、長く性質を変えない鉱物のようなものがイメージされていると読む。

4) 以下、大文字で始まる単数形の *Astre* は太陽を指す。

5) 太陽と星々の「身振り」と解釈する。

6) 高みにある天体が人間の精神性の象徴となるのはマラルメの作品にも顕著に見られる。

7) 26 頁第 9 行の註解参照。

[51]

ゆっくりした〈移動〉の願望は量塊に内在し
到来の長い時間にも内在するが、この願望は彼自身のうちに！存在する
それは〈待望〉も〈終末〉も持たず、増大していく
広大な世界に生じる様々な出来事がゆっくりともたらず働きにすぎない：

ゆっくりした〈移動〉の願望は量塊に内在している：
愛——おのれの内なる胚にしておのれ自身から胚胎する——愛……

〈無数のもの〉が蠢きを生み出す〈生命〉の溪谷では：

悠久の性質をもつ事物の時代にあっては！あの〈星〉と
夜の星雲をなす無限の星々とは、
様々な色合いで〈眼〉に映っていた：不滅の高みで行われる
〔天体の〕身振りは解き放たれ広大に取りまくものとして
彷徨い、長いこと〈人間〉〔の到来〕を証^{あか}していた：

結びを解かれて！

彼らは立ちあがる、重い塊となった怒り存在することへの
欲求の数々を遂行する夜への結びを解かれて
この〈到来するものたち〉は：

そして〈頭〉は、高く地平線の夢想の方を
ゆっくりとまっすぐに眺める偉業へと高くもたげられて！
それについて何を知ることになろうとも、羨望の眼差しをめぐらして遠くを見る……

8) monter は、48 頁ですでに語られた、二足歩行で立ち上がることと解釈する。

9) 直立して眼で遠くを見るという「偉業」。

10) 前々行の la Tête が主語。

11) 好奇心に満ちた「羨望」の眼差し。

12) que 以下は譲歩節。主語の elle は前々行の la Tête を受ける。d'elle の elle は la Tête や直前の l'envie も指示しうが、次頁冒頭の la sûreté de l'Astre grand を受けると読むほうがいいかもしれない。すなわち、地平線に到るまで空高く視線をめぐらし太陽の命運（たとえば落日）について何を知ることになろうとも、という流れである。

[52]

Ils adorent la sûreté de l'Astre grand.

Hésitants,

(car la mort ! quand¹⁾ meurt d'être ardent l'Astre
à leurs Yeux, et qu'en mouvement naissant mourant
luit la nuit de lueurs, ah ! qui met en mémoire
d'autres morts d'où naissaient de reptants végétaux)
Hésitants sous le doute horizontal²⁾, cri d'être
et dire !

et pleins de plainte et sursautant en peurs
(et la mort et la mort et la mort et la mort)
de ne plus voir de leurs Têtes élévatoire³⁾
ardre⁴⁾ et monter le générateur :
longtemps des mêmes Yeux muets qu'aux animaux
inquiets, ils avaient loin douté...

1) 以下、主節は現れないのでこの quand は直前の la mort にかかっている。

2) 地平線に沈みゆく太陽はそのまま死んでしまうのかという、太陽の永続性への懐疑と躊躇い。

3) élévatoire は一般には「持ち上げるのに役立つ」の意だが、ここでは élever に「育てる、育む」の意があることを踏まえて「生物を育むのに役立つ」と解釈し、次行の le générateur (生み出すもの、すなわち太陽) にかけて読む。

[52]

彼らは偉大なる〈星〉の确实性を崇める。

躊躇いながら、

(何故なら、死があるからだ！ 〈星〉が熱くなって死ぬのが
彼らの〈眼〉に映り、生まれまた死にゆく運動のうちに
煌めく星々の夜が煌めき、ああ！ 這うように広がる植物たちが
そこから生まれ出ている他の諸々の死を記憶に留めさせるときには)
躊躇いながら地平線を懐疑の眼差しで見、存在し怒る
叫びをあげる！

そしてうめき声をいっぱいにあげ恐怖で飛びあがり
(そして死、そして死、そして死、そして死)
もう自分たちの〈頭〉で、万物を生み出し育むものが燃えあがり
立ち昇るのを見られないのではないかと恐れる：
長いあいだ、不安な動物が持つと同じ押し黙った〈眼〉で
彼らは遠くに懐疑の視線をめぐらしていた……

4) *ardre* は「燃える、焼ける」を意味する動詞の不定形。

[53]

だが、この雄々しい災厄を高みから生き延びた者がある：

〈星〉だ！ 〈星〉だ！

彼らは偉大なる〈星〉の確実性を崇める。

そして、雄々しい災厄を生き延びた力！

ただ孤独の中で万物を生む燃焼を

高みから輝きとして注ぐ、その力を

充溢のうちに広がる広大な力に混ぜあわせながら

(存在し怒る叫びは殺めるとよい!) ああ！ 番^{つが}いでなかった

腹たちを長く番わせるのだから：彼らはそれらふたつの力の

栄光のうちにあって、いくつかの腹を何かざらざらした

骨のようなもので

仕込み、長く鋭い傷跡を与えた、そのことで

彼らの怪物性は〔自分を血で〕飾りたて、長く屹立させて開く

血の怒り！ 睾丸と外陰を〈星〉へと向けて

血を滴らせながら——

存在し怒る叫びは殺めるとよい、ああ！

-
- 3) éverser は一般には「外側に折り曲げる、反らせる」の意だが、ここでは太陽の熱が「外側にむけて発せられ注がれる」といった意味で用いられているように思われる。
 - 4) 他動詞 produire の絶対的用法とする。
 - 5) prolifique は宝典や Littré に記載なし。ラテン語の prolixus が pro-liqueo (前へ流れる、広がる) に由来することを踏まえた綴りであると考え、「長く広がる」の意に理解しておく。
 - 6) l'imparité des ventres (腹々の奇数性) とは「番いとなっていない雌」の意か。前行の現在分詞 unissant は「番わせる」の意に理解する。
 - 7) ont は助動詞で、3行後の過去分詞 ouvert とともに複合過去をなす。直接目的補語は des uns (いくつかの腹 ventres) と読む。動詞 ouvrir (作る、細工する) の含意は難解だが、生殖行為が前提されていると理解しておく。
 - 8) diaprer は他動詞だが、ここは代名動詞 se diaprer の意で読むしかないように思われる。
 - 9) 現在形の動詞 ouvre (開く) の直後に単純過去形の dressa (屹立させた) が置かれるのは奇妙だが、完了相を強調するものと理解しておく。このふたつの動詞は、キアスム的に次行のふたつの名詞——génitoires (睾丸、すなわち男根のメトニミー) と vulve (外陰)——を直接目的補語にしている (49頁第5行以下も参照)。
 - 10) ruisselant (濡れた) は直前の l'Astre よりもこの箇所の主語である ils にかかるのだろう。あるいは、génitoires et vulve にかかるのかもしれない。

[54]

Au vallon de la Vie où le Millier agite :

un vent lent et vagueur¹⁾ et qui n'est inquiet²⁾
loin émet la nouvelle évidente qui stride³⁾ :

et pour l'émute saltigrade⁴⁾, Tous viendront :
et mêlant, qui⁵⁾ survivent à leur long désastre !
à l'Astre, à l'Astre ! cet élan dont ils vivront
des ovaires ouverts et génitoires :

— « Astre !

Tout Te le⁶⁾ doit, qui nourris de vie, ô Toi ! le
prosternement lent et redressé hêlant⁷⁾, quand

Tout on Te voit issant d'où vers nous au haut⁸⁾ ! de
pitié de lumière et de pétales virant —
cri d'être et d'ire, ah qui meurtrisse ! quand on Te
voit.

1) vagueur は宝典や Littré に記載なし。vagueux (波うつ) の類語にも見えるが、Godefroy に errant を意味する形容詞として記載があるので、これに従う。

2) ここでの inquiet は「不安な」ではなく「たえず動く」の意。

3) 動詞 strider は 32 頁第 3 行に既出 (同所註解参照)。

4) émute は宝典や Littré に記載なし。émeute (騒ぎ, 興奮) を, 語源である中世フランス語 esmu (動

[54]

〈無数のもの〉が蠢きを生み出す〈生命〉の渓谷では：

ゆっくりと彷徨うがゆれ動くことのない風は
鋭く鳴くはっきりとした知らせを遠くまでもたらす：

そして飛び跳ね興奮して、〈すべてのものたち〉がやって来るだろう：
その長い災厄を生き延びるものたちが！ このものたちは
〈星〉に、〈星〉に！ 激情を混ぜあわせるのだ
開いた卵巣と睾丸とを彼らを感じるときの激情を：

——「〈星〉よ！

〈すべて〉は、生命で養う〈おまえ〉のおかげで、おお〈おまえ〉よ！
ゆっくりとひれ伏しては頭をもたげ〈おまえ〉に呼びかけることができるのだ、そのとき

私たち〈みな〉が〈おまえ〉が現れ出るのを見る、そして私たちに向けて中天から！
憐れみの光と花びら〔にも似た煌めき〕が回りながら注がれる——
存在し怒る叫びは、ああ、殺めるとよい！ 〈おまえ〉が
見えるときには。

き、興奮)になぞらえて表記したものと理解しておく。pour は原因を示す前置詞と理解した。saltigrade は 32 頁第 14 行の註解参照。

5) この関係節はコロンを跨ぐが前行の Tous にかかるものと読む。

6) le はつづく le prosternement... hêlant を指すものと理解する。

7) 底本では hêlant とアクソン・グラヴで表記されているが、hêlant (～に呼びかける) の意ととる。55 頁第 12 行も同様。

8) この文の構造は難解であるが、Tout on が主語、Te は(本頁の最後に見られるように) voit の直接目的補語で、これに関係代名詞 d'où がかかり、d'où 以下は現在分詞 virant が動詞の代用になっていると読む。文章前半は日の出の情景だが、d'où 以下は太陽が中天にあがった時点を歌っていると思われる。

[55]

Astre ! du minuit et gel qui sors vainquant :
Toi ! mourant qui nais perpétuellement, Te
haussant d'où¹⁾ Tu ne mourus (d'où viens-Tu) virant !

Qui ! vainquant emplis la mer plane au haut d'air de
longtemps et mets un vent doux dans les plantes, quand
Tout on Te voit issant d'où vers nous !

Toi qui Te
lèves et T'ouvres, Astre et pétales virant !
et (cri d'être et d'ire, ah ! qui meurtrisse !) qui, Te
haussant, lèves et ouvres un sanglot²⁾ : vainquant !

Tout Te le doit, qui nourris de vie, ô Toi ! le
prosternement lent et redressé hëlant, quand

Tout on Te voit issant d'où vers nous au haut ! de
pitié de lumière et de pétales,³⁾ virant ! » —

-
- 1) 破格だが、この d'où は場所の先行詞を内包する関係代名詞と理解せざるをえないように思われる。だが、つづく d'où の方はこの場所にかかる通常の関係代名詞であるようである。
 - 2) この sanglot は「嗚咽」ではなく、ラテン語語源 singultus (しゃっくり) の語義のひとつである「(鶏や鴉の) 鳴き声」を踏まえて理解されるべきであろう。
 - 3) 前頁の同文の箇所にはカンマなし。

[55]

〈星〉よ！ 真夜中と凍結からうち勝って抜け出るものよ：

〈おまえ〉！ 死につつも何度でも生まれるもの、〈おまえ〉が死ぬことのなかったところから（そこから〈おまえ〉は到来する）回りつつ昇って来るものよ！

〈おまえ〉！ はうち勝ち、大気の高みにあって凧いだ海を長いこと満たし植物たちの間には甘美な風をそよがす、そのとき私たち〈みな〉が〈おまえ〉が現れ出るのを見る、そして私たちに向けて！

〈おまえ〉、

昇り開かれるもの、回りゆく〈星〉と花びら〔にも似た輝き〕よ！
そして〈存在し怒る叫びは、ああ！ 殺めるとよい！〉〈自身〉は昇りゆきつつ鳴き声をあげさせ開かせるものよ：うち勝って！

〈すべて〉は、生命で養う〈おまえ〉のおかげで、おお〈おまえ〉よ！
ゆっくりとひれ伏しては頭をもたげ〈おまえ〉に呼びかけることができるのだ、そのとき

私たち〈みな〉が〈おまえ〉が現れ出るのを見る、そして私たちに向けて中天から！
憐れみの光と花びら〔にも似た煌めき〕が、回りながら注がれる！」——

[56]

Un vent lent et vagueur et qui n'est et ne ride
loin émet la nouvelle évidente qui stride
que le Mieux monte, et interroge...

Déhérents !

ils montent déhérents de la nuit qui perpète
la masse des appétits lourde d'ire et d'être :

quand en les lourds midis grandis haut stridule et
Titille qui n'alentisse d'air qui dure, et !
grandie erratile et multiple d'éveils, stride
mixte, plainte et splendeur ! la plénitude aride¹⁾ —

au vallon de la Vie où le lent Millier, est !



1) 以上の4行に似た詩節が32頁冒頭に見られる。erratile や strider などについては同所の註解を参照。

[56]

ゆっくりと彷徨うが存在もせずさざ波も立てぬ風は
鋭く鳴くはっきりとした知らせを遠くまでもたらず、その鳴き声は
〈最良のもの〉が昇り、問いかけると伝える……

結びを解かれて！

彼らは立ちあがる、重い塊となった怒り存在することへの
欲求の数々を遂行する夜への結びを解かれて：

そのとき、大きくなる重々しい真昼において、高く鋭い音をあげ
軽く触れていくのは、滞留する大気の流れによっても速度を落とさぬもの、そして！
大きくなり彷徨い様々な目覚めで一杯になりつつ、
うめきと輝きの混ざった鋭い鳴き音をあげるのは！ 乾いた充溢——

それは〈生命〉の溪谷、そこではゆっくりと動く〈無数のもの〉が、存在している！